
吸血鬼にも愛は必要？(仮)

U16

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼にも愛は必要？（仮）

【Zコード】

N1259Y

【作者名】

U16

【あらすじ】

西暦2100年。世界は緩やかな停滞期を迎えていたが、20世紀から大きく変わった事は吸血鬼という存在が世界中で認められた事だった。そんな中、新たな吸血鬼が極東の島国である日本で生まれた……

第0-1話 新世紀を迎えて……（前書き）

この小説は筆者の自己満足小説です。
予告なく文章が変更、改訂される恐れがあります。
ご注意下さい。

第01話 新世紀を迎えて……

恐らく彼は、自分の30年に満たない人生の中で、最も驚きに満ちた顔をしていたのではないだろうか。

美女。美人。綺麗。

学校に通っていた時も文系ではなかつた彼の頭の中には語彙が少なく、その3つの単語しか出てこなかつた。

彼は、こんなにも印象的な女性を見たのは、初めてだつた。

西暦2100年を迎えてからまだ2日目。

テレビをつければトップモデルや女優、ネットアイドル等これでもか、というくらいに整つた顔立ちや扇情的なボディラインの女性を見る事ができる。そんな現代では、彼女程度の顔立ちの美人はいくらでもいるだろう。

はつきり言つてしまえば、ありふれている。少なくとも彼の偶アイ
ドルオタク
愛好家な友人は、そう評価するだろう。

先進国
経済的富裕国。 そう呼ばれる国々の医学は革新的な発達こそしなかつたが、個人登録パーソナル登録とDNAレベルでの病気の予防を兼ねた健康診断。この一つを小学校に入学する前の子供が済ませるのが当たり前になり、成人するまでの病気での死亡率は、ほぼ『0』になつた。それと同時に流行したのがDNA形成型整形手術だつた。個人登録パーソナル登録と同時にDNA形成型整形手術を受け、成人するあたりで美男美女になれるよう、DNAをいじるのが当たり間の世の中である。

そんな早期美容整形が当たり前になつたせいもあり、世の中はよ

流行

り本質重視になつた。

第一線で活躍する人材は、顔は良くて当たり前。スポーツ選手であれば運動神経や力よりも技術、芸人なら面白さ、役者は演技力、歌手は歌唱力、モデルであれば完璧に維持されたスタイルを駆使した無言の表現力、そういつたDNAの書き換えでは得られないモノが重視された。主義主張のぶれるコメントーターなど過去の遺物でしかなかつたし、テレビからも見た目だけの中身のないものは排除された。

人は日々の努力が無くては得られない部分が評価され、物であればその本質的な価値以外、全く評価されない時代が半世紀も前から続いている。

そんな訳で彼からすれば、見慣れた程度である筈の女性から西暦1980年代生まれの曾祖父の影響で『でも20世紀あたりなら、間違いなくトップモデルだつただろうな』等と頭の片隅では考えていたが 何故か目が離せなくなつた。

灰色っぽい髪。同色の瞳。

もしかしたら昼間見れば銀色のかもしない髪と眼が、彼の心を驚掴みにしているので彼は身動きが取れなかつた。

彼女は温暖化のせいで、冬なのに本気でコートを着込む人も少なくなつてしまつた日本には珍しい、厚手の純白のコートを肩に羽織つてゐる。

そのコートの合間から見えてゐる服は紺一色のロングのワンピース。柄や模様が特に無く、体のラインが出る様にデザインされてゐるせいで、スタイルが良いという事ははつきりとわかつた。そして、そんな服は日本ではなく、超の付く高級品である事は彼の乏しい知識でも認識できていた。

服装もそうなのだが、日本人ではなかなか見かける事のない腰の高さが目を引く。不健康に見えない程度に透き通るような白い肌と相まって、外国人なのだろうと考えていた。

彼は、そんな彼女をじっと見つめて観察していた事に対し『失礼だよな』と思い至る。謝罪しよう 会話したかっただけかもしれない として、外国人なら言葉が通じないかも知れないと気付く。急いで携帯を取り出そうとしたが 携帯電話の10ヶ国語翻訳機能を使おうと思い付いたのだ 彼女から目が離せないまま、何処に入れたのか分からぬ携帯電話を探し、手探りで服のあちこちのポケットを漁る。

「…………やっと外に出て來た……遅すぎです…………

焦らなくても良いですよ。逃げたりしませんし。」

「え？ あ、すまない。ジロジロ見て申し訳ない。日本語が通じて良かつた」

彼女もまた、俺を見つめたままでいてくれた

……いや、違う。言葉が通じて良かつた……

でも何故だろう。彼女の表情は、家で飼っていた猫がよくやつていた表情に似ている気がする。

拗ねた様な 喜びを隠しながらも、怒っていますという感情を出そうとして出し切れない表情 『もう二度と目を離しませんよ』そういう眼差しで見ている。と、彼は何故かそう思った。

彼は寝正月を満喫する為、たまたま無くなりそうな煙草と酒を補給する目的で、嫌々ながら家から出てきて彼女に会った。

大晦日の終わりまで続いた仕事からやっと解放され、家に辿り着いたと思った瞬間に曾祖父を含む、家族全員に強制的に近場の神社へと初詣に連行された。

近場の神社で たしか学業と雷の神様を祭つていたはずで、『

学生でもない俺には意味が無いんじゃないか?』という彼の意見は、家族一同に却下された。年越しと初詣を済ませて家に戻つてからは、一步も外に出ていなかつた。

正月だし、商店街から少し離れたコンビニエンスストアぐらいしか開いていない。どうせ車も走っていないのだ。歩道橋を上がらず道路を渡ろうとして、歩道橋の下にいた彼女から目が離せなくなつた。

目が合つた瞬間から、本当に一度も目を逸らしていない。瞬きすらしていないんじやないかと、自身がそう思うほど見つめていた。彼女の言動をもつと見たい。彼女について知りたい事が溢れてくる。それにも関わらず、彼の体は何も行動を起さなかつた。じつと見つめ、彼女の出方を待つことしかできない自分はヘタレだと、彼は心中で凹んでいた。

彼女の視線や表情は、先程からの彼の予想通りの意味を持つていた。が、それに加えて少しころか120度位、方向性の外れた事を具体的には、此処で会つたが百年目。如何にして今迄の鬱憤をぶつけて困らせてやろうか。という様な少々物騒な事を彼女は考えていた。

もちろん。彼にはそれは解らなかつたし、彼女は現段階の彼が解つていなくて困らなかつたし、仕方のない事だと理解していた。

故に彼女は思惑通り、普段とは違う可愛らしい仕草で話しかけた。

「携帯電話は、もう出さなくていいの?」

「え。あ、いや。もし外国人なら翻訳機がいるかな、と思つただけで……」

「連絡先を聞きたかった。とかではなく?」

「あ、いや。教えてくれるなら聞きたいけど……って、ちがう! ナンパじゃないんだ!」

「あら、そうなの。ナンパなのかと少しは期待したんですけど……」

そう言つて彼女はお上品に口元に手を当ててクスリ、と笑つた。その瞬間、彼は自身でもはつきり分かるぐらいに顔が熱くなつた。

あー、やべ。今マジで真つ赤になつてゐるわ。マジかよ。今幾つだか言つてみる俺! 28歳、四捨五入すりや30だぞ! ? 色々経験も積んだだろ? うが! ?

彼は何故そうなるのか訳が分からなかつたし、その思考を始めすべての事が彼にとって、もはや意味不明だつた。からかうよつと話しかけてくる彼女の意図も、自分のヘタレっぷりも。

何故、彼女の態度から勝手に意思を読みとつたつもりになつたり、彼女の行動に好意を期待したりしているのか。

彼は少なくとも恋人どころか、妻すら居た事のある身である。妻とは一年前に離婚し、それ以降どんな女性にも普通の友人曰く、醒めた対応だけはできる様になつたはずだつた。なのに、何故こんなに焦つているのだろうか。彼の頭の中は整理するどころか、幼稚園児の書いた題名のない絵の様にぐちゃぐちゃで訳が解らなかつた。

「今まで半信半疑……いえ、信じてはいたのだけれど、からかわれている可能性を捨て切れなかつたのよね。でも、本当にあなたの反応は私にそつくりね。初めて私を見つけた時のアナタの気持ちが少しだけ分かつたわ」

「え? あれ? 初めまして、だよな?」

「ええ。あなたとは初めてまして、よね。それとも『どこかで私を見かけて、ずっと追いかけてました』なんてストーカーまがいの事でもしてくれたのかしら?」

「してねえよ! いや、そんな顔するな! マジでしてねえよ、そんな事!」

明らかに、からかっています。という様な言い方の彼女に聞くべき事は分かっているはずなのに、全く話が進められない彼は感情をぶちまけた。

「訳わつかんねえよ! あーくそ! とにかく! 俺は『彼方^{かなた} 壱郎^{いちろう}』だ! 覚えておいてくれるとありがたい、つか嬉しい!」

「あら。自己紹介をしてくれたのは嬉しいのだけど、私は今は名乗る訳にはいかないの。ごめんなさい。」

「ああ。なんか訳ありなのか?」

「そうね。呼ぶなら、『レイ』と呼んでくれる?」「そうね。なんか訳ありなのか?」

「ああ。構わない」

壱郎は彼女の名前が、別に偽名でも何でも構わなかつた。彼女との会話もおかしい部分がいくつがあつたが気にならなかつた。話せただけで舞い上がつていたし、彼女の言う『初めて私を見つけた時のアナタ』も壱郎の事ではなく『アナタといつ名の誰か』だと、すぐこう認識した。

なぜなら、壱郎は変な名前については慣れていたからだ。壱郎の『彼方』といつ名^{名字}字^{列遺}も曾祖父の代からの物で、アナグラム^{文字列遺}であり、元の名字は『田中』だった。曾祖父の両親が事故で亡くなり、天涯孤独となつた後で『どうせ名乗るのは自分一人なのだから、カッコよくしよう!』と名字を変えたらしい。曾祖父本人曰く、『黒歴史

だそうだ。

この壱朗の曾祖父の『黒歴史』が無ければ、壱朗の名前は『田中壱朗』などという、下手をすれば『記入方法の見本』の様な名前になるはずだった。

そんな『黒歴史』のお陰で『記入方法の見本』となる事は避けられた壱朗だったが、同時に嬉しくない『黒歴史』をも刻んだ。

高校に入学し、2ヶ月ほど経った頃だった。一つ年上の先輩が『どうせならズスキやサトウなんて珍しくもない名前じゃ嫌よね。…』という訳で彼方クン、私と付き合ってくれない？ 結婚したら私は「佐藤」理沙から、「彼方」理沙になるのよね。可愛くない？』という訳のわからない理由の告白に、壱朗は『マジ可愛い。芸能人にいそうな名前だ』等と言って即OKした。高校一年にして、初めて彼女ができる事に有頂天になつた。

当時から偶像愛好家な友人と共に居たせいもあり、中学ではモテる事のなかつた壱朗は、邪魔しようと躍起になる友人達タクな親友 を排除し、高校一年の冬には初体験も済ませる事ができた。

そして、人生を謳歌していたはずの高校一年の秋に、リュウキ・リヴィングストンというハーフの転校生が突如現れ、転校生が来るのが突然なのは当り前だったが、残念な事にその転校生に彼女を寝取られたせいで、彼女との交際は壱朗にとつて思い出したくない『黒歴史』となつた……

などと自身の過去を思い出し、顔が綻んだり凹んだりしている壱朗を見かねたのか『レイ』と名乗る女性が気を使って声をかけてくれる。

「あの、名前言えなくて」「めんね？ そんなにショックだった？

初体験の記憶

寝取られた記憶

もしかして姓名判断愛好家?」

「あーいや、そうじゃないんだ。『彼方』つて苗字と姓名判断愛好家には良い思い出が無いというか。うん。それを思い出して凹んでただけだから」

レイの言つ姓名判断愛好家とは、19世紀に流行った姓名の字画から運氣や将来性を判断する物などではなく、壱郎の初めての恋人の様な『どうせ世の中は美男美女ばかりなんだし、付き合うなら良い名前の恋人の方がいい』という考え方の人種の事だ。実力主義の風潮が強い日本では、壱郎も含まれてしまうのが、成績的に底辺に近い高校や大学出身者には、こういう男女が多くいた。何しろ実力が底辺なのだ。親の資産が名前以外はみんな似たり寄つたりだからである。

だからこそ、と良い名前の恋人を望む男女は姓名判断愛好家などと言われていた。実力主義の風潮が強い日本で親の資産などを気にしていると『金の亡者』などと言われイメージが悪すぎる為、自然と姓名判断愛好家が多くなつてしまつてしているのが現状だ。

「そ、そう? 最後の方はかなりの哀愁を背負つてるように見えたんだけど……」

「大丈夫。大丈夫。……ちょっと振られた事思い出して凹んだだけだから……」

その瞬間。

壱郎はレイに両肩を鷲掴みにされ、歩道橋を支える柱に背中を押しつけられて睨まれていた。

「い、ま、な、ん、て、言、い、ま、し、た、か?」

「え? え? 『思い出して凹んでただけだから』?」

「その前です!」

「ひつ。『大丈夫、大丈夫』」

『俺の状況は全く大丈夫じゃなくなつたけど』とは、壱朗は口が裂けても言えそうにはなかつたが。

「その後です！…」

「ちょっと振られた事を思い出して……『セリー』……え？」

「誰に振られたんです？」

「え、いや……」

壱朗はあせりながらも頭を必死に働かせよつとした　あれ、なんか彼女の口調変わつてる？　これはあれだよな、ナンパまがいの事をしておきながら他の女の事を考えてたのを怒つてるつて事だよな？　やばい、謝らないと。とにかく機嫌を直してもらわないと。でもさつきまでの反応と、これだけ怒るつて事はそれなりに俺の事を気にかけてくれてるつて事だよな？　上手くいけば一年ぶりに彼女ができるかもしれないかな？　が、考えている事は現状の把握と無駄な妄想だけで、何一つ解決策が出てきていない事には気付いていない。

そこに追い打ちをかけるように、低く、唸る様に地獄の底から響いてきたかの様な声でレイが囁く。

「誰に『振られたのですか』？」

「い、いや、もう10年以上前の事だしだ」

「そんな事は、聞いておりません」

「え、あ、はい。解りました。話します……」

怖い。怖すぎる　そんな脳内警告を受け何故か丁寧に対応してしまう壱朗。

初詣帰りだらう、通り過ぎる家族連れや恋人同士の通行人達の目にはへタな男の浮気が彼女にばれて、問い合わせられているようこしか見えなかつただろう。

しかし、壱朗の側からするとそこまでされなければいけない理由は解らない。ナンパだと思つてゐるなら、彼を置いてこの場から立ち去ればいいはずだ。無理に追いかける度胸など、ヘタレな壱朗は持ち合わせていない。

壱朗には全く解らないし、理不尽だと思つたが、彼女の表情が『もちろん答えてくれますよね？ ええ。拷問しても聞き出しますよ？』と言つてゐる。『自称、及び他称：ヘタレ壱朗』には何故か、逆らつてはいけないという神の声が聞こえている様で、大人しく答える事にした様だ。

「えつと、高校一年生の時の初めてできた彼女が…………」

壱朗は答えながら、『そうだ。こんなに気になる彼女に会えたのも、きっと昨日行つた神社の神様のお陰だ。だからこの神様の声には従つておく方が良い……はずだ』と、自分を納得させていた。

……学業と雷の神様としてはかなり評判のいい神社が、縁結びにも御利益があるなどという話は地元の人間ですら聞いた事が無かつたし、壱朗は近所の商店街でも有名になつてゐるヘタレだという事実。この一点には精神衛生上の都合により、大いに目を瞑つておく事にしたらしく…………

第01話 新世紀を迎えて……（後書き）

感想やアドバイスを頂いてもお返事出来なかつたり、文章に反映出来なかつたりします。それでも私は感想を書いてやろうぢやないか！という方のみ感想をください。一年ほど色々な小説を読んだあげくとにかく妄想から生まれた文章です。設定や話の内容で類似のものが何処かにある場合はこつそりと教えて頂けるとありがたいです。盗作と呼ばれる様な類似性がある場合はこちらが削除、または改訂します。（内容はともかく時期的にこちらが先の場合は検討します…）

第02話 吸血鬼が生まれた日（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第02話 吸血鬼が生まれた日

レイの態度が豹変した後、二人は歩道橋の下に積み上げられた工事用の資材の上に座り、結構な時間話し込んでいた。いつの間にか手渡された缶コーヒーを片手に、過去に付き合った3人の女性と妻であつた女性との成れ染めから顛末迄を、原稿用紙20枚程度の文章で説明させられたあげく、その後数時間に渡つてどんなプレゼントを贈つたか等、詳細を暴露させられた。

家を出た時は暗くなり始めたばかりだつた筈の景色も、今では既に真っ暗になつた。生れてからずっとこの街に住んでいる壱朗は、全く人通りが無くなつた事や周辺の雰囲気から、もつすぐ日付が変わるのであう事を予測していた。

「大体の所は理解致しました。あまり時間もありませんので、このぐらいに致しましよう」

「ソウデスカ。御静聴アリガトウゴザイマシタ」

レイが白銀の煙管^{キセル}を持った手を膝^{キセル}の上から持ち上げ、腕に着けた高級そうな時計を確認した後、煙管^{キセル}に刻み煙草を詰める作業を始めたのを、俺はじつと見つめる。

話の合間に壱朗が煙草を吸い始めた時に、彼女も白銀の煙管^{キセル}を何処に持つていたのか 鞄から取り出し、足を組んで煙草を吸いだした。壱朗は女性が喫煙するのにはあまり好まなかつたが『アナタと一緒に時はたまに吸つっていたんです』と過去形で言つたレイの表情のは、愁いを帯びたものに変化していた為、ヘタレな俺はそれ

以上は何も聞けなかつたし、何も言えなかつた。

別に足が綺麗過ぎて白銀の煙管を見る振りをして、綺麗な足に見惚れていたから、何も言えなかつた訳ではない。少なくとも今はそつじやないぞ、と壱朗は心の中で、誰かに必死に言い訳をしていた。その時

「吸いますか？」

そう言って差し出された、年代を感じさせる白銀の煙管からは俺好みのメンソール系の煙草の匂いがしていた。

差し出されたままの煙管を見て、といつよりも『吸いますか?』と問いかけたレイの言葉と態度が、とても妖艶な大人の女を感じさせるものになつていいたせいだ。『関節キスになるな』と青少年のような反応をしてしまい、『自分の煙草がある』と、煙草を出して断ろうと懐に手を入れたが、懐には煙草は無かつた。

足元を見ると、無残に散らばつた煙草の吸殻が十数本。話をしてるうちに、懐にあつた煙草は吸いきつてしまつていた様だ。

俺は現状を理解し、覚悟を決めて吸わせてもらつ事にした。

いや、覚悟が必要なのかと問わないで欲しい。目の前の女性は最初話しかけてくれた時は、二十代前半らしい可愛い仕草だった筈なのだが、今では夜のお仕事のお姉さんよりも色氣のある仕草で、こちらを誘惑しているのだ。

おかげでこつちは、今までの女性経験も全部吹っ飛んで青少年みたいな反応をしている有様だ。覚悟ぐらい必要だらう

などと心の中で誰に話しかけ、言い訳しているのかは知らないが、壱朗の頭の中は混乱しているようだった。もちろん、レイが今の壱

朗の頭の中を覗けたなら、誘惑なんとしていていないと否定するのは間違いないだろう。だが、少なくとも壱朗はそう感じていたのである

幸い、煙管^{キセル}は曾爺さんの物を吸わせてもらつた事があり、『下手な吸い方をして恥をかく事もないだろつ』と、壱朗は手を伸ばした。

「悪いな、自分の煙草は吸いきつちまつたみたいだ」

煙管^{キセル}を受け取り吸つてみると、曾爺さんの物とは何かが違う。メンソールの刻み煙草も珍しいが、何故か終わりがない。普通は3回程しか吸えないモノだ。それに、今の自分の様に粹な吸い方に見せようとして、5回も吸つていれば灰が入つて来てもおかしくないのだが、と覚悟が必要だつた割には、余裕を持つて平然と吸つていると……

「……関節キスですね……」

「ブホッ！！」

今、明らかに吸いこんだ瞬間を狙つて言つただろつレイの声に、咳き込んでいる壱朗は目で苦情を訴える。そんな壱朗に、百人いれば百人が見惚れる様な微笑みを浮かべながら、レイが話しかける。残念ながら、レイの笑顔を堪能する余裕は今の壱朗にはなかつたが。

「……煙管^{キセル}は落とさないで下さいね。貴方から貰つた大事な物です。私は初めて吸つた時には煙管の吸い方なんて知らなくて、何度も吸つてむせてしまつて。不思議でしょ？　これは特別な作りの煙管でして、10回くらいは吸えるんです」

そう言いながら壱朗の手から白銀の煙管を取り上げたレイは、微

笑みながら躊躇いもせずに口に持つていき、残りの数回吸うと煙管を片付け始める。

「初めて、煙管の吸い方を教えてくれた時の貴方は数回しか吸えない事をわざと黙つていて、私は吃驚させられたんですよ？」

「俺は曾爺さんが煙管派だから、吸い方くらい知つてたよ……」

咳き込んだせいか、目尻に涙を溜めながらも壱朗は言葉を返し、手に持つた空き缶の中に足元に散らばる煙草の吸殻を詰めはじめる。元々、壱朗は吸殻を道端に捨てる様な人種ではない。レイとの会話に集中しすぎて、気が回らなかつただけだつた。

「ええ、だから詰まらないので、吃驚させたくつて……これでお相子ですね」

「つていうか『アナタ』つて人に騙されたからつて、俺にこんな悪戯するなよ。俺を吃驚させてもお相子にはならないだろう。……それよりも、大事な物なら俺なんかに吸わせてよかつたのか？」

「構いません。貴方も怒らないでしき」

不思議な部分の多々あるレイの言動だが、壱朗はそれに対しても故か嫌悪も疑問も感じなかつた。レイがたまに見せる、どこか会話を懐かしんでいる様な表情は壱朗の頭の中をその度に真っ白にしたし、他の事がどうでもいいと思える程印象的だつた。恐らく今、会話はできていても『明日には何を話したかなんて覚えて無いだろうな』と壱朗は思つていたし、何もなければ本当にそうなつていただろう。

「そう、か。……ならいいけどな

「そろそろ時間の様です。きちんと説明しなければいけませんね」

名残惜しいが、煙管^{ヤセル}を片付け始めたあたりで、時間がそう残つていい事は気付いていた。壱朗は認めたくはなかつた様だが。

しかし、遅くまで話込んだせいで、家族に説明でも必要になるのだろうか。やはり育ちの良いお嬢様なのか？ もしかして、家族との約束を破らせたりしていなければいいが。などと壱朗は考え、謝ろうとした。

「あ、そか。帰るよな。」めんな。変な場所に長居させて

「いえ。そうではありますん」

「え？ それは……『…………』…………ん、電話か」

着信を見ると、父親からだつた。壱朗がレイを見ると、『…………』と身振りで勧めてくれたので、片手で詫びて電話に出た。そして壱朗は、携帯電話を耳にあてたまま凍りついた。

「嘘だろ？ 親父、曾爺さん今朝まで思いつきり走つてたじやねえかよ！」

「…………吸血鬼…………そつかあの化け物どもが…………」

「ふざけやがつて、曾爺さんが何したつてんだ！」

「ああ、とにかく今すぐ戻る。待つてくれ」

壱朗の父親からの電話の内容は、曾祖父の訴報だった。彼の曾祖父は120歳などという妖怪じみた年齢でありながら、化学の進歩と医療の発達のお陰で痴呆症を発症する事もなく、毎朝元気にジョギングしていた。

流石に120歳という年齢は、現段階では人間の世界基準で見ても最も高齢な部類の人でもあつたし、あと10年生きるのは無理だ

と医者からも言われていた。

だがそれでも、今日いきなり死ぬはずもなかつた。曾祖父は医療用マイクロマシンの投与も受け入れていたし、何より今晚は壱朗の友人の偶像オタクと、1990年代のグラビアアイドルについて語り明かす約束をしていた筈だ。

曾祖父は約束を破つた事が無い事が自慢で町内では有名人だったし、壱朗はそんな曾祖父が好きで、その影響も多分に受けていた。

壱朗は携帯電話をポケットにしまい、何度も深呼吸をしてみる。落ち着こうととはしているが、上手くいかなかつた。体がまるで壱朗のモノではない様に感じていた。壱朗の意思に反して小刻みに震え続ける体が、それを明確に物語つていた。

吸血鬼。裏付けや確証のある記録に残つてゐる分では、西暦2000年あたりから世界中で認知された存在だと言われている。その存在の情報が一般人にも公表されたのは、2050年頃の事だつた。きっかけは、中南米のある大統領が退任演説中に自分が吸血鬼だと表明し、その場で自分の首を完全に切り離して見せた。もちろんそのままで生活できるはずもなく、すぐに元通りにしており、一時はCGや特撮ヤラセではないのかという議論が持ち上がつたそうだ。その後、世界中の先進国が自分の国にいる吸血鬼について一般人に公表した事もあり、認知された存在となつた。

2000年あたりから、大きく進歩することなく行き詰つてゐた医療技術は、吸血鬼等の存在の恩恵により緩やかにではあるが発達した

その事件から50年が経つてゐる。

壱朗の生れた時には既に当たり前の存在だつたし、曾祖父がその恩恵である医学の進歩のお陰で、毎朝元気に走つてゐる事もあり、

比較的受け入れていい側の人種だと壱朗自身は思っていた。が、やはり身内が被害にあうと『化け物』と言ってしまう事からも、心のどこかでは人間ではない人外の存在達を区別して見ていたのだろうと自覚した。

壱朗の心は落ち着き始めていた。しかし、体の震えが一向に収まる気配が無い。訳が分からなかつた。『今すぐに帰つて、詳しい事情を知りたい。友人にも知らせないといけない』と、思つてゐるのに体が動かない。

レイは気付いていた。

彼女は壱朗の身に何が起こつてゐるのかを正確に知つていた

「壱朗様、落ちいて下さい。私が、貴方様の傍にいますから」「レイ？ 何を言つてゐるんだ？ 僕は落ち着いているだろ？」「手を見て下さい。こんなに震えています。これでも落ち着いていふと？」

「あれ？ 何だ？ おかしいじゃないか、体が言う事をきかない」「壱朗様、失礼致します」

レイは羽織つていたコートを傍に置き、正面から壱朗に抱き付いた。

そして、壱朗の耳に口を寄せ、促す様に囁く。

「私を乱暴にして頂いても構いません。強く、強く、自分が生きていると実感して下さい。壱朗様の心は生きる事を望んでいるはずです。体の変化を心で受け入れてあげて下さい。……吸血鬼として生きる為に」

「つううううつ……があああああつ……！」

壱朗の心にはレイの言葉は届いていなかつたが、彼女は壱朗がどのようにして許される存在だという事だけは本能で理解していた。

壱朗の腕は意思とは関係なく、レイの服を破りつとする。しかし
破けない。

普通に考えれば、ただの人間に服など簡単に破れる訳はない。
しかし、既に壱朗は人間ではなくなり初めている。

簡単に破ることのできる程の力がかかつっていた。それ以上にレイ
を傷つけまいとする壱朗の意思の力か、壱朗がレイを引きはがそう
とする力は、尋常なモノではなかつた。

「壱朗様。お気使いは無用です。御自分の為だけに力を振るい下
さい。傷つけて頂いてもすぐに治ります」

その言葉が引き金になつたのか、壱朗はそのままレイを抱き締め
ると、その体を細切れにしようとしているかの様に、引っ張り、搔
き鳴り、暴れた

第03話 過去への旅立ち（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

壱朗が暴れ始めてから一時間が経過し、やっと壱朗の体は落ち着きを取り戻した。腕はレイの体を抱きしめたまま、全く離そうとしなかつたが。

「壱朗様。もう落ち着かれましたでしょうか?」

「ああ、大丈夫だ。ほんとうに、すまない」

壱朗は知つてしまつていたからこそ、無意識に『嘘』をついた。

壱朗は理解していた。

自分が一体何になつたのかを。

そして同時に何故、自称『レイ』にそこまで心惹かれたのかも理解した。

目前にいる自称『レイ』も同じ、いや、似た様な存在なのだと理解していた。

壱朗は頭の中を何とか整理しようとしていた。

曾祖父が殺された。家で壱朗の友人との約束があつたはずの曾祖父が、外に出て吸血鬼に殺された。曾祖父にとつてはいつも通りの行動だつた。財布を忘れた時も届けてくれた事があつた。走つて追いかけ、忘れ物を届ける。そういう役目は曾祖父の役目だと家族みんなが思つていた。役目がある事は曾祖父が痴呆症を発症させない事にも繋がる。そんな風に話し合つた事すらあつた。しかしその役目のせいで曾祖父は死んだ。吸血鬼が許せなかつた。それ以上に壱朗自身を許せなかつた。曾祖父が外に出たのは壱朗を追いかける為

だつたと父親が言った。『ビリセ魔してもすぐに氣づくだろ？』と教えてくれた。

壱朗は今何をしていた？

壱朗は女性と話をしていた。

壱朗は曾祖父が襲われていた時に。

壱朗は女性と話す事に夢中になっていた。

やり直したい。

やり直したい。

やり直したい。

か？

壱朗が吸血鬼になつてしまつたのは自分の罪の意識からだつたのか？

壱朗のせいで曾祖父を死なせた罰だつたのか？

壱朗が吸血鬼？ 女性もそうなのか？

やり直したい。

やり直したい。

壱朗は人間も吸血鬼も許せない

やり直したい。

『「過去に戻つてやり直したい」』

そうして『真祖』『彼方 壱朗』は生まれた

落ち着いた。そう判断したのだろう。自称『レイ』はそのままの抱き合ったままの体勢で話しかけてきた。

「話をしても、よろしいでしょうか？」

「いや、家に帰らないと。曾爺さんの事があるんだ」

自称『レイ』も同じような存在だと気付いて、少し嫌悪していた。嫌悪を感じ取つたのだろう。少し悲しそうな声色で話を続けようとする。

俺を抱きしめた手を、自称『レイ』は離す事なく続けた。

「その曾祖父様の事についてですが」

「…………」

「曾祖父様を襲つたという吸血鬼の、名前も、血族も、血統技能も、居場所も、何もかも調べられますし、お教えできます」

「…………」

「貴方様のお望み通りに致します。如何致しましょうか」

俺は十分程考えた後、はつきり言った。

「仇が取りたい。俺ができないのなら、できる誰かに依頼したい。そう言つたら可能かな？」

俺は答えは分かつていたが、一応聞いてみる形は取つた。

「貴方様の手で果たせますし、果たすべきです。その為に最初の四千年を費やした。そう聞いております」

俺は自分が何になつたかを理解した筈だ。何を手に入れ、何を失つたのか。ガキの頃、ヒーローを夢見た事もある。だけど、俺には無理だと心のどつかで思つてた。でも今は違う、俺には力があり、何ができるかが分かつてる

『血』が教えてくれる。
俺の血統技能は『時間跳躍』だと。

「やっぱりそうしたんだな。俺は」

アビコロイ

「はい。ただ、初めて跳んだ時は血統技能に気付いていたかどうかまでは覚えていないので、気付いた場合にだけ言って欲しいという伝言を預かっております。『聞くかどうかは俺に判断を委ねろ』と言われております」

俺が人間だった先程までは打つて變つて、自称『レイ』の対応は実に丁寧だつた。丁寧だつたが焦つてているのか、無理をしているのが分かつた。

「何か急いだ方が良い理由があるのか？」

「はい。今の貴方様は、生りたての力の安定しない真祖です。その状態の真祖は一世、三世の吸血鬼にとつては力を上げる、極上の餌となりますので」

「レイは一緒に行くのか？」

「いえ、貴方様お一人で行つて頂く事になります」

壱朗は今の状況とこれから事を少し考えて、結論を出す。

「伝言、……聞いておくか。その様子じや、レイに会えるまでに結構な時間がかかりそうだ。声も覚えておきたいしな」

「つつ！」

タイム・バラドックス
世界の修正力との衝突を避ける為、あまり情報は持たずに行くのが望ましい。

一つ目。調べるのは血の力と時間の関係。睡眠中もそれは起るのか。

二つ目。同じ存在を一人存在させると、何が起るのか。

三つ目。人として研鑽を積む事は出来るのか。

私は曾祖父の仇を筆頭に、命を無意味に弄ぶ吸血鬼を排除する

……以上です」

「……大それた事を言うもんだな」

「それが許される、世界でたつた一人のお方です」

「そうか。それじゃあ、すぐにでも行くか。

それより、なんだか分からないが言いたい事は我慢せずに言つていいぞ?」

「はい…………すみません。後の負担になるかもしだせますが、我が儘をお許し頂けますでしょうか」

恐らく、自称『レイ』は壱朗の眷族なのだろうと気がついていたが、どうこう扱いをしてきたのかさっぱり分からぬ壱朗は『とりあえず自由な方が良いよな』と結論付けていた。

「…………いいよ」

すると、自称『レイ』は素早く体を離し、壱朗の前に跪く。そして、壱朗の『左手』を取り、額に当たた後に薬指に歯を立て『血』を吸い出す。

「…………痛ツ……」

吸い出した後、動物が傷口を舐めるように優しく舌が這わされた。結構な痛みを感じたのだが、すぐに治ったようで左手の薬指には傷すら残つていなかつた。我が儘を許すと言つた以上、何も言えず我慢していた壱朗に自称『レイ』が声をかけた。

「わ、わたくし、レティシア・フェルナリーゼは、この身が滅ぶ、その瞬間まで、貴方様にお仕え致します。…………つづ！」

きつと、求婚^{プロポーズ}に近い意味を持つ儀式なんだな。耳の先まで真つ赤だもんな。ずっとこんななら可愛いのになあ。詰問される時はほんと怖かっただし。いやでも、だからこそ傍に置いたんだろうな

などと自称『レイ』いや、ティアの額に触れた左手を動かして、

壱朗は頭を撫でながら考える。

「あの…………聞こえていると解つておられて、やつてありますよね…………」

「…………うん。なんとなく。血が教えてくれた。レイに、いや。ティアには触れていれば、想うだけで通じるって

人間だった壱朗はもういない。真祖としての壱朗はティアの知っている壱朗と同じように柔らかく微笑み、黙っている。

「……そういう意地悪な所は嫌いです。優しくして下さいとは言いませんので、お願ひですから嘘はつかないで下さい。……それだけで、いいんです」

「嘘ついたの？ 僕が？」

約束は守れと曾爺さんに躊躇られた僕が、嘘なんて付くのかなあ

「はい」

「なんて？」

「……えっと。その。私が……『生まれて初めて愛した女だ

と……』

だから、あんなにも僕の過去の話に食いついてきたのか。
しかし、あり得ないな。何百年も生きると僕は嘘つきになるのか？
いや、待てよ？ 初めて会ったのが今日……いや、もう昨日かな。
だとすると……

「ん~。ティアこそ、嘘ついてない？」

「ついた事などありません！」

「そうかな？ 僕は『ティアに出会って初めて愛を知った』なんて風に言つたんじゃない？」

ティアの表情が驚きに染まる。『何でわかるんですか？』『過去の、いや未来の？ 記憶まで引きずり出せるように能力が上がったんですか？』『こんなにも早く？』という様な意思が伝わってくると同時に、その表情がとても分かりやすい、拗ねた様な表情に変化する。

「……そんな感じだったかも知れません……」

「嘘じやないよ。『人間だった彼方 壱朗』はひとつ『レイ』を見た時に初めて愛を知つた。他の嘘は分からぬけど、それだけは嘘じやないよ」

壱朗の今の言葉に嘘はない。ティアにもそれは伝わった。

きっと壱朗の過去は、本当に愛のある物では無かったのだ。御飯事の様な、憧れだけの付き合いや結婚だったのだ。別れて当然とも言えるだろ。そう理解したティアは、壱朗の前で嬉しさを抑えきれず、顔が堪え切れない前に姿勢を正した。そして壱朗から少し離れ、空気を変えようと口を開く。

「…………私も待っていますので、向こうに着いたらちゃんと解るよ」と、言つてあげて下さる

情報を持って行くなど、言に従つ為、ティアに財布や携帯電話などをまとめて預け、流石に服ぐらに良いよな。とも思いながら、言葉を返す。

「今のティアみたいに、泣いてないといいけど」「泣いてなんていません！」

空気を変える事などできる筈もなく、言い負かされた悔しさよりも嬉しさから、田の端に涙を溜めているティアを後目に壱朗は考え、決意する。

過去のティアに会つていいか。曾爺さんの仇を取る力を得る為に

覚悟を決めた瞬間。壱朗の周りの景色がぼやけ始め、陽炎のようになにやらぬりと漂い始める。

ああ、真祖つてこんなに簡単に力を行使できるのか。すごいな

「ティア、帰つてきた俺をよろしくな

「はい。御迷惑をおかけするとは思いますが、未熟な私をよろしく

お願いします

「任せとけ」

ゆらゆらと陽炎の様に、かすれて見えなくなつていく壱朗に、ティアはこの数十年の間で考えた『会心の一聲』をかける。

「愛していますつ！ 御主人様つ！」

最後に吃驚した表情をティアの心に残したまま、壱朗の姿は消え去つた。

ティアも壱朗が眠りに就いてから知ったのだが、21世紀初頭には爆発的な人気を誇つた、形だけのメイドのいる喫茶店は壱朗が生まれた頃には、完全に衰退していた。そして今も生きているサブカルチャー愛好家達の間ですら、メイドに御主人様と呼ばせる行為は、過去のモノとして嘲笑の対象となつてゐる。

逆にそれが可能な存在は、本当の意味での超上流階級層であり、名実ともに貴族、華族、名士等と呼ばれる事に恥じる事なき実績と血族を持つ者だけの特権になつた。

つまり、先程まで此処にいた壱朗は庶民であり、御主人様等という呼び方をされる事は会社の宴会で酔つ払つても経験した事のない、赤面モノの罰ゲームか何かだと認識していたハズである。

事実、ティアは壱朗と共に三千年もの時間を過ごしたがその間ずっと『御主人様』と呼ぶことは禁じられていた。

『してやつたり』とティアはその豊かな胸を張つて、やりきつたと思っていた。だがしかし、ティアのこの行動のせいで向こうに着いた直後の壱朗は、あまりの恥ずかしさに地面に転がつて悶えていた。

そして壱朗は『次にティアに会つたら絶対に苛めてやる！』『絶対に御主人様とは呼ばせない！』と決意するのだが、ティアがそん

な事には気が付く筈もなかつたのである。

第04話 記憶と帰還（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第04話 記憶と帰還

『元人間』 壱郎』を送り出した現在、ティアはすぐに『真祖』 壱郎』を迎える為の準備を始めていた。

世界の修正力との衝突を避ける為、『真祖』 壱郎』は絶贊冬眼中なのだった。

壹郎の曾祖父が生まれる以前の、西暦1900年から、曾祖父が殺されて壹郎が真祖となる2100年迄の二百年間を衝突が起これば、壹郎の存在が消えかねない時期として認識し、その時代に活動する事を避けていた。世界大戦も起こる為に紛争のない地域に、自分専用の地下四〇階ぐらいの墓所を掘るという徹底ぶりだ。墓所の場所は、戸籍が偽造しやすいお隣の大國を選んだ。

そして『真祖』 壱郎』を迎える為の門を開く準備を済ませ、起きてぐるのを待ちながら、『元人間』 壱郎』の顔を思い出す。

生りたての壹郎様、ちょっと目つきが優しかったなあ……

日本で幼年期整形が流行り出して五十年。今では三十代までの男女の90%が、普通以上の美形だ。残りの10%のうち9%が超美形。1%が不細工でありたい変わり者か、幼年期に手術をしないまま忘れている者だ。

だが、吸血鬼は血に大きく左右される生き物だ。だからこそ幼年期のDNA形成型整形手術が効果を発揮しない。もし整形していたとしても吸血鬼のDNAは医療用のDNAなどよりもはるかに強く、本来あるべき顔に戻してしまう。

西暦2000年あたりの、シリコンを入れるなどの整形手術をする

れば、おそらく整形も不可能ではないだろう。

しかし、吸血鬼は赤外線や紫外線すら視認できてしまふ存在だ。
そんな吸血鬼からすれば、顔に異物を混入する整形など不細工にしてい

いと^{いと}言つてゐる様^{にしが見えない}にいるのと同じ事である。

恐らく、向こうでは『元人間 壱郎』の顔も本来あるべき造りに戻つてゐるだろう。ティアが知つてゐる『真祖 壱郎』の顔との差は、ほぼ無かつたが。

それは壹郎の祖父のせいでもある。彼が元々、日本人らしい強面の顔つきで、美形とは言わないまでも渋い男前であつた為、特に整形は必要無いと家族に幼少の頃に判断されたのだ。

吸血鬼で顔を変えた者は血統技能で変身や変装の能力を得た者が、長い時間をかけて少しずつ、顔の骨格の形を変えた者しかいない。

だが、吸血鬼の血統技能^{アビリティ}は基本一人一つだ。

理論上、核爆発クラスの力でも血統技能^{アビリティ}で身に着くかも知れない吸血鬼が、その血統技能^{アビリティ}が変身や変装等の能力だつた場合、その吸血鬼は余程の事が無い限り、吸血鬼社会では弱者になつてしまふだろう。

吸血鬼の能力は大きく分けて二つある。

吸血鬼であれば誰でも持つ種族能力^{スキル}。

吸血鬼の真祖から派生する血統技能^{アビリティ}。

種族能力は吸血鬼であれば誰でも使えるし、覚える事ができる事から『能力』と呼ばれる。血統技能は血統の者しか使えない為、『血技』と呼ばれている。

種族能力は『吸血』『不老』『再生』『怪力』『霧化』『蝙蝠化』

『浮遊移動』などの、吸血鬼であれば誰でも得る事のできる全部で

12種類の能力であり、訓練や血の力の強さでその効果は変動する。しかし限界もある。例えば、『霧化』したからといって霧の量が、吸血鬼の元々の体積を超える量にはならない。

アビリティ
血統技能は種族能力とは違い、その血統の真祖の『血技』に左右され、自分の系統の真祖の『血技』の派生版を得る。どの程度の違いが出るかは血の濃さによって変わる。『血技』は吸血鬼が経た年数や訓練により、強弱や能力そのものを変質させる事が可能だ。種族能力とは違い、今のところ、その効果の限界は知られていない。

現在のアメリカ合衆国には2人の真祖がいるが、そのうちの一人の真祖の『血技』は『重力』である。彼は真祖に生りたての時は、その『血技』で1t程度の物を持ちあげるのが精一杯だったが、移民である白人に迫害され、怒りにまかせて能力を振るうなどの過程を経て、約千二百歳の現在では、一二三級航空母艦（約8000t）すら持ち上げる。

ティアは自身の『血技』を使用して習得した、結界術の一つである『ゲート』を発動させている。これは指定した場所との空間歪曲移動を可能にするものである。

ティアは壱朗の曾祖父が『彼方』を名乗つてからずつと、『彼方壱朗』の生まれる環境を守る為、『彼方一族が不幸に襲われない結界』を張り続けてきた。2100年元旦に壱朗が初詣に来るまでは、ほぼずつと神社の地下に籠りきりで結界を維持していた。

タイムバラードックス

世界の修正力との衝突を避ける為、今まで壱朗の姿を直接見れなかつたのだ。今日からは壱朗の家に押しかけ、子供の頃の写真など色々見せてもらおうと心に決めていた。

もちろん、ティアは壱朗が反対した時に対しての『言い訳の口実』も考えていた。百年近くもの間、張り続けた『彼方一族が不幸に襲

われない結界』が消滅した事で、幸福量保存の法則に従つて、その反動から彼方家には不幸が降りかかる筈だ。

だから家に住み込んで、家族の皆さんを守らなければいけない。という言い訳だ。

ちなみに幸福量保存の法則が否定されようとしても、壱朗の曾祖父が吸血鬼に襲われて死亡したのは、ティアが結界を維持できなくなつたせいかもしれないと言うつもりだし、それを口に出す事を許す程『壱朗様』は酷い主では無いとティアは認識している。

そして、旅立つた壱朗との『帰属儀式』の正式な完了により、彼方血族の眷族になつたとティアは思つていた為、今まで彼方一族が避けてきた筈の不幸が、ティアにも降りかかる筈だとティアは考えていた。

その時、不意に不穏な気配を それなりの吸血鬼の 感じ、ティアは肩に羽織つたコートをきちんと着込む。

壱朗以外
見知らぬ吸血鬼等に、壱朗様の為に整えた体つきを、間近で見せてやる義理はないわ。先に『成熟した真祖 壱朗』が起きて来ていれば、綺麗に着飾つた自分を見せられた筈なのに……

そんな風にティアは考え、思惑を見事に破壊してくれた存在に苛立ちながら、身なりを正す。

『 キンツ 』と澄んだかすかな音のが鳴つた後、人間の胴体よりも太い氷柱がティアの後方から飛来し、襲いかかる。それを壱朗の指示で習得した武術のお陰で、振り向く事もなく認識する。その氷柱を紙一重で躱す。大事な 壱朗が冬眠する前に最後に

選んだティアのお気に入りの 純白のコートが汚れない程度に離れて、ではあるが。

「何か用があるのなら、まずは名乗りなさい。いきなり攻撃を仕掛けた等と、どこの下賤の者ですか？」

ティアはそう言つてはいるが、氷柱という攻撃方法を認識した瞬間に、相手の素性はおおよそではあるが見当を付けている。フランス在住の真祖、『ラマルティーヌ卿』の一¹世以降の者だろう。『水氷』の血技は『氷の貴公子』とも呼ばれる、ラマルティーヌ卿の系統が最も有名だ。ただし、『水氷』の血技以外にも氷柱を作り出すだけならば可能な為、『水氷』を真似ている可能性を考えて聞いているに過ぎない。

「女。先程、此処で生まれた真祖がいるだろつ。今すぐに差し出せ振り向き、歩道橋の上に佇む男の顔見る。服装は上質。金髪碧眼で身長も高く腰の位置も高い。白人系だ。そして、男の顔がそれなりに整つた者である事と、ティアを真祖だと勘違いしなかつた事から、三世以上だと判断し、男を侮辱するべき言葉を選ぶ。

「『氷の貴公子』は眷族の躰もできない方だと有名ですが、名乗りも上げられないようですね。それとも、四世以降の当主の顔も分からぬ程度の吸血鬼なのでしょうか？」

三世より血の濃い吸血鬼にとって、四世代以下に見られる事は屈辱以外の何物でもなかつた。

「女。五体満足でいられると思つなよ！ 真祖共々、四肢を切り落とした状態で我が主の元へ届けてくれるわ！」

男はそう言いながら両腕を前に持ちあげ、『怪力』を発動させたのか、指と爪が四肢を引きちぎる為の鋭さを持つ、凶器へと変質していく。

ティアは確信する。『これで相手はラマルティーヌ卿の手の三世代間違いない。一世ならラマルティーヌの姓を許可されているはすだから、プライドにかけて名乗る筈』と。『恐らく、日本に唯一の真祖がラマルティーヌ卿への借りを返す、ところが名目で日本の真祖誕生の時期を教えたのだろう』とも判断していた。

しかし、一番最初に問題を起すのが、ティアが嫌いなラマルティーヌ卿とは。『これも降りかかる不幸の一環かしら……』などと考えながら、体勢を変え時間を稼ぐ為の台詞を考える。

「それが可能だとでも？ 我が主は今、『血技』の試技で此処を離れておられるがすぐに戻られる。『氷の貴公子』程度の千年も生きていかない真祖の眷族ごとき、我が主は相手にせぬわ。相手をして欲しくば、『城^{ホーム}』に逃げ帰り、主を連れて来くるがいい！」

今のティアは百年にも及んだ『結界』の維持と今開いたままの『扉』の為に9割程の力を失っていた。

だから相手を挑発し、近接戦闘を挑ませて体術と会話だけで、壱朗が戻るまでの時間を稼ぐ心算だつた。

「生まれたての真祖などに帰属した程度の分際で……我が主を侮辱する者は決して許さん！」

『帰属の儀式』を見られていた事という事は、この吸血鬼はかなり遠くからこちらの様子を伺っていた事を理解した。何故なら、この吸血鬼の気配は先程まで感じなかつた。という事は半径10km以内に居なかつたはずだ。

三世で10km程度の移動に、この位^{10分以上}の時間をかけると言つ事は、ティアにとつては大した相手では無いと判断していた。

ティアの表情から『大した相手では無い』という評価を読み取つた男は、その事実にさらに侮辱だと怒り狂い、『怪力』に加え『血技』を発揮しようとした。

「俺の眷族に何しようとしてやがる。餓鬼」ガキ

空間が軋んでいるのではないかと思わせる程の存在感を身に纏つた壱朗が、男の隣に存在していた。

「なつ」

「五月蠅い。喋らうとするな。口を開けるな。腐った豚の臭いが広がるだらうが」

その瞬間から、男は指一本ミリたりとも動かさなかつた。いや、動かせなかつた。動かせば死ぬ。呼吸すら、するなど自身の『血』が言つてゐる。

「御帰りなさいませ。壱朗様」

ティアは隣いる男を完全に無視し、優雅に頭を下げて挨拶をする。「おう、おはよう。ティア。俺は嘔吐きだつたか？」

「いえ。嘔吐きではなく、ただの意地悪だと、再度理解致しました」

「酷いな。俺に愛していると叫んだ癖に」

成熟した真祖 今の壱朗は旅立つた頃の記憶など、ほぼ覚えていなかつた。しかし、ティアの記憶を覗き、どんなやり取りをしたのかを知る事など、眠つても可能だつた。

「あ、あれは、可愛らしげに反応をなさる、壱朗様に申し上げたのです！ 意地悪な貴方様に言つたのではありません！」

「…………嬉し泣きしてたくせに」

「…………つ！ もうつ！」

そんな意地悪ばかり言つながら、膝枕も添い寝もしてあげませんよ！」

「それは困る。狭く硬い棺桶で眠るのにはもつ飽きた。今日はティアの膝枕で寝ると決めてるんだ」

「だったら、意地悪を言つのはおやめ下さい。…………棺桶が嫌だ、なんて言つ吸血鬼は壱朗様か、四世以下の吸血鬼ぐらうですよ…………」

「…………そつか？」

だがそれはそれ、と別にしたとしても、今日はずつとつむかおいた初めてを貰わないといけないしな」

その言葉を聞いた瞬間、ティアは壱朗が『冬眠』に入つてから一百年の間、考えない様にしていた壱朗との約束を思い出した。

「 つ――」

ティアは顔、耳、手、足、と肌が見えている個所を順番に、その全てを赤くして一言も言葉を発しなくなつた。

「さて、ティアが再起動する前に面倒事から片付けるか」

壱朗は隣に立つ吸血鬼に首から上だけを向け、完全に見下した目で命令した。

「 聞いてやる。名乗れ。餓鬼^{ガキ}」

第05話 待ち続けた約束（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

「 聞いてやる。名乗れ。餓鬼^{ガキ}」

男は目の前の現象が理解できなかつた。
できなかつたが言う通りにしなければいけないと『血』が騒いで
いる。

それを抑えられる程の力がなかつた男は、言われた通りに名乗る。
「……ふ、フランスはマコンにおわします真祖、ラマルティーヌ卿^{一世と同等}
が血族の三世のピエール・オリヴィエと申します。

我が主、ラマルティーヌ卿の命により、生まれたばかりの
真祖様をお迎えに上がりました」

「ふん。お迎に、な」

ピエールは知らなかつたが、壱朗はティアの用意した『門』の向
こう側で会話を聞いていた。つまり、ティアに『四肢を切り落とす』
などと暴言を吐いていた事も知つていた。

「わ、我が主は、新たなる15番目の真祖様の誕生を祝い、その将来を思えばこそ、フランスへの移住を……『黙れ。俺は話していい
と言つたか？ 名乗れと言つただけだ』……はつ。……」

生りたての真祖は、固有の血統技能^{アビリティ}を創生する力が血に込められ
ており、真祖の身体の安定するまでの百年間は、血の質が違う。
その血は一世、二世の吸血鬼にとって『^{生きた年数}血の熟成』と『努力』以外
の方法で力を得る絶好の機会となる。

真祖は他の真祖の血から力を得る事は出来ないが、人間の血液よりも魔力の回復には役に立つ。そして、生りたての真祖の血液は、

極上のワインよりも美味であり、処女の血液や精通前の男子の血液よりも、上等な嗜好品もある。

だからこそ、生りたての真祖は他の真祖に飼われる場合が多い。

吸血鬼はほとんどの場合、吸血鬼の子を成せない。

真祖以外が吸血鬼を産んだ例は一度もない。ごく稀に、真祖同士の間に真祖が生まれる事があるが、それも過去に一人だけしか例がない。

では真祖以外の吸血鬼には、子供が作れないのかと言われば、そういう訳ではない。ただ、百年かけても一人もできない場合が多い、それに生れてくる子供は何故か、唯の人間になる。そして、吸血鬼から生まれた子供が真祖となつた例も、その子孫がなつた事も今のところ一度もない。

故に真祖の血が欲しければ、誕生した者を見つけ出すしかない。

そう認識されているのが普通だ。

ピエールには訳が分からなかつた。過去に一度に渡り、自分より上位血族である一世の方と共に、真祖の捕縛を行つた事がある。

現在、真祖で12番目と14番目と呼ばれる方の時だつた。その時の生りたての真祖は、両方とも生れてから50年は経つていたが、それでも三世である自分でも、十分に連れ帰る事が可能な程度の力しか持つていなかつた。

しかもピエールは、三百年しか生きていらない三世でありながら、生りたての真祖の血を一度も飲み、三世としては世界でもトップクラスの吸血鬼の筈だつた。

「しかし、ラマルティーヌか……あのアンドレのクソガキが……一百歳ぐらいの時に、なりたての血は吸うなとお仕置きしたはずだつたが。あの程度じゃ、お仕置きが足りなかつたか？」

ピエールは目の前の真祖が咳いでいる言葉が信じられなかつた。

彼の言うアンドレとは、恐らくアンドレ・ラマルティーヌの事。つまり七百年以上も生きている真祖であるはずの我が主を『クソガキ』等と言つてゐる事になる。そんな事が言える存在はこの世に三人しかいない筈だつた。いや、四人か。

どちらにせよ、『生りたての真祖』にできる言動では無い。つまり、この真祖は先程まで此処にいた『生りたての真祖』ではないという事だらうか。確かに顔はほぼ同じだが、服装が違う。別の真祖が年齢と外見を調整して、同じ顔に見せてゐるのだろうか。

吸血鬼であれば『不老』で年齢を調節できる。訓練しなければ吸血鬼の外見は普通に年を取る。逆に訓練すれば赤ん坊の姿にもなるし、老人にもなる。もつともその変化には、年を取るのと同じだけの時間が必要となるが。つまり、10歳の姿の吸血鬼は70歳の姿になるのに60年かかるし、70歳の姿の吸血鬼が10歳の姿になるのにも60年かかるのである。大抵は気に入った年齢で現状維持をする。

しかし、ピエールの『血』が違うと騒ぐ。先程まで此処にいた『生りたての真祖』と目の前の真祖は同じ人物だと『血』が言つてゐる。先程『帰属の儀式』をしていた、眷族の女が従つてゐるのが何よりの証拠だ。

眷属は『吸血』によつて創られる。真祖が直接吸血し、創つた吸血鬼は一世。一世が創れば二世。二世以降は血が薄く、真祖とのつながりも希薄で力もかなり弱くなる。実際、四世以降の吸血鬼は、人間でも一流の武道家なら十分に相手にできるレベルに收まる。

吸血鬼が世界中で受け入れられている最も大きな理由は、吸血鬼全体の90%以上を占める四世以降の吸血鬼が、人間でも十分管理

可能な程度の力しか持つていかない事だと言われている。

一般人が四世以降の吸血鬼になつたとしても『霧化』や『蝙蝠化』で飛んで逃げられない限り、警察官二、三人で取り押さえる事が十分に可能だ。

しかし、三世より血の濃い吸血鬼は別である。世界に十四人しかいない真祖の大半が、人類との共存を約束しているからこそ大人しくしているが、弱点などを考慮しなければ、千年生きた三世ですら完全武装の軍隊一個師団に匹敵する。同じく千年生きた二世や真祖など、対比評価すら難しいだろう。

つまり、人間には簡単に管理しかねる自由を持つ者が三世以上。人類に管理可能なのが四世以下という明確な違いがある。そして、その世代の違いは百年程度の『血の熟成』では覆せない程に大きい。

『年齢による力の増加』
『血の熟成』⁴⁶ という意味だけで言つてしまえば、真祖が百かけて得る力は、一世ならば二百年かかる、三世ならば三百年かかる。四世以下は血が薄く何年かかるかも分からぬ。ただし、真祖は最初の百年で、のちの千年分の力を得る。

同じ時期に百歳を超えた血族の力の比率は、
真祖、一世、二世、三世、四世の順に、1000・100・100・100・100だ。

更に二百年経ち三百歳になると、1200・200・167・150となる。
更に千年経つて千百歳になると、2000・600・433・350となる。
一千年経つて一千百歳となると、3000・1100・766・600となる。

現在の最高齢の真祖が一千歳という事実を顧みれば、真祖以外の吸血鬼が力で、真祖を頂点とする吸血鬼社会を覆すには、六千歳以上の一世人が真祖を倒すしかない。九千歳の三世や一万一千歳の四世

でもいいが、どれも現実的では無い。つまり、西暦2100年までの吸血鬼社会では現状の序列を覆す存在はいなかつたし、不可能に近かつたのである。

「おい、餓鬼^{ガキ}。この時期に真祖が生まれる話を教えたのは日巫女^{ひみこ}で間違いないな」

ピエールは言葉を発することなく、首を縦に振るだけだからうじて答える。

「あの女……よし、新年の挨拶も兼ねて殴りに行くか……」

「あの。壱朗様。日巫女様とは仮ではありますが、不可侵の取引をしておりますので、それはちょっと……」

再起動を果たしたのか、ティアが壱朗の行動を止めようとする。

「何で、不可侵なんだ?」

「私の日本国内での結界の発動を、許可して頂く為です。煩わしい揉め事は避けるべきかと思いまして……」

「…………いや、殴りに行く。というか見てるだろ、あの女なら。もう一千歳を超えたババアだし、ティアの結界の中でも状況は見れてたはずだ」

「で、でも『約束』したんですよ?」

「…………」

「…………しかし。文句だけ言いに行く」

ピエールはすぐに主の元に舞い戻り、この状況を伝え、判断を仰ぎたかった。主の事をクソガキと呼び、^{年齢}血の熟成だけなら現在の吸血鬼社会の中でもトップのはずの日巫女様をババア等と呼び、殴る今まで言っている。

しかも、それが可能だと『血』が理解している事実に混乱していた。

ピエールは先程までの事を頭の中で整理してみた。

ピエールは生まれたばかりの真祖を発見し、その傍にいる女吸血鬼をどのように排除するかを考えていた。すると女吸血鬼は『帰属の儀式』を行っていた。つまり、女吸血鬼は『はぐれ吸血鬼』だつたわけだ。

『はぐれ吸血鬼』に相応しく、魔力も大した事はなさそうだったが『生りたての真祖』が、陽炎のように消えてしまった。もしかすると女吸血鬼の『血技』で逃がしたのかと、すぐさまその場所へと向かい、何らかの儀式を行っていた女吸血鬼に聞いただした。
その直後、消えた筈の『生りたての真祖』が服を着替え、尋常でない血の力とんでもない存在感をその身に宿して隣に立っていた。

消えてから再び現れるまで、1時間も経っていない。そして吸血鬼が最も信頼する、『自分の血』が同一人物だと告げている。

整理してみても、全く訳が分からなかつた。

なんとかこの場を離れ、主に早く伝えるのが最優先の使命だと考え この場に居たくない、逃げ出したいというのが本音だつたが

ようとした、その時、壱朗の目が再び、ピエールを捕えた。

「おい。餓鬼ガキ、さっきまでの無礼については、お前の主の責任だ。とつとと尻尾を巻いて帰れ。んで言つておけ、『14番目を連れて、一週間以内に謝罪に来い。来なければ、こちらから出向いてお前の絵画コレクションを全部燃やす』とな

「ひいっ！ 理解致しました！ 今すぐに帰り戻り、主にお伝えさせて頂きますです」

よく分からぬ言葉遣いになつたピエールに、壱朗は首を傾げて いたが『もう興味はない』とばかりに、犬を追いかける様に 手

を振られ、ピエールはその場を逃げ出した。

ティアは、ピエールの負け犬っぽさがなんとなく可哀想だつたが、壱朗の氣まずそうな雰囲気にから、弱い者苛めをした氣分になつたんだろうな。と察した。

「ようしかつたのですか？ あのまま行かせてしまつても
「問題ない。『タイムパラドックス世界の修正力との衝突』は起こつていない様だから、
これからは正体を隠す必要もない」

壱朗の目ターゲットが自分の服装に向けられた氣がして、ティアは純白のコートの裾や襟などの身だしなみが変でないか、さり気無くチェックした後、問いかける。

「では？」

「ああ、すぐにでも仕事を始める。まずは曾爺さんの仇の吸血鬼、その後、他の真祖のクソガキどもの、目を覚まさせる準備。そんなトコだな」

ティアはコートのポケットから符を取りだすと、目を瞑り額に当てる。

「確認致しました。犯人の吸血鬼は今、京都の街の貧民街スラムで死肉を漁つていますね。これが情報です」

追跡用に飛ばしている蝙蝠ターゲット といつてもティアの体の一部を『蝙蝠化』させたモノだが、をずっと犯人の吸血鬼に張りつかせていたのだ。そこから得た情報を式符に込めていく。

「よし、ちょっと眠気覚ましの運動がてら、行つてくる。

ティアは一応、俺の家族を頼む。その後は寝床を確保して、隅々まで綺麗に磨いておけよ？ 俺は一切我慢するつもりが無いからな？ 寝床の場所は任せるが、明後日までは滞在できる場所にしてくれ。

「そう言つて、壱朗は空へと浮かび上がつた。壱朗の背中には、飛

行を補助する透明な渦が四つ、五つ見える。その渦がロケットの様に力を吐きだす事を知っているティアは、壱朗が飛び立つ前に返事を間に合わせる。

「 つ！ は、はい。準備もちゃんと、綺麗にして、お待ち、して、あります」

その言葉が耳に届いた瞬間、壱朗はティアに視線をやりながら、尖った犬歯をかすかに覗かせてニヤリと笑つた。それをティアが目にし、再び顔が赤くなりそうになつた所で、透明な渦は爆発し、壱朗を空の彼方へと運んで行つた。

ティアはこの後の事を考えた。

「 これで恐らく、壱朗様は一時間以上は戻らないだろ？」
犯人の吸血鬼を消滅させるか、明日以降に虐める為に半殺しにして捕縛するか、どちらかを行うまでは。

壱朗様がそんな事をしている間に移動して、体を清めよう。壱朗様の家族の事と、寝床の事を頼まれたが、そんな準備はとっくに済ませているのだから。

私にしてみれば三千年も待つた初めてなのです。出会った頃は、それこそ私の方から何度もアプローチしてきましたが、『世界の修正力との衝突』の影響を理由に、やんわりと断られました。

壱朗様は『女を本気で抱くのは、もうすぐ死ぬ女だけだ』とずっと仰っていました。万が一、自分との間に子供ができる、『世界の修正力との衝突』の影響を受け、相手の女性かその子供のどちらか、もしくは両方が消滅してしまう様な事態を恐れている、との事でした。

ですから、近々死ぬ女以外を抱くのは、現代に戻る迄は我慢するつもりだと聞かされました。

壱朗様の旅立ち

今回の予定が『世界の修正力との衝突』を生む事もなく、無事に送り出した暁には私の全てを貰つて頂く。いえ、壱朗様は『ティアが嫌がつても徹底的に満足する迄奪つ』と仰っていましたね。嫌がる筈もありませんけど。それが冬眠する前の壱朗様と交わした『約束』でした。そして壱朗様は『約束』は守る御方です。

やつと正式な眷族に成れました、しかも今日が初夜です。もちろん、寝床は部屋から見える景色までをちゃんと厳選して、三ヶ月前から半年間前払いでの、高級ホテルの最上階を「フロア丸」と貸し切りました。下の階から天井を叩く阿呆が居ない限り、邪魔は入らないはずです。

1600年辺りのアンティークが搬入済み
自分好みの調度品に変えてあるホテルの部屋へと向かいながら、だんだんと実感が湧き始めたティアの頭の中では、嬉しさと恥かしさから生まれた妄想が凄い事になっていた

しかし、妄想の最中、ティアはふと氣付いてしまった。

最後の一線を超えないだけで、それ以外の行為で物凄く攻められ、ティアは三千年もの間ずっと、そんな壱朗の行為に満足させられたのである。しかも壱朗は、興が乗ると意地の悪さが三倍程になり、ティアの奉仕で壱朗が満足しても、ティアが失神する迄は絶対にやめない。

そんな壱朗が『本気で徹底的に満足する迄』の相手をして『明後日の自分は生きていられるのだろうか』と、かなり本気で不安になるのだった……

第06話 初夜と真実（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

『冬眠』から目覚めてから8時間後、腕の中のティアの身じろぎを感じ、壱朗は意識を通常レベルに覚醒させる。

「あ、申し訳ありません。起してしましたか？」

「いや、寝てはいなかつたと思う。まどろんでいただけの気がする。氣を使おうが何だろうが、今の状態のティアに『嘘』は意味が無い。触れていれば、全て理解されてしまうからだ。

ピエールを追い返してから、京都の街の貧民街区^{スラム}で仇の吸血鬼を捕捉した壱朗は、『縛符』と呼んでいるティアのお手製の札で、身動き一つできない状態にして、ティアの用意した部屋の隣に放り込んでおいた。

そして家族に、曾爺さんの仇を見つけたので追いかけると連絡を入れた。すぐに家に帰らなかつたのは、壱朗は曾爺さんが死亡した時の壱朗ではないからだ。

何千年を生き、友人を殺された事もあれば、逆に友に裏切られて殺した事もある。今すぐ家に帰つても、家族と同じ気持ちになる事は出来なかつた。

だからこそ、ティアと二人で部屋に籠つた。それから四時間。徹底的にティアを堪能した。まだまだ足りないし、やめる気もないが、それでも魔力を限界近くまで消費していたティアには、休息は必要だつた。

壱朗が散々注ぎ、つぎ込んだ魔力のお陰で、ティアの髪も元々の金髪に戻つていたし、肌の色も艶も先程までとは段違いに美しい。

壱朗が散々注ぎ、つぎ込んだ魔力のお陰で、ティアの髪も元々の金髪に戻つていたし、肌の色も艶も先程までとは段違いに美しい。

ティア自身の魔力も大体、元に戻つてゐるだろう。その分、体力は消費しているだろうが。

人間だった壱朗
過去へ旅だつた壱朗は知らなかつたが、初めて会つた時の銀髪にも見えた灰色の髪は、魔力を消費しすぎての白髪になつてしまつていただけである。ティアの目は灰色だが、髪は元々綺麗な金髪だ。

「壱朗様は、最初に何処に行かれたのですか？」

「最初か？ 空も飛べなかつただろうし、使えたのは能力の『怪力』

ぐらいだつただろうし、そのまま過去に飛んだだけだと思うぞ？」

「あ、そうですよね。私と初めて会つた時には、壱朗様は既に真祖としてもすごい方でしたので勘違いしてました」

ティアは壱朗の胸に顔を擦り寄せ、甘えている。今日までの二千年、心のどこかで不安を抱えていたのだろう。ティアの生まれた時代の知識では『時間跳躍』という概念がまず理解できなかつた。それが意識の共有できない不安の一つになつていて。逆に理解できてしまつてからは、余計に不安になつた様だつた。

とにかく『生りたての壱朗』を送りだしてしまえば、『世界の修^{パラドックス}スキル』は起こり得ない、壱朗はそう定義していた。

ティアが一人で百五十年間『結界』を維持できる魔力を得た時、この計画を実行した。壱朗が最大級の『結界』で墓所と棺を覆う。その中に自分を閉じ込め『冬眠』し、ティアが一人で彼方一族を『不幸に襲われなくなる結界』で守る。

ティアは『彼方』という姓が生まれた事を確認した後、西暦2000年から2100年までの百年間、神社の地下に籠り、地下で結界を維持し続けた。

たまに遊びに外に出たらしいが、それ以外はずつと籠り、上手くいつた時に壱朗としたい事を幾つも考えて、時を過ごしていたらしい。

そして『彼方 壱朗』は歴史通りに生まれて、無事送り出された。

ティアは時間の許す限り、三千年一緒にいても教えなかつた事を全部聞こうと心に決めているようだ。

「どれぐらい昔に跳ばれたのですか？」

「ん~。そのあたりは覚えてねえな。『魔水晶』、触つていいぞ？」

「あ、はい」

壱朗の背中には『魔水晶』が16個付いている。この『魔水晶』の数は吸血鬼の生きてきた年数に応じて変動する。ティアは抱きついた姿勢のまま、左手で背中を探る様に撫で、田辺での『魔水晶』を見つけてた。

「あ、ありました。初めは大正時代と呼ばれる時代に跳ばれたようですね」

ティアが『魔水晶』の内でも、最初の頃を記録している物を触りながら言つてくる。壱朗の記録や記憶に関する事を知る事が自体が、嬉しいのだろう。声が弾んでいた。壱朗もティアの触れている『魔水晶』に意識を集中し、思い出そうとする。

「あ~、そうだったな。初めは日本特有の古武術をできるだけ習得して、第二次世界大戦が起る前にアメリカへと渡つたんだつた」「第一次世界大戦、ですか……あまりいい時代では無かつたです。私も壱朗様が『冬眠』されてからは田巫女様の元にお邪魔していくほとんど地下から出ませんでした」

「まあ、『酋長』が生きてる限りは、もう一度とアメリカが戦争を起す事はないだろうがな」

「私はお会いした事がありません。どの様な方ですか？」

「そうだな、氣のいい爺さんって感じだな。もう千二百年は生きてるはずだ」

ティアは顔を上げ、壱朗の顔を覗きこむと不思議そうに聞いてきた。

「『酋長』様は千二百年生きておいでなのに、戦争を止めなかつたのですか？」

「止めようとはしたんだろうがなあ……」

「御存知ないのですか？」

「俺にとっちゃ、歴史への介入は禁忌タブーだつたからな。止めろとも言えねえし、協力もできなかつたしな。詳しい話は今度、『酋長』と酒でも飲みながら聞くつもりだ。今のアメリカは恐らく『酋長』が他の真祖ガキを抑えてるんだろ」

ラマルティーヌ卿と同じような真祖がアメリカにも居る様なモノなのが、ティアは理解したようだ。

「とにかく、大陸を変えて西暦900年～1900年の間を何度も生きたな」

「ずっと不思議だつたんです。何故、その期間だつたんですか？」
ティアとは最近の三千年しか一緒に暮らしていないが、それでも壱朗と一度、過去に跳んでいる。その時から考えていたんだろう。

「西暦900年より前に跳んで、誤つてティアの祖先を殺す訳にもいかないだろ？」

「…………っ！ そ、そういう事をしれつと言つのはまずいと思いませんっ！」

真つ赤になつた顔を隠す為に、ティアは再度、壱朗の胸に顔を埋め、掛け布団を頭の上まで引き上げた。

ティアは壱朗が西暦900年より昔に跳ばないのは、ティアが生まれてくるのを守る為だと初めて気付いたようだ。

世界の修正力との衝突から百五十年は身を守れる程の結界術タイムバラドックスが完成するまでは、『1900年の壁は越えられない』とティアはずつと教えていた。だからちょうど1000年遡るのは、ただの区切りだと勘違いしていた。

西暦900年にはティアは吸血鬼になつていた筈だ。

「今だから言つねど、ティア、過去に行く前の俺に『帰属の儀式』

しただろ。あれのせいで、俺はティアのある程度の情報を持つたま
ま、過去に跳んだ。しかも、出会った時から、触れてればティアの
思考は俺にダダ漏れだ

「……っ！！」

ティアは布団に籠りながら、壱朗のお腹を抓りまくつた。ティア
が触れているせいでティアの思考が壱朗に流れ込んでくる。

『恥かしすぎる！』二十歳超えた後なんて、毎晩の様にアプローチ
したし、毎晩ベッドに入りこむのに、さり気無さを装うのに必死だ
つたはずなのに！ なのにそんな思考がずっと伝わっていたなんて
！』

ティアは当時を思い出しだけで、悶え死にしそうになつて
ようだつた。

「ま、それを黙つてたのは、ティアが俺を送り出した時に『御主人
様』つて呼んだからなんだが」

「…………うう。やつたと思つたのに……仕返しできたと思つたの
に…………」

ティアはかなり血の濃い一世だったが、主を失つた後で壱朗に拾
われて帰属する事を望んだ。理由は簡単だつた。

『理性を失いたくない』ただそれだけ。

吸血鬼は記憶が脳の容量の限界を超えた時点で理性を失い、ただ
の獣と化す。吸血鬼であつたとしても脳の容量は人間と変わらない。
ただ、人間が30%以下しか使っていないモノを100%使えるだ
けの話である。

吸血鬼が理性が保てたとしても、およそ五百年が限界だ。それは
真祖だろうが、一世だろうが変わらない。五百年以降は何もしなけ
れば、人格を形成していた部分の記憶が消えてしまい、発狂し、理
性のない化け物になり下がる。

そして、そんな限界を安全に回避する唯一の方法がある。

それが『記憶の結晶化』である。

『記憶の結晶化』は吸血鬼の記憶とDNAを引きずり出し、吸血鬼の背中に『魔水晶』を作り出す。これは真祖にしかできない上に、どの記憶を結晶化するのかも真祖の判断に委ねられる。

そして消去も、破壊も、真祖の思いのままだ。

例えば、真祖がその血族者の性格が嫌いだった場合、性格形成する部分の記憶を結晶化し、背中に埋め込まずに破壊したとしよう。するとその吸血鬼は生きてきた記憶はあるのに、自分の好みや主義などが白紙に戻つてしまつていて。その為、『血』の指示に従い、ロボットの様に真祖の言葉にだけ従う様になつてしまつ。

一世以降の吸血鬼の寿命と運命は、真祖に握られているのである。どんなに一世や三世が力を手に入れて、物理的な強さで真祖を超えてしまおうが、『死』や『血の束縛』という概念から抜け出すには真祖に戻くしかないのである。

安全ではないが、もう一つ方法がある。

それは『脳の消滅』である。

ただ破壊しても、吸血鬼の脳細胞は時間が経てば、記憶も元通りに復元される。だが『聖水をかけ、炎で焼かれた脳細胞』には記憶が復元されない。外見的にも能力的にも復元はされるが、新しい脳細胞となつてしまい、あつたはずの記憶が消えてしまう。

この方法が安全でない理由は、『どの記憶が消えるか全くわからぬ』事だ。この方法がとられた場合、最悪、体の大きな赤ん坊の吸血鬼が誕生する。『魔水晶』が一つでも背中にあれば、そこから生活の方法などは復元できるだろうが、それすらない場合、本当の赤子と同じになる。体と力は化け物並みの、である。

医学の発達により、脳のどの部分が、どの様な記憶を司るか分か

つてきてしまつたが、それでも完全ではなく、自分で実験したいと言う吸血鬼も居ないだろう。

自分の姉が真祖になつた翌日に、ティアは一世の吸血鬼になつた。平穏に暮らせたのは初めの数年だけで、最終的には教会から迫害される。姉は、ティアを吸血鬼にしてしまつた事を悔み、ティアを村から逃がす為、真祖でありますながら民に殺される事を受け入れた。そこに前もつて知つていた壱朗がティアを迎えて来たのである。

そして今、壱朗の言葉でティアは気付いた。

『壱朗はティアの情報を持つたまま過去に飛んだ』 そう言つたのだ。つまり、迎えに来れるだけの情報は知つていた。

『壱朗は知つていて姉を見殺しにした』
ティアの吸血鬼化も、止めようと思えば止められた筈。

その瞬間、壱朗の腹を抓つていたティアの指に込められた力が、何倍にもなつて腹から血が噴き出し、肉がえぐれる。掛け布団で顔が見えないティアに、責める事もせず、壱朗はただ聞いてみる。

「…………恨むか？ ティア」

「…………解りません。『たら』『れば』に意味はない。そう教えてくれたのも壱朗様です。…………私は、壱朗様と共に歩む生き方以外、知りません」

「…………ですが、教えて下さい。何故、吸血鬼になるまで待つのですか？ 何故、姉も一緒に救つて下さらなかつたのですか？」

「…………待つた理由は『吸血鬼のティアが欲しかつた』ただそれだけだ。他には何も考えなかつた。ティアの姉の方も同じだ。誰もティ

アの主でいて欲しくなかつたから、見捨てた

『嘘』だ。壱朗の優しい『嘘』だつた。伝わつてしまつた事も分かつてゐる。

だが、壱朗は『嘘』をついた。

『『嘘』はつかないで、下さいと、お願ひ、したぢや、ないですか』壱朗の感情が流れ込み始めて、ティアは涙を止める事ができない様だつた。

『覚えてないな』

それも『嘘』。旅立つ壱朗へのティアの願いは、今も覚えている。忘れた事など一度もなかつた。冗談を言つた事や、言いにくく口籠つた事はたくさんあつたが、許されない『嘘』をついた事は一度もない。

ティアは壱朗の腹の傷に口を付け、癒そうとするかのよつに舐める。それと同時に当時の記憶がある『魔血晶』を探して、その記憶と感情の全てを見ようとした。

その当時、壱朗はティアの姉も助けようとした。その為にティアを迎えて行く時期をできるだけ遅くし、自分の『血の熟成』に五年もの時間をかけた。

吸血鬼は、生きれば生きる程、その力は増す。『血の熟成』と言う概念は壱朗の為にある様なものだつた。現代ですら日巫女の『血の熟成』が一千歳で最高だ。当時でそれの倍以上である。

力を得た壱朗は、できない事など何もないはずだと信じていた。だが、それは大きな間違いだと気付かされる。

世界に『絶対』はない、と。

ティアの姉の血技は壱朗の血技と同じく、特殊であり強力だつた。

強奪

ティアの姉の血技は、どんなモノをも奪う事ができる。そういう恐ろしい能力だった。血も、力も、『血技』も、奪う事が可能だ。能力の使用の代償に『血の熟成』を失うのだが、『血の熟成』すら奪えるのならば、補充は可能だった。壱朗の五千年もの『血の熟成』魔力の蓄積すら奪い、殺されかねない能力だった。

それを知つても、壱朗はティアの姉に救いの手を差し出した。
だが、ティアの姉はティアの為に死ぬ気だつた。強力すぎる『
強奪』は一世であるティアにも受け継がれ、そして一世であるが故
に、代償を背負わせていた。

ティアはティアの姉とは違い、『強奪』を所持するだけで『血の熟成』を著しく消費する。それは記憶を失うのと同じ。そして、ずっと消費し続けていた。

101

壱朗は悩んでいたが、ティアの姉は答えを出していた。
真祖

『ティアから血技を『強奪』し、自分が死ぬ』

そうすれば、ティアは死ぬ事が無い。

他の真祖に帰属し、その真祖の血技を得ても問題はない。
だが、ティアの姉真祖が生きていては、他の真祖へ帰属で

『血の熟成』と共に再び『強奪』の力に目覚めるだろう。 魔力の蓄積 五十年の蓄積

確かにその方法は有効だつた。壱朗は血技の研究でどういった受け継がれ方をするのか、十分知つていた。だが、壱朗も食い下がる。『自分ならばティアが吸血鬼になる前からやり直せる、過去を変えられる』と。

そして、ティアの姉は壱朗に笑顔で聞いた。
真祖

「それなら、もう既にやり直されているはずなんじゃないの？」

それ以降、^{真祖}壹朗は何もせず。ティアだけを助け、旅に出た。

ティアの姉とのやり取りはティアを助けた直後に『魔血晶』へと封じ込めておいた。思い出す事が無い様に、ティアに気付かれる事が無いように、と。それからの壹朗は、さらに歴史への介入を徹底的に避けるようになつた。

全てを知つたティアは、必死に取り繕つた陽気な声で話しかけてきた。

「『帰属の儀式』が成功した訳ですから、私も過去に跳べるんですかね？」

「ね、壹朗様？」

「…………そうだな。飛べるかもな」

「じゃあ、商店街で一週間前に食べ損ねた『2100年年越しパフ』も食べに行けますよね。一緒に行ってくれます？」

「…………ああ、過去の俺に会わない様に、ならな」

「生まれたばかりの壹朗様の顔も、見てみたいんですけど、いいですか？」

「…………俺は病院には入らないけどな」

「じゃあ、じゃあ……」

「…………お姉ちゃんを助けに行きたいって言つたら、一緒に行ってくれますか？」

「…………本気でお前が望むんならそつするわ。世界の修正力との衝突とだつて闘つてやるぞ」

ティアは、それ以上は自分を繕つていなかつた。今の壹朗ですら、見るのが怖い、優しい笑顔を見たのだ。壹朗の記憶の中にあるティ

アの姉は、見た事のない強い意志と、見惚れるぐらい綺麗な笑顔で、ティアの為に死を選んでいる。

ティアは耐えきれなくなつたのだろう、暴れた。壱郎の腹筋を掴み、千切り、嗚咽も、涙も、我慢も、加減もできておらず、壱郎の腹筋はティアのせいでボロボロで、ベッドは血まみれだつた。

「い、壱、朗様はつ。や、さしいからつ。きらいです」

「そうか。俺はティアが大好きだ」

「もつつ、と。じょうつずに、嘘をついてほし、かつたです」

「そうだな。約束を破つたのは、あの時が初めてだと思うが練習するべきだな」

「嘘でつすよおお！ お姉えちゃんにも、いちりう様にもつ、嘘ついて欲しくなかつたつです！」

言葉と共に力任せに叩きつけられた両腕は、壱郎を傷つける事なく、壱郎でなければ大穴が空いていただろうが、その下のベッドだけを破壊し、とてつもない音を立てた。

「ああああああつつ！…」

「泣いていい。今度は全部、俺が受け止めてやるから」

力任せに腕を振り回すティアの体を、物を壊さない様に片手で抱き締めて固定してから、ティアごと空中に浮かびあがり目を瞑る。ティアは暴れるのは止めたが、物凄い腕力で抱きつかれたままの状態になる。恐らく先程からずっと、無意識に『怪力』を使つてゐるのだろう。壱郎でなければ圧迫死どころか、胴体が真つ二つになつてゐるレベルだ。

「うつうつ……おねえちゃん……」

『 パーーーーーーー。 パーーーーーーー』

ティアがベッドを破壊した音が、下に響いたせいだらう。従業員

からの確認の電話だと予測がつく。片手で受話器を取り、相手の話も聞かずに一方的に通達する。

「何だ。音なら氣にするな、ただの痴話喧嘩だ。『邪魔しに来るなよ』」

壱朗は言葉に魔力を乗せて、来ない様に『言靈』で念を押していました。

「すみません。『ちるりとも。また、』『めいわくをかけてしまいましい……』

「なんだ、子供にでも戻ったのか?」

「ちやいしますみ。ぎえんぎょちゅうしゅうぎや、おかしゅく

「喋るな。思つだけで伝わるだろ?」が

「あ……あい」

恐りしく、体の混乱が言語中枢にまで及んだのだろ?と察しておぐ。

『壱朗様、『めんなさい』』

「どうしたい? テイア」

『何もできないですよね。過去つて変えれないですね』

『恐らく無理だろ?』

『だから、お姉ちゃんは笑つてたんですね』

『そうだな。ティアの事だけ考えて、満足してる笑顔だつた』

『壱朗様は、死なないつて約束してくれますか?』

『それはどうだろ? な。死なない存在はない。吸血鬼だつていつかは死ぬさ』

『じゃあ、私より先に死なないで下さ』

『ふむ。それは俺が嫌だな』

『むう、じゃあ一緒に死んで下さ』

『心中がしたいのか?』

『違います。解つて聞いてますよね?』

『ああ、止む追えず死ぬ時は、一緒に死なせてやるよ。どんな事をしても死なない様に散々、足搔いた後でならな』

『それでいいです。お姉さまの事は我慢します』

「お姉ちゃんの為にも、そのほうがいいな」

『その呼び方は忘れて下さい』

「お姉さまの為に強く生きる」

『はい。御主人様と一緒に生きます』

「つたく、我が儘な眷族だな」

『はい、壱朗様のたつた一人の眷族ですから』

そのまま、下らないやり取りを少し続けていると、落ち着きを取り戻したティアは眠りについた。そのままの状態で眠ってしまった為、壱朗もそのままティアの為に、ティアの壊したベッドの代わりをする事になった。

第07話 家族（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

壱朗は目の前の状況を無視し、ティアと自分達の血技について考える。

結局、ティアの姉の目論見は9割方成功した。ティアと壱朗は三千年の間、一緒にいたが、結局ティアの血技は完全に消える事はなく、『記憶をコピーする』というモノに落ち着いていたし、それ以上に成長する事もなかった。

ティアは知らなかつた事だが、『帰属の儀式』は眷族側が行うだけでは『血技』は付与されない。眷族側が行う事で真祖による『記憶の結晶化』が可能になるだけだ。だからティアが旅立つ壱朗に儀式をした事で、壱朗は幼いティアと初めて会つた時にはすでに『記憶の結晶化』が可能だつた。ただ出会つた時のティアの主は姉だつた為、姉が死ぬまでは不可能だつたが。

結局、ティアが生きた三千年の間に壱朗により、背中に六つの『魔血晶』が創られた。そして、これからも増えるだろう。

真祖側の『帰属の儀式』は壱朗自身が恥かしがつたので、ホテルの部屋で抱いた時にこつそり済ませておいた。おかげで抱いている途中から、壱朗の意識がダダ漏れになり、焦らしたり、反応を楽しんだりと、苛めようとする意思がティアにバレて怒られた。素直に苛められてくれなかつた為、壱朗は少し不満だつた。

本当の意味で儀式が完了した為、ティアには壱朗の『時間跳躍』の血技が新たに付与された。ティアは壱朗が吸血鬼化した訳ではない。『帰属の儀式』により眷族となつただけなので、血のつながりは薄い。なので『時間跳躍』も大した効果はないだろう。

とりあえず、3時間後の自分宛てに手紙を跳躍させたりと、暇な時に微妙な訓練を行つている。

そして、壱朗が何故こんな事を考えてゐるのかといつと、今まさに壱朗は現実逃避の真つ最中だからである。

「あら、お母様。御夕飯のお買い物でしたら、私が購入しました材料がもうすぐ届きますのでお待ち下さいな」

「あら、ティアちゃん。悪いねえ、そんな事まで気にしてくれなくてよかつたのに」

「いえいえ。これからは家族として過ごさせて頂くんですもの。今田ぐらいは私が全て用意させて頂きますわ。田那様にも、御両親にワタクシも私の手料理を召し上がって頂きたいんです」

壱朗にとって、あまりにも現実味の無いやり取りが、田の前で交わされている。仕舞には爺さん婆さんまでが調子に乗りだした。

「ティアさん、ワシらも御一緒させてもらつてえんかのよ」

「あら、お爺様。もちろんですとも。田那様からはず、お婆様とつまでも睦まじいお一人で、大変幸せそつだとお話を伺つております。その秘訣を御食事をお召し上がりになられながら教えて頂けますか?」「ええ、構いませんよ。爺さんが浮氣しそうになつた時の話も、してあげましょうかねえ。ねえ、爺さん?」

「婆さん、それはもう許すと言つてくれてたじやろうが。今更、蒸し返さんでもええじやろに……」

壱朗は爺さん婆さんの態度の変化に、頭が痛くなつてきた。

「……爺さんも婆さんも。年末までは、爺さん婆さんと呼ぶなと俺に言つてなかつたか?」

「やうじやつたかの?」

「『爺さんといつのは曾爺さんくらいの年齢の人を差すのだ!』とか『ワシらの事は既子さん敬三さんと呼びなさい!』って二人揃つて言つてたじやねえか!」

「壱朗ちゃんや、婆さん達ももつ若くないんよ? いつお迎えが来

「壱朗ちゃんや、婆さん達ももつ若くないんよ? いつお迎えが来

るか分からんけんね、今の内に『肩叩き券』と『肩揉み券』使っておこつかねえ』

「婆さん、俺はそんなもの作ってプレゼントした事なんか無いぞ。親父の間違いだろうが。つーか、『けんね』ってどこの方言だよ！ウチは三代前まで全員、大阪生まれの大阪育ちしか居ないって言つてただろうが！」

「壱朗や、優しい婆さんをそんなに苛めるもんじゃないぞ。苛めはよく社会でも問題になるじゃろうが。苛めていいのは、自分の嫁さんを布団のな…………『バキツ』…………」

「…………婆さん、殴るのは良いが…………それはちょっと凶器が過ぎないか？」

「壱朗ちゃん、これはスチールバットに見えるだけのプラスチックのバットやけん大丈夫よ？」

「…………そうか。ならいい。部屋に戻るから飯ができるたら呼んでくれ」

そう言って、壱朗は自分が生まれてから28年は過ごした家を、懐かしく感じながら一世帯住宅の一階へと、階段を上がり自分の部屋へと入つて行つた。

そこには、八千年前と変わらない部屋がそのままあり、寝正月を満喫しようとしていた為の用意も、そのまま置いてあつた。

「確かに、煙草と酒を買いに出たんだよな」

西暦2100年1月2日に曾祖父が死亡し、壱朗は過去へと跳んだ。八千年かけて研究し、現段階の方法では過去は変えられない事は、間違いない。

この時代にやつとたどり着いたが、葬式に出る事もしなかつた。昔の知り合いに、吸血鬼になつた事がばれるのが怖かつた。いや、友人に『化け物』という目で見られるのが怖かつたのだ。家族にも知られたくなかつたが、ティアに説得された。家族が死んでからでは、伝えたいことも伝えられない、と。

「」の部屋に、まだ2箱も残っていた煙草に火を付ける。用心深い性格だったのだろう。だから、あと3箱しかないと考えて煙草を買に行つた。今では何でも出来るようになつたからか、『2箱も』なんて考えている。

この時代の煙草は軽い……軽過ぎて目にもしみない。泣くことすらできなくなつた壱朗自身の様だつた。

姉貴と弟は葬式が終わつて、すぐに東京に帰つたらしい。仕事人間な二人らしい行動だ。

壱朗は明日から会社が始まるが、辞表を用意した。何らかの形で迷惑をかけるなら辞めた方がいいと判断していた。

ティアは交際している女性、という設定で上がり込んだ。親父が警察から戻り話が始まれば、それもすぐに嘘だとばれるが。

『お父様がお戻りになられました』とティアからの『思念通話』^{テレパシー}が届くいた。『すぐに降りる』と返し、一階の居間へと向かう。

居間では大きな卓袱台が出され、ティアが一生懸命、地中海風の鍋物を作つていた。ティアには空氣を読む、という期待はしない方が良いらしい……

「おかえり、親父」

「お前こそな、壱朗」

「さあや、先にご飯を食べてしまいましょ。貴方もお腹すいたでしょ？」

「ああ。爺さんの焼酎出してくれるか。美津子」

「はいはい。それと、漬物よね」

そう言つて母さんが親父を促し、食事が始まる。コレがきっしと、『彼方壱朗』が真祖になつた時に、無くしてしまつたはずの『日常』の一つだつたのだろう。

その後も壱朗とティア以外にとつては、曾爺さんが居ない事以外

何も変わらない日常の風景のまま、酔っ払わない程度に全員が酒を飲み、壱朗とティアは全く酔う事が出来ない体だったが、食事が終わる。

ティアと母さんと婆さんが片付けの為に、台所で洗い物を始めた頃を見計らって、話を切り出した。

「親父、爺さん」

「一人はやつとか、と言わんばかりにジロリといちらを睨み、流石親子、そつくりだった。しかし、壱朗が話し始めるまでは、何も言わずにお互のグラスに焼酎を入れ合っていた。

「俺は、吸血鬼になつた。そして、ティアもそつだ」

台所では壱朗の母、美津子が食器を落としていたが、ティアが床に落ちる前に掴んでおり、割れる音が響く事もなかつた

「曾爺さんを殺した吸血鬼も捕まえて、閉じ込めてある。これから復讐する為に」

「そう、か。だから、電話の後、すぐに帰つて来なかつたんだな……」

「ああ、帰りたかったけど、もう日常には戻れなかつた。明日から会社が始まるけど、辞表を出すつもりだ」

「いつの彼方の人は強い。医者から、曾爺さんの残りの寿命の話をされた時もそつだつた。感情的で、無駄な事は聞かない。必要な事だけを話す。

「どうやって生きて行くんじや？ 当てはあるのか？」

「爺さん。当てはある、いつ見えてティアはかなり長く生きてるんだ」

「一緒に暮らせんのかい？」

「それができそなうら、今ここで話してない。つて事だよな、壱朗

「すまない、婆さん。親父の言つ通りだ」

壱朗の『血技』と現在の年齢については、話さない事に決めていた。

しかし、家を出る事は壱朗の中すでに決めており、ティアはかなり渋つたが、その為、家族を安心させる設定を考える事にした。

ティアが人類に友好的な吸血鬼としての地位があり、経験が豊富であるという事を話し、当面はティアに面倒を見てもらうという、男としては何とも情けない形にする事にしていた。

そういう話にする許可を、ティアから貰うのには苦労した。ティアは壱朗の家族に、高齢に見られるのが嫌なようで、壱朗は『不老なのに気にするのか?』と女心の分からぬ、ヘタレらしい事を考えていたが、散々話し合う事になった。

我慢してもらつ為の代償に、一人きりで南の島へバカンスに2週間も連れて行く事になり、ティアは、『それくらい当たり前です。女にとつて、旦那様の御両親の印象というモノがどれだけ大事なのが分かつていません』と壱朗の居ない所で怒つていたが、壱朗は今後の予定の修正をする事になつたのだった。

「親父、申し訳ないけど適当な時期になつたら、警察に行つて、もう一度俺の行方不明届け出しておいてくれ」

「はあ、お前なあ。俺が今日、警察で何人の人に『人騒がせなつて顔で見られたと思つてるんだ?』

警察や世間の間では、曾爺さんの仇打ちをすると家を飛び出した、曾孫(28歳)は家族からの警察への連絡で行方不明扱いとなり、1週間経つた後、仇の吸血鬼が見つからず、無傷で帰つてきた。といふへタレなオチが付いていた。今日、壱朗の父親は、それを警察に報告に行つていたのである。

「悪いな」

「壱朗らしくない落ち着きっぷりだったから、何があるは思つておつたがなあ。他に、わしらにできる事はないんかの？」

爺さんの好意は嬉しい。だが吸血鬼は弱肉強食、善惡の価値は力で決まる事が多い。人間のみんなには何もできないし、足を引っ張るだけだらう。

「…………」

何も言わない事で、その全てが伝わる。祖父は本当に曾祖父そつくりで、その辛そうな顔を隠す笑顔が、壱朗には辛かつた。

「そりか…………」

爺さんの顔を見たせいでティアは、言いたい事をじつと我慢していたのが限界を超えたのだろう。ティアは自分は何も言つべきではないと、家に来る前に自分で言つていたのに反し、言葉一つ一つを模索するように話し始めた。

「壱朗様が、毎年、初詣にこの街の神社に来られる様に、私が、何とかします。ですから壱朗様の事を、お忘れにならないで下さい。私達は、皆様がお亡くなりになられても、その後も、きっと、ずっと、生き続けてしまい……』ティア、もう良い』…………はい…………」

「壱朗にはもつたといない嫁さんだのう」

「若い頃の私みたいだと思いませんか？ 敬三さん」

「それを言つなら、この家に来たばかりの美津子にそりくりだよ

「お前はいつまでたつても、美津子さん離れができるのう。お前がそんなどから、壱朗はティアちゃんを捕まえる前に、バツイチなんかになるんじや」

「父さん、それは壱朗自身のせいでしょうがー。」

壱朗はそんな祖父母に対し、『過去の事持ち出すなよ。後で、ティアの機嫌が悪くなつたらビビってくれる』などと考えていた。

「前の嫁さんはひどかつたからのお。一回も毎年さんつて、呼んでくれんかったしなえ。壱朗ちゃん、ティアちゃんと仲良くな?

「ティアさん。壱朗の事。よろしくおねがいします。毎年大晦日には、神社でお待ちしていますね」

「あ、はい。お義母様^{かあさま}」

何やら意味深な返事の仕方をしてくるティアを壱朗は努めて無視し、父親と向き合つ。

「壱朗、いつ行くんだ」

「…………今晚中には、行くつもりだ

「次は、年末か……約束は、守れよ?」

「俺は『約束』しないぞ、親父」

「こんなにいい嫁さんを嘘付きにする気か?」

「…………努力はする」

母親とティアが共に傍にきていたので、壱朗は『まだ嫁じやない』とこう言葉は呑み込んだ。『まだ』に反応されても、『嫁じやない』の方に反応されても碌な事にならないのは分かっている。

「お母さんもお父さんも、その……吸血鬼の事はよく知らないけど、壱朗が苦労するつていう事は分かるわ。でも、何があつても壱朗は私達の息子よ?」

「わしらの孫じやしの。のう、毎年さん」

「そうじゃねえ。敬三さん」

『俺も彼方の家の子に生まれて良かつたよ』と思つたが、口に出したら負けだと壱朗は思い、頷いて見せた後に心の中で感謝していました。

「俺の息子だ。特に自慢できる所はなかつたが、良い嫁さんを連れてきたのが良い男の証だ。…………行方不明にするんじや、周りの誰にも自慢できないじやないか。おい、壱朗。商店街の隣にティアさんを自慢してからじやダメなのか?」

「アホな事言うな、親父。母さんと爺さん婆さんを見習つて、カツ「よく締めろよ。それじゃ俺の中の親父は、いつでもアホな親父じやねえか」

「アホでいい。だから忘れるな。俺はお前の^{父親}家族だ」

「姉貴と隆式^{じゅうしき}への説明よろしくな。ちょっとは吸血鬼の事調べてから、話すかどうか決めてくれ」

「一美と隆式^{りゅうしき}にも一度は会つとけ。後が煩いからな。……そうだな四月になつたら話す。それまでに会いに行け」

「分かつたよ。ティアと必ず行つとく」

横を見るとティアも少し目が赤くなり初めていて、壱朗はそろそろ潮時かと考えたのだが。

「じゃ、日付が変わるまであと二時間はある。美津子、飲むぞ」「いいのう、確か死んだ父さんの秘蔵の芋焼酎^{壱朗の曾祖父}が出てきた筈じゃつたろ？ あれも開けるぞ。民子さん、熱燗と冷はどっちがええ？」「あらあ、どっちもいいですねえ~敬三さん、まずは熱燗にしましょうか

「貴方、おつまみに漬物は全部出しちゃいますね。御歳暮の残りも何かあつたかしら……」

「……^{壱朗様}旦那様？ お酒が無くなるまでは、出発できそうにないですね？」

調子に乗つて呼び方を変えるティアを睨むと、そんな視線は気にせず、壱朗の家族を見てくるティアの笑顔に、壱朗も文句を言つ事を諦める。

「ああ、全くアホな家族だと、湿っぽくもなりやしないな」

「…………その割には嬉しそうですが……『ティアちやーん。一緒に飲むわよ~』…………はあ~い！ お義母様^{壱朗様}。では^{壱朗様}旦那様。飲んできますね」

「つたぐ……」

…………その後、本当に酔いつぶれた母親と祖父母が居間で寝ている間に、寝たフリなのが一目瞭然な父親に礼を言い、ティアと共に家を出た。

「旦那様）。素敵な家族でしたね」

「ティアの両親にちょっと似てたな」

呼び方については、明後日ぐらいまでは好きにさせてやろうと思つていてる。

「はい、きっとこれから先も、あんな家族に出会いますよ。その時に思い出すんです。私達の家族もそうだったって」

「そうだな」

「私達にも、家族はできると思いますか？」

ティアは遠くを見ながら、確認する様に聞いてくる。

「望めばなんだつてできる…………とは、言えないよな。力があると余計に、できない事が分かつてしまふもんな」

「そうですね」…………でも！ いつか、旦那様の子供を産みます！」

「酔つ払つてるのか？ ティア」

「酔つてませんよ。吸血鬼は酔いません」

「だな」

力を手に入れると現実がより現実になる。できる事が増えると、できない事がはつきりと解つてしまつ。嫌な話だつた。

空の高さを知る為に鳥を超え、空の高さを知つたからこそ、宇宙では生きていけない事を知つた。そんな話を聞いた時、寿命が短い生き物だからこそ、人間には愛が溢れ、希望に満ちているのだと思つた。

俺は俺の腕にしがみつきながらも、笑顔で隣を歩いてくれるティアを、いつまで愛していられるのだろうか。

「ずっと、一緒にいて下さいね。一緒に死んでくれる約束も忘れちゃ嫌ですよ？」

ティアは気付いていたのかもしない。

現代に一千歳以上の吸血鬼が居ない理由に。

そしてそれは、壱朗達にも適用されているのかもしない事に。

「だから、『約束』したのか？」

「……何です？ 旦那様？」

「いや、何でもない。『約束』は^{バカンス}する。ティアとの南の島の『約束』もな」

「はい… あつとですよ」

せうやつて支え合いながら、ティアと壱朗は闇夜の道を歩いていく。まるで、人間が支えあって生きていくかのよう。

第08話 お披露目（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

ティアは門の前に礼儀正しく立つており、次々と来る入場者を捌いていた。

ティアの後ろには扉が幾つも並んでおり、扉と扉の間には日巫女ひみこの眷属けんしょくがそれぞれ立つて、ティアと同じ様に案内をしている。

「ヨーロッパ方面の血族の方は、AからEの扉へとお願い致します。えと、アジアの方ですか？ ならHからKの扉へとお向かい下さい」「ティアさんへ、三世の方が『四世以降と一緒など馬鹿にしているのか』って怒つてます～！」

手伝いをしてくれている、日巫女の眷属けんしょくである壹いよが泣きそうな声で走り寄つてくる。

「壹いよさん、またですか？ とりあえず、有無を言わせず扉の中へと放り込んで下さい。そうすれば、彼方様の『結界』のせいでおとなしく座る以外、行動出来ないはずです」

「それが～扉の中に入る前に～、文句を言い始められましま～」

壹いよは三世だが日巫女ひみこと同じく、二千年近く生きており、背中の『魔血晶』も既に三つ付いている。故に、その辺の三世や、四世以降に遅れを取るはずが無いのだが、いかんせん気が弱い為、強気に出られるといついつい萎縮してしまい、ティアに泣きついて来るのである。

お陰でティアの立つている後、一際大きな扉の前には吸血鬼が十人程、正座させられている。全て、壹いよに因縁をつけ文句をつて、ティアにお仕置きされた一世と二世だった。

「それは～分かっているんですけど～何故か～皆さん怒るんです～」

ティアは壹与を見て、何度もになるかわからない溜め息を吐いた。壹与の外見の事を考えて、『これでは仕方ないのかもしれません。またお仕置きしますか』と思ひながら壹与に指示を出す。

「とりあえず、文句を言つ輩は真祖でないかぎり、全てこちらへ回して下さい。真祖の方々が一般門に来る事は無いと思いますが、誤つて来られた場合は、直ぐに『念符』で連絡を。御迎えに上がりますので。宜しいですね？」

「はい、解りました」

壹与は間延びした話し方のまま、本人的にはシャキッとしたつもりの返事をし、ボニー・テイルに纏められた綺麗な黒髪を揺らしながら担当の扉へと戻つて行く。ティアには歩き方までフラフラしているように見えるのだが、本人は至つて眞面目に、真つ直ぐに歩いているつもりらしい。

日巫女の血族は全員、日本人らしい黒髪だ。それが血族の条件なんかと聞きたくなるぐらい、黒髪の者しかいない。そして何故か十代に近いの容姿の者が多い。日巫女本人は『年齢不詳の京美人』といつた出で立ちなのだが。

ティアは、その後ろ姿に『日巫女様も変わつた趣味の方なのね』と思ひながら、入場者が疎らになつてきた事を感じ、正座している面々に話しかける。

「さて。『結界』を解きますが、大人しく座席へ向かえますね？」

既に戦意喪失どころか、とにかくこの場から離れたいと考え始めた二世や三世の面々は、ティアを怒らせない様に、ただ黙つて首を縦に振つていた。

「では、…………解！ これで動ける筈です。問題を起さないで下さいね」

やつと解放された面々は、とにかく逃げる様に己に指示されてた扉へと入つて行く。この時正座させられた面々が、『吸血鬼社会に

変革をもたらす存在』としての志朗の、力の誇示に一役買い、広告塔になり得る存在だった。

ティアを含め、扉の前で案内と雑務を担当している数名は皆一様に、背中の大きく空いた衣装で行つている。

ティアは純白のイブニングドレス。壹^{いよ}を含め、日巫女の眷族である八人の男女は、袴が男女色違いの巫女服だった。何故、背中を大きく露出させていいかなど、簡単にいえば『魔血晶』が解る様にである。

五百年以上生きた者
力のある吸血鬼は背中に『魔血晶』が付いている。
その色と数が、ほぼそのまま力の格差となる。

色は、真祖なら『黒』。一世は『青』。三世は『赤』。四世以降は三原色の『黄色』に近い、明るい色をしている。

数は基本的に正多角形の呼び名で呼ばれる。

五つ持ちは『ペンタゴン』、六つは『ヘキサゴン』、七つで『セプタゴン』。

何故、多角形の呼び名で呼ばれるかなど、『魔血晶』を創る、つまり『記憶の結晶化』の際には、自然とその力に合わせた魔方陣が浮かび上がる。また、全力で力を行使する際にも背中に、魔血晶を基点とした同じ色の魔方陣が浮かび上がるのである。

この魔法陣は自分では見えない為、真祖か他の吸血鬼の『記憶の結晶化』を見た事がある者しか実物を知らない。『魔血晶』をいくつも持つ吸血鬼。その全力での戦闘を、見た事がある者達も知っているだろつ。生き残つていれば、だが。

そんな呼び方をするのは、伝統や格式を重んじる三世以上の者が多い。

何故なら四世以降の者で、千年を超えて四ツ星『テトラゴン』になる事は、あまりにも珍しい事なのである。故にまだ若い吸血鬼や四世以降の世代は、単純な言い方で『モノゴン』を一ツ星、『ディゴン』を二ツ星、『トライゴン』を三ツ星などと称する場合が多い。伝統や格式を重視する事のない、下位の吸血鬼社会の中ですら禁忌となつていてはいるのが五芒星（ペンタグラム）や六芒星（ヘキサグラム）を意味する呼び名だ。

ティアは六つ持つ『ヘキサゴン』であるがその背に現れる魔法陣の模様は六芒星ではなく、雪華模様に似た 壱朗が長生きとかけて『万年生きる亀模様』と言つたら殴られた 六角形模様である。

五芒星（ペンタグラム）や六芒星（ヘキサグラム）は吸血鬼に对抗しうる、教会所属の魔法使いや魔術師、日本の陰陽師や中国の符術師などが行使する力に現れる魔法陣である為、吸血鬼からは忌み嫌われている。

壹朗やティアはそんな事とは関係なく、技術として符術や陰陽術、果ては魔術まで世界各地の魔力で使用できる術を色々と収集している。

そんなティアでも、姉妹共に教会の人間に迫害された記憶があるからか、五芒星や六芒星には忌避感を隠さない事が多い。

壹朗からすればどんな技術を使ってでも、自分の血技の謎を解明しなければいけなかつたし、なにより娯楽 小説や漫画、アニメなど の中に魔術師や符術師など山ほど出てくる時代に生まれた為、恰好良いなどと評しており、その様な事は吸血鬼が口にすべきではないと、ティアによく怒られていた。

今、この正面の大扉を管理しているのは、背中に『BlueHe^{蒼書の}agon』を背負つたティアだ。

この大扉は『真祖』専用。世界に十四人いると言われる真祖の内、

既に十人が中に入いる。

扉は一度も開けていない。

だが真祖なのだ、それぐらいの事はやつてのけるのが当たり前だ。例え、この会議場が壱朗の全力の『結界』により『扉』以外からの、入退場や破壊が出来ない様にされていたとしても。

愚か者達を全員解放したティアは、外から見えない様にお腹に貼つた『符』を剥がす為にドレスの中に手を入れる。

壱朗の指示の通り、『血の熟成』^{血の力}を誤魔化す『符』を貼つてワザと愚か者を集めるのは、もう十分な筈だつた。

「おい、何故三世たる私が四世ども等と、同じ区画に入らねばならんのだ」

壱与の處で文句を言つていたという愚か者だらう。近づいて来ているのは目の端に映つていたので知つていたが、名乗りもせずにいきなり言つ事がこれとは。ちょうど『符』を剥がそうとした時に話しかけてきたので、まだティアの魔力^{血の力}には気づいて居なかつた様だ。剥がしてから姿勢を正し、答える。たとえ、格下相手だらうと壱朗の眷族として守るべき作法は守る。礼儀まで守つてやるつもりは無いようだが。

「我が主たる真祖様の意向です。貴方はどちらの方ですか？」力ある者として振る舞いたいのなら、上位者への礼儀作法ぐらいは、守りなさい」

まるで子供を叱る教育者のように振舞われ、中世の貴族の格好をした、三世の吸血鬼は頭に血を昇らせたが、ティアがそれを許す筈もなく、さらに畳み掛ける。

「壱与殿は日巫女様の眷族たる『Red Trigon』^{赤の三角魔血晶}です。その彼女に無茶を言つたと聞いておりますが、『魔血晶』すら持ちえぬ貴方程度の何を持つて我々の手を煩わせるのです？ 格下は格下らしく言う事を聞いていればいいのです」

三世の男は、突き付けられる上位者のからの宣誓に身動きが出来なくなつた。

「言葉も返せないとは。一体、どの様な教育を一世から受けているのですか？三世の教育も出来ない一世が居るという事ですか。同じ一世として、嘆かわしい事この上ありませんね。話があるのなら、お前の親たる一世を連れて来なさい」

ティアは男に背を向け、此方に近づいて来る別の一世 恐らく『^{D i a g o n} デイゴン』だろうと一瞬で判断し に、扉の場所の案内をする為に、小走りで向かう。

その場に取り残された三世は、急に大きくなつたティアの魔力に絶句し、走り去る背中の『^{蒼青の} ^{六角魔晶} B l u e H e x a g o n』まで見てしまつては更に文句をいう事も出来ず、ただ来た道を戻つて自分に相応しい扉へと入るのだった。

「そろそろ時間ですね」

ティアは腕の発条式時計を

骨董品のお気に入りだ

確認し

てから、壹与の元へと向かう。

「壹与さん。全員に中に入るよう連絡を。これから五分後、『封鎖結界』を予定通りに発動します」

「もうそんな時間ですか～解りました～」

これから壱朗による、吸血鬼社会全体に対する挑戦が始まる。ティアはその宣誓式展会場ともいえる、場所の維持を任せられた。

曰巫女や壹与達にすら、『封鎖結界』だと教えていたこの建物の結界は、壱朗の八千年に及ぶ研究と知識を使用した『時空間捕縛結界』だ。しかし、それを維持しているのはティアの魔力だ。

あとは、予定時刻に来なかつた者に關しては、入れるつもりは無いし、真祖が来ていない場合はこの会合後、壱朗が直々に出向くと言つていたので放置で良い。

とは言つても、冬眠中で来れない一人の真祖を除けば、来ていないのは二人だけだが。

そして、刻一刻と時を刻む骨董品の発条式時計 アンティーク ぜんまい 吸血鬼は魔力で水晶の振動に影響を与えてしまう為、水晶振動子時計は使えないを見つめながら、『時』と『壱朗の言葉』を待つ。

ティア、時間だ。始めよう。

血族間通話

壱朗の声がティアの頭に響く。それを聞いたティアは、その大扉の内側に入つた後、『時空間捕縛結界』発動の為の最後の一枚の『符』を扉に貼る。

他の全ての扉では、すで日巫女の眷属が同じ様に貼つてくれている。

結界に穴が無いか確認した後、ティアは壇上付近へと向かう。会議場はすり鉢状の形をしており、北側のスクリーンを中心に周囲270度の観客席がある。壇上には普段は置いてある演説台はなく、その中央には四人掛けのテーブルセットが一揃いとその左右に五個ずつ、計十個のサイドテーブル付きの豪華なソファがあり、既に十人の吸血鬼が着席していた。

中央には三人が、左側は五人埋まつており、右側には一人しか座つていない。しかし、中央にいる日巫女はこれで全員と判断すると、席を立ち客席に向かつて話し始めた。

中央にいる真祖を取り囲むように、一階部分の客席にまばらに座る一世達 およそ五十人程 は一様に起立し、日巫女に向かい頭を下げる

「諸兄らの參集、誠に嬉しく想います。此度の參集は異例のモノですさかに、すぐに終わらせますよつて、御静聽お願ひ申し上げます」

京言葉のイントネーションや雰囲気が、日本人以外の吸血鬼に理解できるはずもないが、真祖たる日巫女が丁寧な挨拶をしていると、いふのは、会議場にいる全ての者に伝わつただろう。日巫女は『言の葉は『伝わりやしあせんでしょねえ』などと考えていたが、実は日巫女の熱狂的信望者はかなり多く、この場にいる七割近い者が日本語を習得している。だが、観客席の吸血鬼達はお互にそれを隠しており、完璧には理解できずとも、ある程度は理解していた。そして、二千年の歳月で整えられた、日巫女の美貌と肌の艶 肌が露出しているのは、その大きな胸元と鎖骨迄だつたが そして、体つき。それに花魁の様に綺麗に結い上げられた、美しい黒髪を見て、感動に打ち震えていたのは本人達にしか分からぬ、事実であつた。

そんな彼らの心の内はさておき、これ以降、この場にいる真祖以外の吸血鬼は單なる傍観者か、声を出す事も許されない観客にすぎない。

「それでは、日巫女殿が我らを呼んだ理由を教えてもらおうかの」中央に座ることの許された『酋長』と呼ばれるアメリカ先住民族の古き装束を身に纏つた千一百歳の真祖が問う。

「いくら最高の『年齢血の熟成』を誇る日巫女殿とは言え、いささか性急な呼び出しではあつたのお」

同じく中央に座る『春の女王』も、早く理由を知りたかったのであつた。彼女は日巫女とたつた式百年しか変わらない、千八百歳だった。彼女は日巫女と同じく着物姿でありながら、日巫女とは正反対だった。

優雅ではあるが、胸元の開き具合から妖艶さを強調した、花魁そ

のものな日巫女に対し、『春の女王』は桜模様の着物をきつちりと着こなし、風情のある涼やかな乙女、という印象だった。

血技が日巫女のモノよりも戦闘向きである分、戦闘能力は『春の女王』^{ティア}の方が上で、日巫女に強く出る事の出来る真祖の内の人だつた。

「そうですなあ、ほなきちんと紹介させてもらいましょか。我らが日本にお生まれにならはつた新しき真祖じす。一千百年を迎えた翌日に真祖にならはつたばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

では、彼方様こちらに……」

その瞬間、特に日巫女をよく知る、真祖達は皆一様に驚きのあまり、腰を上げそつになつた。日巫女が敬称で呼ぶ相手が居ると言つ事に。

そして、スクリーインの手前に『門』^{ゲート}が出現したかと思うと、日本人らしい黒髪黒眼で、真つ黒の礼儀服に身を包んだ壱朗が姿を現す。その姿を見た真祖達は、日巫女が何をしようとしているのか、意味が全くわからなかつた。たつた一人、ラマルティーヌ卿を除いては。

「さあ、このお方が我らが日本の真祖、彼方様じす。よしなに。では……」

「日巫女どの、待たれよ。理由を先に申せ、妾を呼び付けた理由が、ただの真祖の紹介というのではあるまいな？」

言葉どおりの意味ではない。壱朗を中央のテーブルに座らせようとする日巫女に『春の女王』^{クロウティア}が説明を求めているのである。そこに、壱朗が口を挟む。

「だから言つただろうが、日巫女。こんな茶番よりも、とつと本題に入るべきだつてな」

「へえ、せやかて。彼方様、真祖の挨拶てゆうんは、いつもこいつしてやつてはつたんじすえ？」

「さうなのか？」

「そこなラマルティーヌはんが抱え込まはつた、14番田の娘はんも百歳超えはつたら、プルケラはんに後見してもうつて、お披露目する予定やつたんやさかい……」

そこに『春の女王』^{クロウティア}が割つて入る。

「待たんかぬしら！ 何を妾抜きで話をしておるか！ 大体なんじや、たかが生りたて真祖の分際で日巫女を呼び捨てか。日巫女も落ちたもんじやのう。ついでにプルケラと姓を呼ぶな！」

「春はん、そないに田くじら立てんでもええんちゃいますのん？」

春はんとは違うて『酋長』^{チホ}はんは解らはつたみたいやけどなあ？ 壱朗が『酋長』の方に振り向くと、『酋長』は椅子から下り床に跪いて壹朗の手を取るうとしている所だつた。それを見て、苛立たしげに爪をかじるスース姿の白人系男性。その姿を横田に、ラマルティーヌ卿が声を出す。

「日巫女様も彼方様も戯れはおやめ下さい。『酋長』殿も分かつておられるのならば、御遊びを辞めて頂けるように、仰つてくださいませんか？」

普段のラマルティーヌ卿とは違う、場をわきまえた態度と発言。そして『彼方様』という言い方に、隣で爪を噛んでいたウィルソン卿は業を煮やし口を挟む。

「ラマルティーヌ卿、貴様まで何だというのだ。『酋長』殿、貴方も我がアメリカ合衆国の誇る真祖ならば、その様な生りたてに跪くなど、お止めになつてはいかがか？」

「黙れ、戦好きのガキが。この御方の事が分からん程度の者は、例え真祖といえど会話に入る資格などないのじや。黙つて金の勘定でもやつておれ」

アメリカの抱える真祖同士の不仲は有名だつたが、これでは話が進まないと、ラマルティーヌ卿は壹朗に声をかける。

「彼方様、『結界』をお解き下さい。話が前に進みませんので」

訝しげな目で壹朗を見る『春の女王』^{クロウティア}と、その他の真祖の視線に

晒された壱朗に、日巫女は視線と仕草で『御随意に』と促す。それを受け、日巫女の悪戯に付き合つのは止め、壱朗は結界を解く。

背中を逆撫でされた後、首を掴まれ深海の底へと引きずり込まれる感覚。

実際には深海に潜つた事のある吸血鬼等あまりいないので、感覚的なものでしかないが

全ての吸血鬼が同じ感想を抱いた。

格が、いや住んでいる世界が違う、と

その場で行動できたのは、やはり『血の熟成』のお陰か、日巫女唯一人だった。三千年を共に生きたティアですら、全ての『結界』を解除した壱朗を、目の当たりにするのは初めてだった。

「もう一回。ちゃんと、紹介させてもらいましょうか。

我らが日本にお生まれにならはつた新しき真祖の彼方様です。二千百年を迎えた翌日に真祖にならはつたばかりやよつて。まだ生れて四ヶ月という所どすなあ。

あ、後。ウチの旦那はんやさかいに、誰も手え出したらあきまへんえ？

日巫女はその血技である『予知』と、飄々としてはいるがあまり話さず、話す時には重要な事ばかりを言う普段の行動から、吸血鬼の中でもその言葉には信用がある方だった。しかし、この時ばかりは誰も日巫女の言葉を信用しなかった。

生りたての真祖がこんな存在感を放つ筈が無い、と

魔力

日巫女の最後の言葉に納得のいかない壹朗の唯一の眷族は、『約束』がある為、今日までは京都日巫女が住んでいるにある神社に滞在しなければいけないが、明日以降の寝床の場所は『京都からは離す』と心に決めたのだった。

第09話 会合（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

ティアの後ろで成り行きを見守つている日巫女の眷族の一世達は、ティアの滑らかで男なら誰でも触りたくなるような綺麗な背中を、色々な意味で見続けていた。

普段は日巫女から遠ざけられている程、欲望に忠実な部類の彼らも、今回ばかりは目の前の背中に欲情を抱いたりはしなかった。
何故なら、壇上で『本気の壱朗』^{蒼青の魔血晶}が放つ魔力に圧倒されていたし、何よりティアの背中に、『Blue Hexagon』^{六角魔血晶}の魔方陣が、浮かび上がつていたからである。

ほんの先程まで、一緒に案内をしていたティアを初めて見た時の彼らは、その外見と放つ魔力の美しさに見惚れ、内心欲情していた。だが、ティアを怒らせる愚か者が次々現れ、『Blue Hexagon』^{蒼青の魔血晶}の魔方陣が肌に浮かび上がる度に、叩きのめされ、正座させられている人数が増えていくのを横目で見てからは、『この背中は自爆スイッチだ。触れたら死ぬ』と認識していた。

文句を言いつつ、馴れ馴れしくもティアの肌に触れようとした愚か者と同様に、ティアの『御主人様以外の方に触れる事を許す程、安い肌ではありません』という言葉と共に、地面に肩まで埋められる末路をたどるのはご免だつた。

そんなティアが、何故か今も『Blue Hexagon』^{六角魔血晶}の魔方陣を肌に浮かび上がらせ、真祖達の方をじっと見つめている。
事情を二世だが日巫女と暮らしていない彼らは、あまりの恐ろしさに吸血鬼の誇りも忘れ、早くこの場から解放されたいと心の中ですつと祈つていた。もちろん、吸血鬼は神になど祈らないので、祈る相手

世たるプライド

は自分の主だ。彼らが普段の日巫女を知つていれば、間違つても彼女に祈つたりはしなかつたが。

「おい、日巫女。旦那さんつてのはなんだ。俺の可愛い眷族が怒るから、下らない冗談はやめろ」

「あきまへんかあ？ なら、お妾めがけでもよろしおすえ？」

一階席の一部では、壱朗の発言と共に魔力が減少し、日巫女の発言の後、倍以上に膨れ上がる。

日巫女が壱朗の眷族をからかっているのは、日巫女の眷族には一目瞭然だった。

そして、最も壱朗の圧力に晒されている壇上では『血の熟成』の強い順に、行動できるようになつていき、言葉を発し始める。

「して、日巫女殿。本当の所、そちらの御方は何年もの間、どちらで眠つておられた御方なのじや？ 妾わいわいもきちんと挨拶すべきだと思うのじやが」

先程までとは打つて変わり、額に汗を流し無礼にならぬように話しかけようとする『春の女王』は、日巫女の田には面白い玩具に見えるのか、意地の悪い笑顔で答える。

「春はん、そないな事言わはつても、ウチは嘘なんか吐いてやしまへんえ？ それにいまさら丁寧に口調を戻さはつても、手遅れやと思ひますえ？ 春はん、先刻はええと……『たかがなりたてのヘタレでやすけない真祖の分際』とか言わはつたやおまへんか。いくら旦那はんが、気の優しい御方やいうても、限度ちゅうもんがありますえ？」

「それぐらいにしてやれよ……」

「いくら何でも可哀想だと思つた壱朗は、助け舟を出しが……

「あら、旦那はんはウチよりも春はんの方が好みですかん？ ウチのベベ着物と違つて春はんのは安もんですかん？ わからんように底上げたはるけど、旦那はんが満足できる程の大きさやおまへんし、それに髪もウチを真似て染めたはりますけど、ホンマは赤毛なんどすえ」

日巫女は肩や、その深い胸元が大きく開いた着物を見せつける様

に、壱朗に擦り寄りつつ、凹凸には『^{貧相だ}えしい』が桜の模様が美しい着物

を、きつちりと着こなし、染めているとは思えない黒髪を持つ『^{クロウ}春の女王』^{ディア・ブルカラ}を流し田で見て、挑発する。

「～～～！ 貧相と言つな～～～！ しかも捏造するな！』『ヘタレ』と『やすけない』は言つてない！ というか『やすけない』つて何だ！」

誰も貧相とは言つていなにも関わらず、氣にしているのか自爆している。

「はいはい、お嬢ちゃんも挑発に乗るな。『やすけない』は品がないって意味だ。それと日巫女、俺は外見にも着てるもんにも興味はない。傍に置く眷族は理屈では選んでないからな。お前も傍に置くつもりはないぞ？」

「旦那はんのしぶちん！ ティアちゃんがけなるいわあ……」

これ以上の脱線は困るので、日巫女を椅子に椅子に座せる。そして、泣き崩れたフリをする日巫女を無視し、壱朗は『^{クロウディア}春の女王』に話しかける。

「お嬢ちゃん。俺は此処には挨拶に来ただけだ。それに自分の四分の一も生きてない小娘が、何を『ゴチャゴチャ言つていよう』が全く気にしてない。だからお嬢ちゃんも気にするな、安心してろ」

「 つ！！」

『^{クロウディア}春の女王』にとつて、それはそれで問題だつた。

日巫女に次ぎ千八百年を生きる真祖である『^{わらわ}妻』が、小娘扱いされている。しかも今、この真祖は四分の一と言つた。つまり妻の4倍。七千一百年を生きているという事になる。確かにこの圧力はそれぐらいはありそうだが、それは一体何だ？

本当に吸血鬼と言う存在か？

などと『^{クロウディア}春の女王』が考へてゐる間に、『^{酋長}』が話に加わり始めていた。

「大いなる力をお持ちの真祖様。お久しぶりでございますのう。あの時はお名前をお伺い出来ませんでしたが、此度はお名前を知るお

許しを頂けるので？

「やっぱ、爺さんには解つちまつた。名乗るかどうかはまた後でな。近々酒でも飲もう。爺さんと一緒に、かなりきついヤツでなら酔えるかもしれん。狼達のその後の事も、聞かせてもらいたいしな」

「うう、泣き崩れるウチを袖そでにして、爺じいと話に華咲かすやなんて……」

「旦那はんのいけず。ウチが行かず後家になつたのは、旦那はんのせいやのに……」

「酷い言いがかりだな。俺の眷族テイアが、お前の眷族を圧迫死させかねないから、そういう冗談はやめとけ」

普段なら、真祖の中で最も我が儘な『春の女王クロウディア

』が眞面目な顔で話を進めよつとした。

「彼方様。『挨拶』というのはどの様な？ むしろ来いと言わしめる事すら可能かと思われますが？」

「ふむ、思つたより頭が良いな。流石に真祖なだけあるか。言葉使いは、気にせんでいいぞ。とつとつ用事を済ませて、爺さんと眷族テイアで酒盛りするかな」

そう言つると壱朗は、縋りつゝとする巫女をやんわりと椅子に戻し、他の真祖達を視線で撫でる様に一瞥すると犬歯が見える程、口を歪ませて笑つた。

「改めて自己紹介だ。俺は『彼方』。名は俺に従う者にしか許す気はない。生れたのは日巫女の言った通り、西暦2100年1月2日深夜。3日になつてたかもしれん。が、どうでもいいか。おかしいと言われる前にさつさと誤解を解いておこうか。

俺の『血族技能アビリティ』は『時間跳躍』だ」

その言葉に、既に身動きができる様になつてはいたが、事態を静観していた真祖達が腰を上げる。しかし、壱朗は真祖達を再度一瞥する事で、座らせ話を続ける。

「詳しい事まで話すつもりはないが、俺は時間を何度か飛び、通算

で八千年近く生きている。これが証拠だ」

壱朗は儀礼服の上着を日巫女に投げ、受け取った上着に顔を埋めて悶えている日巫女と危険な眼差しのティアを務めて無視し振り向いて、白いシャツの背中の部分が空いている為に、むき出しの背中を見せる。

そこには合計十六個の『魔血晶』と、上下一つの八角魔法陣が重なる様に描かれていた

一世の誰かぽつりとつぶやく。

「『漆黒の八角魔血晶 B l a c k O c t a g o n』……」

「それも一重にあるぞ……」

そこに更に壱朗は話を続ける。

「俺に従え、とは言わん。だが覚えておけ。俺は今日より、むやみに人間の命を奪う吸血鬼を許さない。そして、生れたての真祖を幽閉し、魔力を強化する為の餌とした者は必ず滅ぼす。生れた真祖が心から、それを望めば止めはしないがな。本当に望めば、な」

「旦那はんは甘いですなあ」

艶かしい視線と仕草で、そう評価する日巫女に全く動じない壱朗。

「悪いか？」

「いいええ。ウチ、本氣で惚れそうやわ」

「それはいらん」

「いけずう……」

「……冗談はさておき、俺の『血技』に疑問を持つている輩もいるだろう。そんな現実を見れないアホどもの為に、用意した趣向がある……ティア！」

ティアは前もって言っていた通り、画面以外には『結界符』が山ほど張られたテレビを持つてくる。

「さて見えるか？ まあ、見えないヤツはいないだろうが。この画

面に映つてゐるのが今現在のこの会議場以外の場所の映像だ」

「画面の中にはこの会議場の外の様子が映つており、時間に間に合

わなかつた吸血鬼等がせわしなく歩き回つてゐる。

「こいつらに落ち着きが無い訳じやないぞ。目と頭の良い奴は気付いただろうが、今、『この会議場は未来に向かつて跳んでいる』中の俺達を含めてな。そして、もつすぐ到着する。この中にお前等全員が入つてから『3日後の未来』へな」

そこで比較的若い吸血鬼達、特に1900年台後半以降に生れている者達は気付いた。この会議場が未来に飛ばされているという事は、外と中とで時間の流れる速さが違う。この中に入つてまだ一時間も経つていない。一時間が3日になる。およそ72倍の速度で外の時間が流れることになると。

「さて、『時空間捕縛結界』で俺達の存在を守つてゐるが、この会議場自体は守つてない。3日後に飛ばされた会議場は、3日後の未来で2つ存在するのか？ できるのか？ その結果もお見せできるだろう。お前達には傷一つ付かん事は保証しておいてやる。安心しろ。後15分だ。到着までな」

「そう言つと中央のテーブルにテレビを置き、正面のスクリーンに『門』用の符を張り、ティアを連れ『門』へ向かう。

「俺に従う者は自分の意思で挨拶に來い。来ない者は中立だろうが、何だろうが全部敵だ。中立を保ちたいならそれを言いに來い。心配するな、期限は決めん。挨拶に来れば、その瞬間からは保護対象だ。来るまでは何が起ころうが助けないし、敵対すれば殺す。この会議場がその結末を教えてくれるだろ？」

「旦那はん、ウチを置いていく気いどすか？」

符術で会議場の外へと出よとしている壱朗に、それに気付いていた日巫女がしな垂れかかる。

「いいのか？ 着族が困つた顔をしてるぞ？」

「ええのええの。たまには着族から離れて、ゆっくりしたいし」「壱^{いよ}とを筆頭に日巫女の着族は、『逃げられたら、数十年は見つけ

られないー』などと頭を抱えていたが、壇上に飛び込む訳にもいかないので、ただ困り果てていた。そんな事はお構いなしに、真祖達は自由に動く。

「さて、行くが……

あ、おり、アンデレ。ミーシャはどうしたいと言つた。ちゃんとしたんだううな?」

「も、もちろんです。彼方様と共に行きたいのです。はいー。」

ミーシャとは、まだ生れて八十年ほどの14番目の真祖だった。ラマルティーヌ卿が自身の眷族に見つけさせ、その血を楽しむ為に飼殺しにしていたのだが、一ヶ月程前に壱朗達に城に殴り込まれ、ミーシャの好きにさせる様に約束させられた。

おかげでラマルティーヌ卿が、やつとの思いでルーヴル美術館の本物とすり替えた絵画の数点がティアに燃やされ、ラマルティーヌ卿は大事なコレクションを守る為に、壱朗には逆らわない事を決めていた。

そして壱朗がミーシャと呼ばれた真祖に向けると、ミーシャは『ビクッ』と一度肩を震わせた。ミーシャにしてみれば何故壱朗が、自分に優しくしてくれのか解らなかつた。

だから、会合の後は好きなようにさせてやると言われた時も、どうせ嘘で、会合が終わればまた元通りの生活だと思っていた。壱朗が本気を出すまでは。

そして今。話が本当だと分かり、ミーシャはおずおずと口を開いた。

「もひ、おじさん達に噛まれたり、しない?」

「ああ。誰にもさせん。だからお前も人間を噛むなよ?」

吸血を経験済みのミーシャは、少しその味を思い出したが諦める。

「がんばる。だから、一緒に連れてつてくれる?」

「よし。じゃあこい」

「うん！」

ミーシャは八歳で吸血鬼になつた、その瞬間から無意識に『不老』を発動し、それ以降は全く変わっていなかつた。そしてミーシャはその外見通り、子供らしい笑顔で壱朗に駆け寄ると壱朗の首に飛びつき、甘え出す。

「吸いたくなつたら、俺のを吸えよ？ 何もかも我慢しなきやいけない訳じや無いからな。したい事は言つていいんだぞ？」

「うん……じやあ、我が儘言つても怒らない？」

「内容によるな。何でも言つていいわけじやないぞ？」

「じゃあ……パパつて呼んでいい？」

その瞬間、田巫女とティアは凍りつき、壱朗よりも圧力があるのではないかと思う様な暗いオーラを背負いミーシャへと目を向ける。「怖いお姉さん達が睨んでいるから、それは止めた方が良いんじやないかな？」

壱朗も内心では鬼婆だと思つたが、空氣を読んで言わなかつた。すると悲しそうにティアと田巫女を見て、

「駄目？ お姉さんなの？ 田巫女ママとティアママつて呼んじやダメ？」

雷が走つた様に体を震わせた一人は、壱朗に抱えられ首に抱きついているミーシャを奪い、我先にとミーシャを抱きしめ許可を出す。「ええ、ミーシャちゃん。かましまへんえ。田那はんはパパ。ウチはママ。それでよろしあすえ。そこにいる眷族の事は鬼ババアでかまやしまへんえ？」

「ちよつと、田巫女様。そんなに力を入れたらミーシャちゃん死んじやいます。どうせ、子育ても子守もした事ない様な、行かず後家なんでしょうから、無茶は止めて下さい。」

「……オホン。ミーシャちゃん。長年、彼方様と連れ添つた私が、ママとしてパパの事も色々と教えてあげますからね～。その行かず後家は『オバサン』とでも呼んであげてね～」

壱朗は女達のそんなやり取りを無視し、

主に自分の精神衛生

上の為に
それを見守る『酋長』に声をかける。（小説）

10

「爺さん、後で会いに来てくれるか。アンタのアコの白豚に興味は

「アントナとはやり合いたくないからな」

「分かり申した。儂は此処に残つてお力の一端を拝見させて頂いた

「彼方殿！ 妾は、その……」

「改めて真祖わいぢゆでも酔える酒を持ってお伺まついする」としますかの」

「クロウディア、だつたか？」

になる事があるんなら聞きに来い。一年は日本を出るつもりが無いからな」

そう言葉をかけたあと『門』の方へ向き直ると、右手を口巫女と、左手をティアを繋いだミーシャが明るく笑つており、なんとなく満たされた気分になつた壱朗は、笑顔で三人と共に『門』をくぐつた。

『Black Twice Octagon』それが『春の女王』と『酉長』が名付けた、壱朗の本気の『血の熟成』の呼び名だった。

壱朗達が立ち去つてから、その力の結果に日巫女の眷属以外は動けずに入った。日巫女の眷属はさつさとこの場を離れ、日巫女の搜索に向かっている。他の吸血鬼達は瓦礫の山の中で、真祖達が動くのを待つていた。その中でも最初に動いたのは、灰色のイタリア製のスーツに身を包んだ、ウィルソン卿だつた。

「」の力、素晴らしい！ 研究し、解明すれば不可能はなくなる！ どうです、皆さん。真祖全員で協力し、あの彼方という真祖を捕

えるのです。そうすれば我々にもさらなる力が手に入りますよ！」

「ウィルソン卿は両手を広げ熱のこもった台詞を吐くが、賛同の眼差しを向けた真祖は一人もいなかつた。しかし、真祖は賛同していなかつたが、一世、二世、三世やそれ以下の者達の中にはその考えに賛同する者達が、かなり居そつた。

「阿呆か貴様。今この惨状を見る。手を出せば、我らすら死に絶えるわ。よく見てみろ。残つてるのは守られておつた我々と、床などだけじや。外壁、外装、屋根。何処に行つたと思う？ 同じようく消滅したいのか？」

『春の女王』は残された事の不満をウィルソンにぶつけるかの様に睨んでいる。

「ウィルソン、お前が儂を騙して研究した『重力』の研究、その研究過程で生み出した副産物の様な紛い物をもつと増やす氣かの？」

『酉長』の言葉は騙された恨みは忘れていないと、射殺す様な視線と共に放たれている。

『春の女王』と『酉長』に駄目出しされ、その怒りの圧力に何も言えないウィルソン卿ではあつたが、戦闘向きではない日巫女と今^百年を経ていな^{14番}いはまだ幼いミーシャを人質にすれば、どうにかならないものかと頭の中で計画を考え始めていた。

そして、『春の女王』と『酉長』の二人は自分達が、良識ある行動を取る者として壱朗に期待され、此処に残された事に気付く。他の真祖達は、壱朗の見せた力への対抗策も無いまま、己の立ち位置を決めてしまふのは不味いと感じていた。

それ故に、『春の女王』と『酉長』の二人より先に動き、壱朗に伝わる事を避ける為、ただ黙つて座つていた。

「どちらにしろ、『春の女王』様と『酉長』様はあちらにつくのでしょうか？ ボクは自分の目で彼を見定めてからにするよ。格上に対しても失礼かもしれないけれど、このスタンスだけは崩せないね」

動かない面々に見切りを付け、消滅のせいで埃まみれになつたソ

ファから、優雅に立ちあがつた金髪碧眼の男は、その場に残る全ての者の目の前から、何の予兆も痕跡もなく消え去つた。

「私は挨拶を済ませてから、帰らせてもらいますよ。これ以上コレクションを燃やされては敵わない。彼方様云々の話はともかく、あのティアという眷族には、城に近寄つて貰いたくないのでね」

コレクションの為に中立しか選択肢の無いラマルティーヌ卿は、そう言いながら自分の眷族に指示を出し、撤収を始めた。

その横でずっと何かを考えていた、チャイナドレスに身を包んだ真祖の一人が、この場で最も力のある一人に対し、提案を持ちかける為に話し始める。

「『^{クロウティア}春の女王』様と『酋長』様は黒髪魔神というお話を聞いた事がありますか?」

その提案が、誰の為に、何の為にされたのかは、今の段階ではまだ誰にも解らないのだった……

第10話 生りたて真祖冒険記 其の壱（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

この話は御遊びです。読まなくても問題ありません。

ただ単に、筆者的好きな過去の人物との絡みを入れようとしただけです。

説明が長いのでめんどくさい方は無視して下せ。

とある神社の付近の森。
そこに、その付近の景色の美しさには似合わない声が響き渡つて
いた。

「ティア～。くつそ～！！」

壱朗は、最後のティアの言葉が原因で、その付近に響き渡る声で
ティアの名を連呼し、呪いの言葉を吐いていた。

「覚えてろよ～次に会つた時には、百倍返しにしてやる……」

壱朗が今居る場所は、周辺が何故か森だつた為、周りを気にする
事もなく、地面にのたうちまわり悶えたいた。現段階では、『能力』
は『怪力』以外全く発現していない為、そこに近づく一人の人物に、
全く気付いていなかつた。

そして少し落ち着くと、誰が結んだのかは解らないが、大木に結
んであつた薄汚れた白い帯を見つけ、今度はその帯にハツ当たりを
始める。

「くつそ～、あんな不意打ちを食らうとは……油断してた……これ
は黒歴史に成るやもしれん……」

などと、ちょっと古臭い言葉使いで自問してるあたり、既に傍か
ら見ればかなり怪しい男に見えるのだが、『御主人様』などと呼ば
れる事に比べれば大したことはない。

少なくとも、壱朗はそう思つていた。

そして、ハツ当たりで白い帯を引っ張り、振り回し、木に叩きつ
けている内に帯が切れてしまうと『怪力』を発現している以上
は当たり前の結果なのだが、そこで自分のしている事に初めて気

付く。

「し、しまつた。『レ、どうじよ……代わりなんか用意できるはずないのに……』」

「もし、そこの君……」

壱朗は焦った。誰も居ないからと思い、やつていたはずなのに誰かに見られていたとは。冷静に考えると『時間跳躍』で過去に跳んだはず。今が一体、何時なのかも分からないのに自分は何をやつていたのか、と壱朗は自問自答し始める。

そこでかけられた声を無視しているあたり、まだ冷静ではなかつたのだろうという事はよく分かる。しかし、声をかけた方にはそんな事が分かる筈もなく、再度声をかけてきた。

「もし、君。先程から熱心な掛け声で、修練をしていくようだが型が悪いのではないか？」

「そうだな鈴木君。帯を見るに、まだ学び始めてそこにやあに経つとらんちゅう事は察するが、いかんせん腕力に頼りすぎちよ。その細腕で、そこまでの力を出せるちゅう事は、才能はあるかもしけんがの」

その一人の発言で我に返つた壱朗は、とにかくこの場は無難に過ごし、現状把握と生活基盤の確保だな、と思い至る。目の前の人には修練だという事で、千切れた帯の事は許してもらえるだろう。

「あ、その、見よう見まねだったので……」

「へえ、見様見真似でその結果か、君の真似てこるのはどこの古武術かい？」

「いや、鈴木君。武術 자체が初めてなんじゃなかか？」

「は、はい。そちらの人の言う通り、武術をやつた事はないです」

「にしやあ、武術の心得なしで帯をちぎりおるか……ふむ……」

目の前にいる、小柄な男は和装の出で立ちで、もう一人の青年は同じく和装なのに何故か下には襟のないシャツの様なものを着て

いた。一人は壱朗の着てある服を珍しそうに見ていく。 と壱朗は思つていたが、実は見ていたのは服ではなく体つきだつたのだが

鈴木と呼ばれた青年の服装の方が珍しいんぢやないか、などと思つていた。

「四郎殿？ また悪い癖が出ておりますな？」
「にしゃの先程迄の掛け声から察するに、何者かに負けたんぢやう？」
「え、と。あの、そういう訳では、」

「隠さんでもよか。鈴木君と先程の掛け声が気になつての。力のこもつた掛け声にじやつたけえ、覗いてみたんぢや。何度も負けておるのかの？」

負け歴史ちゆうとつたじやるつもん？」

鈴木と呼ばれた青年の言う事から察するに、四郎と云ひ名前の初老とまではいかないが、四十は超えていいるであろう男性と一人で、先程までの壱朗の一人芝居モドキを見ていた様だ。それに気付いた壱朗は、頭を抱え悶えそうになるのを、必死に堪える。

「余程、負けたのを気に病んでおるんぢやの。」

「会津でよく聞く掛け声から、会津あたりの方かと思いましたが、服や言葉遣いは東京の育ちでしようか？ 服も外国の物で揃えてある様ですし」

「文明開化と共に日本を離れた商家のもんかもしれんのう。それならば武術に覚えがなくとも仕方なから」

「ああ……日本に戻つてみれば、講堂館の柔道の波にのまれてしまい、荒れている柔術家に暴力で負けた。と言つたところでしようか。それで『ていやー』と叫びながら修練に打ち込んでいたのでしょ？」

田の前で次々と勝手に話が進んでいく上に、『ていやー』ではなく『ティア』だと思つたが、説明しろと言われても困る。だから、

黙つてそれを受け入れていた壱朗だったが、とりあえず聞くべき事を聞く事にする。

「あの、申し訳ないのですが、今は何年でしょうか」

「ん？ 年号も知らないのか？ 今は大正二年になつたばかりだよ」

「いや、鈴木君。年の瀬からやつておつたのではないかの？ 年が明けた事に気付いておらんのじゃろう」

「なるほど。そういう事ですか。しかし、四郎殿のよつですな。時

間を忘れ修練にかまけるなど」

「鈴木君も言つ様になつたのあ」

「ところで君、失礼だが名前は？」

壱朗はここで初めて、回答に真剣に悩んだ。万が一だが名前を何らかの記録に残されても困る……と。そしてあまり待たせるのもおかしいと、咄嗟に答える。

「『田中一郎』です」

「ふむ。ありふれた名前じゃの。特に聞いた事はながが……」

「そうですね。この辺りでは農家の方はほぼ同じです。根掘り葉掘りすまないが、漢字はどのような？」

すまないとと思うなら聞かないでほしい。壱朗はそう思つたが、傍から見れば自分が不審者なのだったと気付き、聞かれた事に答える。「田んぼの田に、上中下の中、横一本の一に桃太郎の郎です」もちろん出鱈田を。心の中で天国の曾祖父に「この『嘘』は必要悪なんだよ、かんべんな」などと言い訳しながら。しかし、この時代に壱朗の曾祖父は、産まれてすらいないだろうが、それに気付く事は無かつた。

「そうか、漢字もありふれているね。あ、すまない。僕は鈴木義雄という。鈴木天眼という名前に聞き覚えは？ 父なんだがね。四郎殿ほど有名ではないがね」

「そんな事なかろうもん。鈴木先生にやあ、世話になつちゅう者も多かるうて。

わしゃあ、西郷四郎ちゅうもんじゅう者も

「西郷四郎……どこかで聞いた様な……」

「そりやあ、君。知らない方がおかしいぞ。聞いた事ないかい？」

『寄るな触るな西郷四郎、触ると恐いぞ西郷四郎』

つてね。子供達でも知ってるよ。『山嵐の西郷四郎』の名はね

「ああ！なる程。それで……」

「それも昔の事よ。わしも無敗ちゅうわけやないしの」

壱朗は、先程の自分を褒めてやりたかった。全く気付かなかつたとはいへ、歴史上で、ある程度の記録に残つてゐる人物の傍に、本名でいられる訳がない。まかり間違えて、何らかの記録に残つてしまつたらどうするのか。

曾爺さんが『彼方』という名字を付ける時に、そういう人物が過去に居た事を調べ上げ、止めてしまつたら、それだけで歴史が変わつてしまつ。それで自分の名前が変れば、どんな変化があるかも分からぬのだ。

とにかく無難にこの人たちとは別れよう。そう思ったのだが。

「のう若いの。にしゃあ古流をやる気はなかか？」

西郷四郎殿がそんな事を仰つて、ぶち壊しにして下さいました。

「どうしてでしょか。自分は大した才能も……」

「そんな事はなか。にしゃあ、その力がある。嘉納先生の元で『柔よく剛を制す』と道を極めてみようとしたものの。古流の技、異人の恵まれた体格の前には『道』だけでは勝てん事も多かつた。確かに『柔道』は素晴らしいもんじゃが、しかしそれが最強、最高といふ訳ではなか

壱朗は困つた。そして隣を見ると、鈴木青年も困つてゐるようにな見える。何が起こつてゐるのか。何でこんな話になつてゐるのか、理解できなかつた。

「不躾にすまんの、しかし、その力を見てしまうと心が抑えきれん

での。にしゃあ武術はしどらんと言つとつたが、しどつたら間違いなく、わしは試合を申し込んでおつた。それ程までの『剛』じゃの。わしの『柔』でどこまで制する事ができるか試したかつたわ

「そんな事は……」

恐らく能力の『怪力』の力を見抜いているのだろう。いくら薄汚れているからと言つて、流石に帶をちぎるのは不味かつたようだ。全く折れてくれる気配が無さそうな西郷四郎に壱朗は困り果てる。「隠すな。でないとわしが間抜けになる。いくつかの流派の師範と共に考えた事がある。『柔よく剛を制す』のではなく『柔剛一体』となればどうなるのかと。年を重ね、技を磨いたからこそ解る。今わしの技が一十の頃に使えたら、とな

「……素晴らしい技となる、でしおうね。四郎殿であればなおさら」

鈴木青年にも言つてはいる事は解るのだろう。本当に素晴らしいと思つてはいる表情をしている。壱朗にも分かつた。柔道だろうが空手だろうが、同じ技なら体重の重い方が勝つ事がある。もちろん小柄な方が仕掛けやすい技もあり、一長一短なのだろうが。

だが、西郷四郎殿の言つてはいるのはそういう事だけではない。恐らく体格に優れた者、陸上選手には黒人の選手が多い様に『怪力』を使える壱朗の体で、郷四郎並みの技を行えばどうなるのか。そういう事を言つてはいるのだろう。

「しかし、私は此処に流れ着いたばかりです。身元も解らない者を徒つてくれる流派もないでしょう」

「一郎君と言つたの。やる気があるんなら、ある程度はわしが、後は古流をいくつか紹介しちやる。君は幾つじや？」

「四郎殿、本気ですか？ 長崎まで連れて行く気ですか？」

此処でも困つた。壱朗は吸血鬼の真祖になつた。今はもう、日が昇つているので日光は大丈夫なようだが、鏡に映らないとか、海を渡れないとかいう弱点をよく聞く。そして老けないと。そのまま

の年齢を言つ訳には、いかなかつた。

「老けている、とよく言われますが、次で二十歳。今は十九です」

「僕と同じ年かい。確かに老け……いや、貫禄があるね。うん」

内心では『うるせえよ。28だよ。当たり前におっさんだよ』と

思つたが、何も言わなかつた。言えるはずもなかつたが。

「よし、決まりじゃ。一郎君、これからよろしくの」

「四郎殿の我が儘には敵いませんね。一郎君。長崎までは一緒にやらよろしくね」

壱朗は、今日何度目になるか分からぬ混乱の最中にあつた。

『何で、一緒に行く事になつてんの？ しかも長崎つて。そう言え
ばここどこか聞いてない。跳ぶ前は大阪にいたはず。過去に跳んだ
だけなら此処は大阪？ いやいや、そういう事ではなくて。連れて
行かれるのは決定事項なのか？』といった疑問が渦巻いていたが、
目の前の二人はそんな自分の意思を無視し、『僕たちの宿に一旦行
こう。そこで詳しい話も聞きたいしね』などと促され、ただ流され
てついて行くのだった。

次の日、一緒に宿に泊まらせてもらつた。もちろん壱朗はお金
を持つていないので奢つてもらつた。後、四郎達の用事が済んで
から、買い物をした。その後、堺の港まで馬車に乗つて移動した。

とにかく困つたのが移動だつた。『怪力』の効果で身体能力に加
え、体力まで増えていなかつたら、絶対にこの時代に生きていくけそ
うになかつた。日程が迫つてゐる為、馬車に乗つたのだが、そうで

なければ徒步の予定だつたらしい。県を超えるのに、徒步で行くといつのである。

壱朗の生きてきた西暦2100年でも、車は空を飛んでいなかつた。しかし、個人所有の車や単車はあつた。それが大正時代のはじまつたばかりには、一般に普及していないのだ。基本はとにかく徒步。これが何より辛かつた。もちろん蒸気機関車や車もあつたが、残念ながら縁はなく、四郎達の用事がある間と買い物の間はずつと徒步だつた。

「つまり、一郎君は異人に負けたせいで、親から勘当された。そういう訳だね」

「明確にそう言われた訳ではありません。が、家に戻る事も、有名になる事も避けたいです。特に家に戻るのは不可能なので、知られる訳にはいきませんので」

「わしはかまわんよ。……その気持ちも理解できるしの。一郎君が技を身につけた結果を、見せてくればそれでえんじや」

「四郎殿はそれでいいかもしませんが、私は父上に説明しなければなりませんので。それと一郎君。ウチの新聞社で、雑用をして頂きますからお忘れなく」

「はあ。私は働くのなら、それに越したことはないですが。無一文ですしちゃ」

「とりあえず、わしの指導してある柔道、弓道の道場に居候という事になる」

「戸籍が困りそうですが……まあ、田舎の方で隠されていたと言つて、何とかしましよう。父の『鈴木天眼』は衆議院議員にもなつた事がありますので、伝手でなんとかなるでしょ」

壱朗は複雑な心境だつた。記録に残りそうな所からは、離れなければいけないのであるが、しかし生きていく當てもない。

買い物の途中で田立ちたくないからと、着てている服の出所については嘘をついて、服を全て売り払い これが実に良い金額になつた 新しく和装を整えた。

そんな訳で三名は今、長崎に向かう船の上で会話をしている。船旅は壱朗にとって窮屈な物であったが、四郎の語る『道と術』の理論に、壱朗は漫画や小説の知識からの机上の空論で相手をし、それが理解できない鈴木青年が身の上話を切り出した、という状況だ。

「しかし、にしゃの事を見ぐびつておつたようじやな。異国へ渡ればその様な考え方の武術があるのか?」

「どうでしょうか。大陸の武術はもつと奥が深いと聞いていますが」
「四郎殿の御実家の方にも確か、御留流が残つていると聞いていますが、薩摩や出羽の方にもある様ですね。行つてみるのでしたら、古流の師範代あたりへの紹介状が要りますね」

「いや、そこまで学べるかどうかも、分かりませんし……」

「まずは最低の基礎からじやの。奥義に近い理想論は持つておつても、実行できる土台がなけりや、どないもなりやせんじやろ」

壱朗が四郎と話して気付いた事は、確かに漫画や小説等で語られる武術の技は、無理があるものもあるが、実は日々の修練と、それを体現できる先駆者がいれば、けして不可能なものではない、とう事だ。

これである意味、スポーツに特化してしまった過程で、失われてしまつた技や概念には力がある物が多い、という事がよく分かる。小説や漫画に『奥義』やら『秘伝』などが出てくるが、実在のそいつたモノは存在したが壱朗の居た未来には伝わっていない。もしくは、伝わっているのだが公開されていない。そういう事なのだろう。そして壱朗は、それを見てみたいと思つてしまつていた。

「一郎、行くのかの？」

「はい、四郎先生。三船師範の元へ向かいます」

「恐らく、次はもうないじやろ。にしやには確かに見せてもらつたぞ。『古流』にある『術』や『道』では見れなかつた可能性を『私こそ四郎先生には、数々の技を見せて頂きました。後、この古流の尊や記録。これを辿つてみようと思います。この先に武の到達点が見れるよう、祈つていて下さい』

四郎に連れられたあの日から、十年が経つていた。四郎の指示で基礎を学んだが、吸血鬼である彼にはあまり必要がなかつた。ある条件を満たせば、覚えが良すぎるるのである。

条件とは、『死の危険』が伴つ事であつた。実際に死ぬのではなく、壱朗が死ぬかも知れないと、思い知らされる状況で覚えた事は、血が忘れなかつた。

「にしやは危なっかしいが、覚えは悪くない。やり方は悪いが、道場破りのつもりで死に行けば、いつかは辿り着くじやろつ

「はい。私の事情を知つて、それでもなお、受け入れてくれた四郎先生とだからこそ、出来た稽古でした。一生忘れません」

受け身一つとってもそうだった。四郎が殺す氣で、頭から落ちかねない技を放てば、嫌でも受け身を取つた。

それを『血』は覚えており、次からは同じ技は効かなくなつたし、自分でも再現できた。へタレな怖がりの、壱朗ならではの習得法だつたのかもしれない。

吸血鬼である事に慢心して、のぼせ上がつて命の危険を感じなくなれば、習得に時間がかかっていたかも知れない。

そして何よりも、吸血鬼である事がばれても、受け入れてくれた四郎とでなければ出来ない事だった。それ故に壱朗は四郎に感謝していた。

「わしの事たあ忘れても構わん。だが可能性を辿り、その神體に辿り着いたら、それだけは志高き者に伝えてくれ」

「はい。必ず、その神體だけは後の世に残します」

その願いが、壱朗の聞いた四郎の最後の声になつた。

それから壱朗は日本全国を回り、剣術、柔術、居合、弓術、唐手、山の様な武術の形を見て、一つ一つ手に入れていく事になる。

しかし、そのさなか、第一次世界大戦における徴兵でかなりの口伝、秘伝が失われている事を知り、戦争に対する嫌悪を抱いた。口伝や秘伝が失われる前へと跳んで、回収したいという欲望を抑える事に労力を割く事になつた。

そして、壱朗は西暦1930年に三船師範が、隅落しを完成させた事をきっかけにしてアメリカへと渡る。それは完成を待つていた

のではなく、ただ三船師範の試合、その場に集まつた高段者が古流の面影のない、スポーツの柔道をを目指したものばかりだつた事が理由だつた。スポーツとしての強さは維持していたが、神髄を究める意思が見えなかつたからである。

もちろん、日本国内でそれを目指す流派もあつたが、そのほとんどとは接触済みで、海外に渡つた柔術家を追いかける為にアメリカへと渡つたのである。

のちに、壱朗はこの技術をティアに教えてしまう。そしてその日から、ティアを苛めた後には必ずと言っていい程、お仕置きと称して逆関節を決められる日々が来るのだが、渡米する段階の壱朗はそんな未来は知る由もなかつた。

第1-1話 思惑（前書き）

プロローグの第0-1話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

しな垂れかかって来る日巫女を脇にどけながら、壱朗はティアの煎ってくれた緑茶を飲み、煎餅をかじっていた。

「日本で能力の使い方に慣れた後は、最初にアメリカに渡った。その時から『血の熟成』の研究を始めたんだよ。その研究がおおよそ形になつた後、ありつたけの力を使って、アメリカ大陸で過去に遡さかのぼつた」

「……はあ」

ティアはどうにも意図が分からぬ、といった顔をしている。

「その後で『酋長』に出会つたんだ。出会つたのは結構経つてからだつたけどな。西暦1900年あたりまであの国にいたんだが、西暦1500年くらいからだつたか？」

白人が移民してきてな。その中に三百歳くらいの真祖のガキがいたんだ。そのガキがな、調子に乗つて白人主導の国を作り始めたんだよ。知つての通り、歴史には携わる訳にはいかなかつたからな、そのままアメリカ大陸を出た」

忌々しい、そんな表情を隠す事なく言つ壱朗に、当時の悲惨さが伺える。

「そうなんですか……」

「ただ、先住民族を排除しようとする、白人系の奴等のやり方に頭に来てな。つい、手を貸しちまつた。それが狼の群れと暮らしてた、『酋長』の部族だつた」

ティアはそれを聞き、安堵する。歴史への干渉はしないと言いつつ、人助けをする。そんな壱朗の優しさが、ティアは大好きだった。「そういえば壱朗様は、たまに人助けしてましたよね。その後に必ず『歴史が、歴史が』って言いながら、唸つて後悔されてましたが

……」

「旦那はんらしおすなあ。ウチも阿呆な眷属から、助けておくれやすう」

日巫女は話の合間を読んでは、誘惑しようとした壱郎の胸元に躰を寄せる。

「日巫女様！ いちいち、壱郎様にしな垂れかかるのはやめて下さい！」

そう言つてティアは、日巫女を壱郎から引き剥がし、二人の間に腰を下ろした。

「ティアはん、会合の終わつた翌日迄は、好きにさせてくれる約束やおへんか」

「ええ。そうでしたね。少し違いますが似たような『約束』はしましたね」

不満そうな日巫女にティアは笑顔で肯定する。

「ほんなら……『ですが』……え？」

「約束では、『4月17日迄は、日巫女様のお好きな様にして頂いて構わない』というものでした。会合の翌日ではありますん」

「…………まさかっ。旦那はんっ！ ウチの事、騙しはつたんかいなー。このつ。旦那はんの変態つ。いけずう！」

ティアが壱郎との間にいる為、日巫女は煎餅を壱郎に投げつける。壱郎はそんな日巫女に苦笑しながら、飛んでくる煎餅を受け止め、籠へ戻している。

壱郎は会合が始まつて、直ぐに会議場を二日後に跳ばした。つまり、今は4月16日に会合が行われた三日後、4月19日なのである。

壱郎以外はティアも日巫女も、約束の日時の事に気付いていなかつたが、あまりにもティアの機嫌が悪くなるので、壱郎がこつそり気付かせるや否や、ティアは鬼の首を取つたかの様に、日巫女を妨害し始めたのである。

「パパ！ママ達も！見て！猫ちゃん！」

「どこで見つけたのか、猫を抱えて走つてくるミーシャ。

「お、ミーシャ。懐かれてるな。でも気をつける、猫は気まぐれだからな。ちょっとでも嫌になると逃げ出すぞ？」

「一緒にいられないの？」

三毛猫を抱いている、ミーシャの表情が曇る。

「飼うなら、日巫女の神社に預ける事になるなあ」

「ごめんね、日巫女様の所には長くは居ないから、置いて行く事になっちゃうね」

ミーシャは、猫がどういった動物なのかも知らなかつた。

「そつかあ……」

ミーシャの精神年齢は幼い。

吸血鬼となり、無意識に『不老』を発動した事で体が成長せず、氣味が悪いと両親に病院へ放り込まれた。その後はずっと幽閉状態で暮らしていたし、ラマルティーヌ卿に捕まつてからも、それは変わらなかつた。

故に、付近には桜が満開のこの茶屋も、壱朗達と食べている和菓子もお茶も、猫を抱いているミーシャにとつては、新鮮で楽しい事だらけだつた。そんな些細な事が嬉しく思えてしまう程、ミーシャの今迄の生活がどれだけ暗く、そして重い人生だったのかが、他の三人には解つてしまつた。

だからこそミーシャに同情してしまい、ある事に気付けなかつた。それを後悔するのは、数日後の事となる。

茶屋には今、従業員はいない。此処は日巫女専用のお茶飲み場所であり、迷い込んだ一般人の対策に、茶屋の形をとつてゐるだけだ。普段はずつと、日巫女の眷属が暇つぶしに営業している。

ただ、日巫女の眷族はまだ会議場に閉じ込められている為、誰も

居ないだけだ。

会議場を出てからの四人は、壱朗作の『血の熟成』の力を抑える『符』を身に付けて、ずっと茶屋にいた。それに気付かない日巫女の眷族は、会場を出たら京都からは逃げただろうと、全国へと散つて行くだろう。

冷静さを欠いていると、意外と気付かないのは人間も吸血鬼も同じ様だ。

過去の日巫女の逃亡癖が、そうさせらるのかも知れないが。

「パパはお札が無いと、いつも怖いパパなの？」

ミーシャは可愛らしく首を傾げて、こちらを覗きこんでいる。

「そういうわけじゃ無いさ。でも今は隠れんぼの最中なんだよ。見つけた人だけ、美味しいお茶とお菓子と桜が楽しめる。そういうお遊びなんだ」

「せやからミーシャちゃんも、腕のお札、破がしたらあきまへんえ。そないな事したらミーシャちゃんが鬼になつて、ウチらが逃げてしまいますえ？」

「やだ。パパとママ達と一緒にいる！ 破がさないよ」

日巫女の言葉に、ミーシャは札を張つた腕を背中に隠し、守つている。

壱朗は日巫女の言い方は子供心をくすぐる、いい言い方だと思つていた。これでミーシャは、当分は札を身に付けているだろう。お札そのものでは見た目が悪い。何か考えてあげなければ、と壱朗は頭を悩ませていた。

しかし、ティアは日巫女の意図に気付いていた。ミーシャに『ママ達と一緒にいる』と言わせたかつただけなのだと。壱朗に聞こえる様に、ママ『達』と。

「しかし、これで気づく人いるんでしょうか……これ、壱朗様の渾

身の『符』と同じですよね？」

「『酉長』は結界にすら気付いたじゃねえか。一人一枚だし、大丈夫だろ」

壱朗は樂観的だが、実は自身を過小評価していた。この状態で気付けるのは、『魔血晶』を背負つ真祖か日巫女の眷属の血技、後は偶然ぐらいであった。

「何枚も貼れるの？」

「ええ。そうすれば更に解りにくくなるのよ。」

「じゃ、ミーシャもつと貼る！」

頂戴と両手を前に出し、アピールするミーシャ。

「だ、め。それはズルっこだぞ。一枚で我慢しなさい！」

「うう～」

壱朗にあつさつと断られ、ミーシャは頬を膨らまして、拗ねる様に壱朗を睨む。

壱朗はそんなミーシャの頭を撫でてやつた。実は壱朗は本気でそう思つてはいる訳ではない。ただ、札の効果は貼られた者の魔力を使用して発動している為、生りたての吸血鬼に負担がどれだけあるのかが、分からぬのだ。

『符』の効果は、体の表面から十数cmより外側に、魔力を出さない様にするだけだ。おかげで魔力の残滓が、体表を循環し治癒も高める効果があるが、目視されれば気付かれる。壱朗が会議場で力を見せない為に張つていた結界とは、完全な別物だった。

一定以上強くなれば、自然とその強さを隠すのも上手くなる。それは人間も吸血鬼も変わらない。自分の力を誇示するなど、阿呆のする事だと思つてはいる者は多い。特に真祖や一二世はそうだ。

背に『魔血晶』を背負えば、更にその傾向は強くなる。格の違いを突きつける為に見せる者も居るようだが、普通はしない。何故なら三世以上は血が濃い為、上位者の存在は見れば解る。『血』が上位者の存在に恐怖を感じ、敬意を表する様に騒ぐので、見せる必要

もない。

『魔血晶』を背負う吸血鬼からすれば、四世以降の者などは人間と大差ない存在だ。血の力が弱く、解り難いからだ。千年以上を生きた真祖や一世なら、三世すら同じ吸血鬼として認識していない場合もある。

恐らく今、京都タワーなど高い建物の上には、挨拶に来ようとする者達が、壱郎達を視認しようとしているだろ。

どんなに魔力が感じられなくても、『見れば解る』筈である。

その為に壱郎は、普段の生活ならば完全に消している滲み出る魔力の残滓、それを今は抑えていなかつた。その上で、見つけやすいように見晴らしと景色の良い場所で、お茶を飲んでいるのだから。

久しぶりの和菓子を楽しみながら、壱郎は旦巫女に聞きたかつた本題へと話を進める。

「旦巫女、お前は背に幾つ背負つてる？」

「旦那はん、そういうんは寝屋で聞いておくれやす。旦那はんからすれば、対した事おまはんやしれまへんけど、ウチはこれでも祇園で最も高いお華やつた女おなどすえ。安う見てもおては困りますえ？」

旦巫女は茶化すが、壱郎には通じなかつた。

「……死ぬ氣か？」

「…………旦那はん達は特別な『血技』をお持ちやから、知らはらへんまま、乗り越えはつたんかと思つてましたけど……知つてはつたんどすなあ……」

「壱郎様？ なんのお話ですか？」

ティアは知らない。本能で気付いているかも知れないが、はつきりと自分で認識していない。

「それに答える前に旦那はん、教えておくれやす。ティアはんの四つ目創りはつた時、その時ほどないしはつたん？」

「時空間捕縛結界で棺ごと眠らせた。試作品の結界符だつたから、

内心ではヒヤヒヤしていたがな」

「え？ それって、私の『魔血晶』の創生に失敗しかけた時の事ですかね？」

「う？」

ミーシャには話の内容も単語の意味も、分からぬのも無理はない。不思議そうにしていたが、理解するのを諦めたのか、猫をくすぐる作業に戻つていった。

「旦那はんの時はどないしはつたんじす？」

「前半一回は過去に跳んだせいかと思い、氣力で耐えた。後半一回はティアにとつた方法と同じ、みたいなものだな。一回耐える迄はティアと会えてすりいなかつたからな。ティアに会つ為に死ぬ氣で耐えた」

「これに一回も耐えはつたんじすか。さすが旦那はんじすなあ……それにしても。ほんに、ティアはんがけなるいわあ……」

「え、と？ あれ？ 何のお話なんですか？」

ティアも気付いている癖に、未だに認めるのが嫌なのだろう。思い出したく無いと拒否しているのだけかも知れない。

「ウチも、そこまで思うてもらえるんなら、頑張つてみてもええんやもしれまへんけどなあ……」

その日巫女の表情に、何か危ないものを読み取つた壱朗は、驚きに目を見開くと同時に、ティアを退かし日巫女の身体を抱き寄せる。そして、元々肩にからうじて引っかかつていた程度の着物を、後ろ襟を掴んで引き下ろすと肌を晒させる。

「旦那はん、こないな昼間から屋外でやなんて、ウチ恥ずかしあすがな」

「茶化すな。場合によつちや責任はとつてやる」

「い、い、い、壱朗様つ！ 一体何をつ！」

「おかしいとは思つてたんだ。舞妓姿なら、背中が結構見えてても、おかしくなかつたのにな。お前、胸元はえらく見せてるくせに、背中を隠してたる」

「日那はん。遊びなれてはるんどうすか？ 御華遊びなんかしてないかと思つてましたけど……まあ、ウチかて本気で隠せるとは、思てやしまへんでしたけど」

上半身を裸にされた日巫女は、袖から腕を抜いて壱郎の首に抱きつき、ワザとその豊かな、下着も付けていない胸を押しつけている。ティアはそれを止めさせようとしたのだが、そんな日巫女をの態度を無視し、背中を見る壱郎の顔が真剣そのものだつた為、同じ様に黙つて背中を見た。

もちろん、ティアは日巫女の背中など見た事は無かつたが、ちゃんと見る事でその異常さに気が付いた。

背中だけ、異様に汗をかいている。それはまだ可愛い方だつた。日巫女の背中には四つの『魔血晶』がある、そして魔方陣も浮かび上がつてゐる。

異常なのは、その『Black Tetragon』の魔方陣が血管や神經のように蠢き、明滅しているのだ。

「こ、これは……壱郎様つ。もしかしてつ！」

「その通り。ティアの時と同じだな。そして俺が四回経験した事のあるものだ。俺はこれを自殺陣病と呼んでる。ティアの時は魔血晶の創生に失敗したとばかり思つていたが、自分の十一個目を創った時に気付いた。コレは予定調和だと」

「自殺因子……どすか。日那はん、上手い事言ひはりますな……」

ティアも今の日巫女の状態の苦しさは知つてゐる。何しろ、約千年前に自分も四つ目を創つてもらつた直後に経験した。その時はティアは創生の失敗だと思っていたし、壱郎の符で乗り切つたので、自分の背中を見た訳では無かつた。だから、今の壱郎の確証がなければ、すぐには気付かなかつただろう。

「旦那はんも知つてはるんやつたり、話しあはるおなあ…………

『実は、もつそないに持ちまへん。せやから、旦那はんにはウチのト
眷族の子らをお願いしたかつたんだす。お詫び、ゆう訳やおまへんけ
ど……ウチの事、好きにしてくれはつてよろしおすさかい。なにと
ぞ、引き受けたつてもうえやしまへんやろか…………』

「そんな理由で、女を抱ける男だと思つてゐるのか？」

「思てやしまへん。だから、あんじょつ抱いて貰^{無黙}える様に、氣いつ
こつたのに。旦那はんがウチの事騙^ばしはるから、やわになつてもう
たんやおくんか」

「…………そ^{おな}うか」

「あんまり女に恥かかすもんやおまへんえ？　『口返言わしたんど
す。男らしゅう、責任とつてくれはつても、ええんやおまへんか？』

日巫女眼は既に笑つておらず、真剣そのものだった。

壱朗はティアを見る。ティアから日巫女に聞こえない様に、血
族間通話で話しかけられる。

『眷属をお引き受けになられますか？』

『それはリスクが高すぎると思つ。俺の血技を広める事になつちま
う』

『では、死ぬつもりの日巫女様を無理矢理生かすか、死なせて、そ
の眷属を放置するか。ですよね』

壱朗の答えは解つているのだろう。壱朗がティアの強さに甘えて
いるだけだった。

『…………そ^{おな}うだな』

『いいですよ。一人ぐらい愛人が増えても。

他に増やさないつて、眷属も作らないつて「約束」してくれるな
ら、ですけど。

『…………どうします？』

『…………すまん』

ティアは、壱朗が放つておけない事は分かっていた。自分の時も思い出したく無いくらい、生きる事を諦めてしまう様な感覚だつたのだ。いつの段階で、日巫女がこの状態になったのかは知らない。ティアの時は創生して一日で同じ状態になり、発狂しかけて壱朗に眠らされた後、気付いたら収まっていた。

日巫女はそれを耐え、眷属を壱朗に託す為に今日まで我慢した。壱朗の表情を見れば、自分の体験を思い出せば、それがどれだけ辛いものか嫌でもはつきりと解る。

「旦那はん、そないな情けない顔せんとつておくれやし。最後に抱かれる男が、そないな顔してはつたら、ウチの華もしほんでしまいますえ？」

茶化す日巫女に壱朗は本氣の眼で言い返す。

「俺は、俺の我が儘でお前を生かす。許せとは言わん。責任ぐらいとつてやる」

「やめておくれやす、ウチはもうましまへんのや。ウチの子らだけ見てやつておくれやす」

壱朗はそれ以上説得をする事を諦める。そして、血の力を抑えている符を剥がす事も煩わしいと、力を開放する事で符を弾き飛ばす。「ティア、ミーシャと一緒に此処にいろ。お前を見つけた者がいたら、すぐに戻るからと伝えておけ。多分来るなら『酋長』が最初にくると思うから、困つたら『酋長』に相談しろ。」

「はい。お帰りをお待ちしてます」

ティアはもう、何も言つつもりはなかつた。

「旦那はん何する氣い？ やめてんか。ウチの事はもあ、ほつといつおくれやす」

日巫女は壱朗が何をする気なのが分からず、拒絶しようとする。壱朗の魔力の開放に当たられ、崩れかかっていた結い上げられた髪は、日巫女が首を振る事で完全に解けてしまつ。

「つるさい。だまれ。時間旅行に連れてつてやる。トレックスとか

見ものだぞ？」

そんな綺麗な黒髪を、器用に胸元に垂らしてやりながら、無茶を言つ壱朗。

「はー？ ほんまに何しはるつもりやのん！？ やめて、はなしておくれやす！」

日巫女の叫びも虚しく、壱朗は日巫女を抱えたまま、その場から消え去つた。

実はティアの考えでは壱朗の為にも、日巫女を失う訳にはいかなかつた。真祖が眷属にはなれないのでは、壱朗が拒めば愛人が増える事は無い。だから日巫女さえ抱かれる事を諦めてくれれば、それで良かつた。そして、目的に協力してくれれば問題無かつたのだ。

だが、死んでしまうというのは困る。

どんなに時間がかかっても、日巫女の協力を得て知りたい事があつたのだ。

ティアが一世以降は『血技』を増やせると知つた時、ティアは真祖より一世の方が強くなるのでは？ と考えたが、それはある意味間違いだつた。

なぜなら『血技』は両刃の剣でもあった。『血技』を使用できる吸血鬼は、同時に『血技』一つにつき一つ、絶対的な弱点が発生する。

全ての吸血鬼に適用される弱点は『聖水』を使い制作された武器による心臓の破壊』これだけである。ただ心臓を破壊しても意味はない。

それに加え『日光』や『銀』、『二ン一ク』など『血技』の数だけ弱点が増える。『血技』の強さにも比例する。

既に真祖が死滅した『日光』が弱点だつた血族の死に様が、教会所蔵の古い文献の記録に残つてゐる。

その真祖は『日光』を体積と同質量浴びる事で完全に死滅した。

その一世は『日光』を体積と同質量浴びる事で灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

その三世は『日光』を浴びて体が焼け爛れ、二四時間浴び続けた後、灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

その四世は『日光』を浴びて体の動きが極端に鈍くなり、捕縛されて心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

弱点についての一番の問題は、ティアも壱朗も弱点が分からぬ事だ。一人は同じ血技を持つ眷族が居ない為、血技を持つ事で生まれる弱点が、なんのかは分からぬ。最悪、他の吸血鬼に頼み、ティア自身が実験台となつて、調べてもらう必要があるかもしけなかつた。

しかし、日巫女の血族の血技は『予知』であつた。眷属はそこから派生したものが多く、眷属一人一人種類は違えど『本来知りえない情報を知る事ができる』というものらしい。

どちらにしろ、日巫女の血族は知りうと思えば知る事ができるのだから、隠しても仕方ない。開き直つて聞いてしまう方が、手つ取り早いとティアは考えていた。

おかげで、壱朗が真祖になる時期を『未来予知』で引き当て、ラマルティーヌ卿の血族に知られてしまつたのだろう。

そして、日巫女は恐らく壱朗が眷族を託すにふさわしいかを見定めるべく、ラマルティーヌ卿の血族に情報を流したのだ。これらの予測に関しては壱朗と同意見だつた。

その為、今の段階で日巫女に亡くなられると困るのだ。最悪自分が実験台になるが、壱朗がそれを許すとは思えない。

だから、日巫女には生きていてもらわないといけなかつたのであ

ティアは『あーあ。夜の回数減るなあ……』『——シャもきっと何百年後には、そういう事、言い出すだろおなあ……』と独占欲丸出しお事を考えながら、猫と戯れる子供にしか見えない少女に、何とも言えない意味不明な視線を送るのだった。

る。

第1-2話 周期の克服（前書き）

プロローグの第0-1話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

壱朗は日巫女を抱え、いつか分からぬほど大昔に来ていた。日巫女さえ落ち着けばすぐにあの時代に戻るのだ。自分と日巫女が存在しなかつた過去なら、いつでも良かつた。

壱朗はティアと連れ立ち、結界が完成した後も、自分が旅立つた直後に跳んで戻るという方法を、とらなかつた。

未来に跳べなかつた訳ではない。ティアに自分が会つているから、送り届ける必要があつたという理由もあつたが、本当の理由は『魔血晶』十六個目の、四回目の一千年の時期を、ティアに見られずに眠つて過ごす為だつた。

四度目の自殺陣病^{アボートーシス}を乗り切る為に。

それに耐える自分を見せたくは無かつたので、専用の冬眠墓地を作つたのだ。

そして、今の日巫女にも壱朗の時と同じく、恐らく結界で因子を抑え込むだけでは足りないだろう。生きている実感が必要になる筈だつた。壱朗の一回目までの時は、自分に痛みを与えて、お腹を満たしたりした。その実感とティアへの想いで耐えきつた。三回目、四回目には、符術もそれなりに使えたので、生きている実感を感じていた記憶を符で呼び覚まし、エンドレスで頭に流し続けた。どの時もそうして誤魔化している間に、抑え込んだのだ。

「旦那はん、こないなト」連れてきはつても、どないもならしまくんえ

「ふん。俺を甘くみるなよ。八千年で計四回も経験させられたんだ、何とかするぞ。だが、ヤリ方は好きにさせて貰うぞ……」

「え？ あ、ちょっと。そないなトコ。ん、いきなり触らはるやなんて……」

日巫女は慌てて、壱郎の手を抑えにかかる。しかし、壱郎の手から溢れる魔力の強さに、日巫女のそこは無理矢理、感度が引き上げられ、快楽の塊のような刺激がとめどなく襲いかかる。触れられているだけで、である。

「何だ。さつきは好きにしていいって、言つてただろ？」「言つたけど、もおつ、言つたけどお～。そつれはつ、ウチのつ、あああつ、子らを、ああつ、もおつ…………んうつ。ああつ…………あきまくん。ああつ。そないにしたら、あきまくんつてばあ……」

そのまま壱郎は、日巫女の腰まである艶やかな黒髪をどけて、首筋に唇を這わせる。それを手始めに身体を隅々まで触れていきながら、所々に魔力の塊を流し込んでいくと、何処に持っていたのか、人が四人は入れそうな黒い柩を取り出した。

そこに日巫女を放り込み、自分も入ると蓋をしてしまう。すると柩の足元から大量の札が溢れ、柩が見えなくなる勢いで張り付いていく。すぐに柩は札に完全に覆われて、真っ白になった。

札に完全に覆われる迄は漏れ聞こえていた、日巫女の押し殺した様な声も、耐えきれずに上げてしまつた艶やかな嬌声も、何一つ柩からは聽こえなくなつた。

壱郎は巨大な鉄球が連続して、ビルに叩きつけられる様な音で目を覚ました。

あれからどの位、時間が経ったのかは分からぬ。
延々と続く音に嫌気がさしてきた頃、隣にいる日巫女も口を覚ました様だ。

「旦那はん、何ですのん？　この音。逢瀬の最中で邪魔するやんて野暮やわあ」

「案外、本気で「レックスかもな。まあ、この極に居れば問題ない。東京スカイツリーから落としても壊れんや、こいつは」

「あれからどれぐらい経ったんやろか……」

「さあな。時計をみれば解るが……おい。何すんだ」

「嫌やわ、旦那はん。そう言う事を、女の口から言わすんが趣味なんどすか？」

「あんまりええ趣味やとは言えまへんなあ……」

壱朗自身を撫で回しながら、日巫女はそんな事を言い出す。

「言わすのが好きだと言つ訳ではないが、状況次第では悪くはつてそういう事じやなく。もう大丈夫なのか？」

「大丈夫おすなあ。もうあの時でかなりきりぎりやつたさかい、そないに時間かからんかつたんやろか」

「それはそうかもな。ほら、背中向ける。見えないだり」

「そう言いながら、日巫女に背を向けさせる。

「あん。もう、ちょっとは、優しゅうしておくれやす」

日巫女の背中には、既に魔方陣は浮き出ておらず、一安心と言つたところだった。後は再発がないか確認し、数口問題ないのであれば、それで乗り切つたという事の筈だ。

そして、日巫女には黙つたまま、右手で『魔血晶』に触れ、記憶を探る。

「あつ、あかん。いくら旦那はんやいつたかて、女の秘密を勝手に……ああん、もおつそういう時だけ、そんな触り方するつ、やつな

おなな記憶

んてつ、旦那つ、はんのつ、ああああつ、すけべえ、あつあつあつ、
いけずう！」

日巫女に生きている実感を無理矢理感じさせる。それは眠つてしまつ前まで触れていた時と同じよつて、限界まで日巫女の快楽を引きずり出す。

「ちゃんと知つておかないとな。自分の女の過去ぐらいは。そう思うだろ？」

後ろから抱きしめられ、前に回された左手にソロを刺激され、抵抗できない日巫女は、壱朗に文句を言い続ける。

「もあつ。都合のええ事、ああつ、言わつはつてからにつ。後でつ。つつつああつ。旦那、つはんつのも。見せてつあつ、あつ、あつ、あつ、もありますえつ。……はあつ」

日巫女は駆けあがつてくる快楽に抗えず、背を反らす。後ろの壱朗の耳元で、心地よい吐息と共に嬌声を上げる。そんな日巫女に意地悪い笑顔で答える壱朗。

「気が向いたらな」

「ずるいわあ。そんなんつ、あつあああああつ、あつ、あつ、ううん」

耳元で囁かれた後、耳を甘く**なぶ**囁られ、日巫女は更に追い詰められていぐ。

日巫女は、血を吸う際に快楽を貰える事はあつても、貰えられた経験は少ない。

しかも今は、かなり弱つている。

そんな日巫女に、壱朗の攻めは耐えられる筈もなかつた。

「あつあああ、ああつ ううんつ ああ つ」

壱朗はそんな日巫女を他所に、見たかつた物が見つかり、そこで口と手を止める。そして記憶に意識を集中し考え始める。

やはり、旦巫女は吸血鬼の弱点を見れる。それなりに相手の情報が必要な様だが、可能な様だ。ふむ、コレはラマルティーヌの弱点を見ている時か、あいつは大地？ 埋めればいいという事か。ああ、水だから大地に吸收されて形が保てなくなる様なイメージか。後は……旦巫女は火か。焼き尽くす、か。可能なようで難しいな。吸血鬼に限らず人間もだが、肉体というのは案外燃えきらない、跡形もなく焼き尽くす火力など短時間では簡単に起こせないな。火葬が良い例だ。それなりに時間がかかるからな。しかも、黙つて燃やされている訳がないのだ。その間に反撃されない訳がないし、逃亡されるだらうしな。俺たちの弱点も、そういうものなら良いんだが……

「…………はんつ…………もつつ…………じりつ…………！」

「んん？」

旦巫女は壱郎を拗ねた様な目で睨む。

「もおつ！ こないな事したまま、他の事に集中せんとつて。旦那はん、おかしいんちゃう？」

壱郎は呴えたままだつた唇を離して苦笑し、見たものとは関係ない事を話す。

「記憶を見て気付いたんだが、花魁や舞妓と色々やつてたんだな」

「花魁やつた頃は、吉野太夫つて呼ばれた事もあるえ」

「それで言葉が混じつてるんだな。俺の大阪弁と標準語みたいなものか」

「せやなあ。全部、京訛りで喋らはる人には同じ様に返しますな。そうやない時は、相手はんがわかる範囲迄しか、訛りでは喋らへんなあ。旦那はんもせやろ？ 所々で関西弁が出てますえ？」

「そういえば、と会社勤めの頃を思い出そうとする壱郎。

「…………ふむ」

「…………だから、旦那はん」

「ん？」

「そないなトコに手え、入れたままにせんとつてつて。恥ずかしが
ればええのんか、怒りやええのんかわからしまへんわ……」

言われて気付き、抜いて触れる場所をすらす。だが壱朗が触るの
をやめないのは、それを望んでいると感じるからだ。

案の定、日巫女はそのまま身体の向きを変え、胸に頭をのせてく
るので黙つて引き寄せると『あん』と可愛らしく囁き、体重をかけ
てくる。

「すまんな。

……一応、経験から言つと再発がある場合があるが、数日問題ない
のであれば、それで乗り切つたという事の筈だ。あれから一日半は
経つてるな」

「ほんなら、あと数日は日那はんを独り占めできますなあ。外でれ
ますのん？」

出れるんなら水浴びしたいわあ、今そのままじゃ色々困りますよつて
日巫女のお腹辺りが所々、血が張り付いて乾燥したかのように力
サカサになつてゐる。おもに壱朗のせいだつた為、壱朗は責任を感
じたが一応、忠告はする。

「レックスとかいたら大変だぞ？ 弱らせるのに苦労したんだあ
いつは」

「旦那はん……生身のままで怪獣と鬭わはつたんどうか……無茶し
はりますなあ……超の星のお人みたに、巨大化しはるんぢゃいま
すのん？ ……三分だけ」

「いや……」

「レックスは怪獣ではない。そう思しながらも、当時を思い出す。

あの時は好きで挑んだ訳ではない。過去に跳んだりするのに必
要な条件を模索していたら、テストで時代の認識などを間違えて、

誤つてトレックスの前に跳んだのだ。過去のアメリカ大陸にそんなものが居ると知つていたら、研究の為にアメリカには行かず、ロシアに行つただろう。

しかし『怪力』のおかげで力はこちらの方があるのだが、いかんせん身体の大きさが違う。『霧化』で牙を避けながら頭上に移動し、墜落として頭にダメージを与えて、動きが鈍つた内に元の時代へと逃げ出したのだ。のたうち回っていた様だが生きていたので、問題ないだろ？

ヨーラシア大陸北部に、トレックスがいなかつたという保証はないのだが、今の壱朗もそんな知識はない。しかも、はるか未来でそのトレックスの骨が発掘され、壱朗の碎いた頭の骨が複雑骨折になつており、発掘した考古学者たちにパズルをさせる事になつた事は、誰も知らない。

とりあえずその事は忘れ、日巫女の望みをかなえるべく棺を開ける。

「む、えらく眩しいし、暑いな……」
「棺の中の方が快適やなんて、ウチらしいけど、けつたいな話どすなあ……」

実は太古には現代の人間では耐えられない、ウイルス性の病原菌などが多数存在する。するのだが、吸血鬼のDNAや細胞は、むしろそれ自身が吸血鬼^{ヴァンパイア}ウイルスと言つて差し支えがない代物であり、そんな病原菌^{ウイルス}とともに負ける筈もなかつた。

そして壱朗は空氣を読んで、あえて 気付いてはいたが日巫女が騒いでも面倒なので 黙つていたが棺の周辺の地面には、そのあたりを繩張りにしているのか、マンモスのモノかと思われる足跡が山ほど残つていた。

とりあえず、地面にめり込んだ棺を浮かせ、そのまま『浮遊移動』で飛んで川か湖を探す。付近には見つからず、海だと意味がないので更に上昇し、琵琶湖の原型を探す。

「えろい高いトコまで上がるんどすなあ」

「海水の塩水で体を流したいか？ どうせなら琵琶湖の方がマシだろい」

「せやなあ、海水は嫌どす。旦那はんに全部お任せしますえ」
そう言つて日巫女は壱朗の胸にしなだれかかり、力を抜いている。恐らくまだ体力が回復していないのだろう。懐中時計の時間から、まる一日は日巫女を攻め、自分もついでに満足させてもらった為に、体力を奪つている。日巫女も今は立てないかもしれない程の筈だった。壱朗が日巫女にも飛べと言える筈もなかつた。

それなりの高さに到達した時点で、湖であるうもののを見つめた。壱朗の知つている琵琶湖とは形が違うが、『まあ、大丈夫だろい』と琵琶湖だと思われる湖へと跳んでいく。

「日巫女、もうすぐ着くぞ。起きろ」

「いやどす。旦那はんがこのまま湖で洗つておくれやす」

「おい。そこまでさせるのか？」

「旦那はんのにぶちん……腰が抜けとるんどす。やりすぎどす。お腹の中も……」

それ以上を言わせる訳にはいかない。そう壱朗は判断し、すぐには了承する。気付いてはいても、頭が回らないあたりは壱朗らしいのだが。

「わかった！ もづ。これ以上ない位に綺麗にしてやるから、何も言つな」

「大昔の湖つて、入つても綺麗んやろか……」

「あーそうだな、日巫女お前は棺桶で待つてろ」

「どないしはりますのん？」

日巫女は思いつかないのか、不思議そうに首をかしげていた。その仕草はミーシャに似ていて ミーシャが真似したののだろうが 可愛らしいモノで、壱朗は自分の鼓動が高鳴るのを感じていた。

「ん。湖の中の水分だけ取り出す。取りあえず風呂を作るか」

壱朗はそう言つと、湖の付近の平らな土地を拳で殴り、穴を作つていぐ。一人ぐらいは余裕で入れる程の大きさになると、どこかへ飛んでいき、大きな岩を持つて帰つてきた。その岩を碎き、穴全体に敷き詰めた後、上から蹴つて圧力を与え、固定している。吸血鬼の『怪力』がなければ、絶対にできない岩風呂造りだつた。

「旦那はん。結構、野性的なお人やつたんやな……」

「まあ、なつ。昔に跳んだは良いが、風呂と便所には苦労したからなつ」

岩を、手頃な大きさに割りながら畳つ辺り、壱朗も早く入りたいのだろう。

なんせ汗と体液でベトベトだつたり、カピカピだつたりするのだ。このまま戻れば、ティアの嫉妬のお仕置きが壱朗を襲うだろう。

などと話している内に水を入れるだけになる。壱朗は火炎球を湖に打ち込み、大量に水を蒸発させる。そして氷柱球^{氷結符}で水蒸気を集め、即席風呂へと放り込む。さらにその氷柱球を火炎球で溶かし、同じ火炎球で焼いた岩を放り込む。すると水の温度が上がる。それなりの温度まで温めれば、風呂の完成だつた。

「はあ、上手い事考へはりますなあ……旦那はんと一緒にやつたら、風呂には困りまへんなあ」

そう言いながら、壱朗に向けて両手を広げる日巫女。要は抱き抱えて入れる、という事だろう。そう理解し、入れてやる事にする。

分かつていていた事ではあるが、日巫女の肢体は美しかつた。日本人離れした腰の位置、透き通るような白い肌。唇や所々に見られる、桃色な箇所までもが美しい。壱朗がつけた物がなければ完璧だつただろう。

そんな日巫女には先に入つて貰つたまま、壱朗は少し離れて、もう一個同じ風呂を作る。そして、湯は入れずに置いておく。

「さて、俺も入るか。服は……後で洗わないとな。洗うとこう程はできないがな」

「もう一つは何に使いますのん?」

「どうせ、こつちはかなり湯が汚れるからな。戻る前にもう一つで入つてから戻る事になるだろ?」

「帰らはる前に、匂い落とそやなんて。そないにティアはんに氣い使わはつたら、今一緒にあるウチの立場がおへんやおまへんか」

何故か初めて会つた頃よりも、精神年齢が下がつた氣がする日巫女の態度に、ちゃんと考えてあつた言い訳の理由と行動を実行する。日巫女を後ろから抱き抱え、逃がさない様にして、今度は本気で抱き始める。

「そないに抱きしめはつたかつて、誤魔化されやしまへんえ

「本気でそう思つてるのか?」

壱朗に顔を向けた日巫女は、そのとてつもなく意地悪そうな笑顔に不安を覚える。

「え? 旦那…………はん?」

「さつきまでのものはお前の可愛い嬌声は聞こえても、悶える姿が見れなかつたら? 今度はそれも含めて本気で可愛がるからな? その後の為のもう一つの風呂だ。こつちはすぐに使えなくなる。さあ、お仕置きだ。覚悟は…………してなくとも止めないから…………別にいいから

壱朗は少しだけ不満だったのだ、確かに吸血鬼は闇でも見通せる。しかし、それは見えるだけであつて、昼間と全く同じように見える訳ではない。声は堪能したが、視覚的には堪能できていないので

た。

「う、ウチがお仕置きされるん？ なんでっ」
「余計な事ティアの事考えたら？ そういうのは、ティアが居る時だけにしどけ」

壱朗は先程までの自分の行動 最中に他の事を考えたりしていった事や、ティアに怒られるから洗濯はしようと考えていた事 は棚に上げ、それが当たり前だと言わんばかりに、日巫女にお仕置きをし始める。快樂の中に本氣で叩きこむというお仕置きを。

「う、ウチが悪いのん？ ちよ、旦那はんつああつんつ
「どつちが悪かろうが、もうどつでも良い。お前を堪能させろ。それだけだ」

日巫女が腕だけで逃げれる訳もなく、壱朗にされるがままになつていいく。

「待つてえ、まだウチ、腰がつ、ああ つ。ふつううん。
ちよ。わつわまでとつ。ちやいすぎつ。あああつああつ―――つ
！」

「どうせ抜ける腰だ。今からわつでも関係ない。言つたら。本氣だつて」

日巫女はその後に一田かけて、壱朗を甘く見ていた事を理解する。八千年。言葉で言つるのは簡単だが、とんでもない年月だ。その間で蓄積された技術に、とてもない魔力。どちらかだけだったにしても、日巫女に耐えられるはずもなく。日巫女は壱朗の思うがままに、快樂に溺れ、氣を失い、そして快樂に目を覚まし、更に氣を失う。合間合間に吸わせられる壱朗の血が、日巫女の腹を満たし、徐々に魔力を回復する。真祖同士での、魔力の上乗せや強化はできなくとも、空腹を満たす事や魔力の回復はできる。体力と腰だけは、どうにもならなかつたが。

「あかん、あつかんつってえつ！ うひ、壊れつ、壊れて、まうつ、てええつつあああつ――――」

とりあえず、壱朗の魔力が周辺の獣を威嚇していなければ、間違いない獣に襲われるべらい、日巫女の艶やかな嬌声は周辺に響きわたっていた。

のちに壱朗は、『あれを京都でやられていたら、間違いなく警察に捕まるな。猥褻物ナント力法だつたか？』などと言つていたが。実際は体力も魔力も少なくなつていた為に、抵抗らしい抵抗もほとんど出来なかつただけで『普段なら、あそこまではしたない声上げたりしまへん』と日巫女は拗ねたように言つていたが、内心では『たまーになら、ああいうんも良いかも』と思つっていたのは日巫女だけの秘密であった。

そんな秘密の記憶も五百年後には、壱朗に覗かれてばれるのだが。

第1-3話　酒盛り（前書き）

プロローグの第0-1話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

壱朗が日巫女と共に、西暦2100年4月19日に戻つて来た時、最初に行つた事は服屋に飛び込む事だった。

壱朗はまずは一人で、昔は大根も売っていた事もあるという大型一般大衆向け洋服専門店に入り、自分用の服を一式揃えた。その後、日巫女用におかしくない程度のジャージとサンダル、そして大きな鞄を買って、彼女を待たせている林へと戻つた。

「旦那はん、遅おすえ。さびしゅうて、死んでしまつトコですえ」「アホか。そんな兎みたいな可愛げがあるなら、俺は苦労してない」「ありますえ？」

「どにに？」

「ほら、兎みたいに白い肌、兎と同じピンク色の唇に……」
そう言つて肌を見せつけるように、汚れて傷んだ着物を脱ぎ捨て、壱朗の首に抱きついてくる。日巫女は壱朗が少し意識している事を表情から読み取ると、さらに胸を擦り付け行動をエスカレートさせる。

「ほら、旦那はんに擦れてウチのピンク色の先もこないに……『わかつた。日巫女は十分兎みたいに可愛いから!』……もお、旦那はん、そないにはつきり可愛いやなんて言われたら、ウチ……」

「時間ないんだ、勘弁してくれ」

「…………仕方おへんなあ。この一週間、楽しませてもうたよつて、堪忍したげますえ。でも旦那はん。いくらなんでも、ジャージは酷いんやおへんか?」

「お前の洋服の趣味……はともかく、サイズが分からなかつたんだよ。だから、とりあえずはそれを着てくれ。今から一緒に買いに行

日巫女は急に態度を変え、いそいそと黒いジヤージを身につけ始めた。

「嫌やわ、『デートのお誘いやねやつたら、先にゆうてくれはらんと。ほんならすぐ』に、着替えさせてもらたのに。日那はん、いけずやわあ」

日巫女の態度に不安を覚える壱朗。

「話をする前から既にからかつてただろうが……」

「そんな、からかうやなんて、全部本気じすえ」

まだ、半裸に近い状態なのにも関わらず、本気を証明しようと再度にじり寄る日巫女に、『しまつた、また脱線する』と危険を感じ、先に日巫女を止める。

「あー分かつた。だから着替えと片付けが先！」

気配を感じる。一般人だろうが偶然だろうが、『自分の女』の肌を誰かに見られるのを良しとするほど、心は広くないんでな

「日那はん。独占欲は、えろおつよおおますなあ」

指で口元に触れながら言う、その仕草と表情はとても嬉しそうだった。

自分が独占したいからなのか『自分の女扱い』に上機嫌になるのは、過去の一週間で壱朗が見つけた、日巫女の可愛い一面でもあつた。

着替えた日巫女の着物と、簪などの髪飾り一式を、先程買つたばかりの大きめのダッフルバッグに詰めて、肩にかける。

「さて、まずは風呂からだな。臭うか？」

「そないな事、あらしまへんえ。服だけで全然ちやいますえ。まあ、髪だけはどうにもアレドすけどなあ」

壱朗に鼻を向ける事なく言い切る日巫女。吸血鬼が、嗅覚も自在に強化可能だからこそその事だった。

いへり、壱朗特製簡易筋風呂で体を流しても、流石に髪は石鹼やシャンプーがなければどうしようもなかつた。実は壱朗は石鹼等も作れない事もないのだが、原材料を調達する植物が、太古の植物では理解不能すぎた。

「だなあ。ちよつと歩くが、風呂だけ入れる旅館があつたんだ。そこのに行ひつ」

「逢引き専用の旅館でもよろしあすのに……」

「そんなトコ行つたら、買い物どころじや無くなるだろ？が。ほら、行くぞ」

そのまま出来るだけ山道を通り、旅館付近で表通りに出て、旅館へ向ひ。

特に何事もな……い筈もなく。日巫女が家族風呂にしたいと嘆泣きし、周囲を気にした壱朗が渋々認め、中に入れば日巫女が壱朗を誘惑し、壱朗がお仕置きに気をやらせ、寝てる間に髪まで全部、洗つてやつた。

その後。最近出来たのか、まだ真新しい大型ショッピングモールに向かい、日巫女の洋服と一式を買った。洋服の上下と靴を選ぶ分には問題無かつたのだ。だが、流石に下着を選んだ経験は少なく、何となく肩身の狭い気持ちでいっぱいになりながら、日巫女の下着モデルショーに耐えていた。居心地の悪そうにしている壱朗に、見せつける事だけが目的の下着モデルショーは、試着室で開催されている。

日巫女は自分をよく知つていた。どの姿勢が妖艶さを増すのか、どんな仕草が男の欲情を煽るのか、理解し、そして今は壱朗の為だけに実行された。流石に襲いかかり試着室に入る、という事はなか

つたが……何とか耐えていただけだが。

そんな壱朗の反応を楽しむ為に、次々に見せられる下着は、白、黒、赤、青、黄、桃、裸、橙、紫、水色、水玉、レース、ストライプと、とじまる事を知らぬかの様に延々と続いた。

次々と出てくる色とデザインに、壱朗は『何でこんなにも種類があるんだ』と思つ。そして苛立ち半分、いや、二割程度と興奮が八割で構成された、自分の感情を必死に抑えていた。何時の間にか何処かへ吹っ飛んだ、当初の居心地の悪さは、全てが終わり『お会計を』と言つ、女性店長らしき人の声を聞いた瞬間、数倍増しで返つて來たが。

結局、買った服は着替える一着分だけで、後は下着を山のように買い込んだ。壱朗の肩にかかつたダッフルバッグは、折り畳んだ羽毛布団でも入つていてるかのように、膨れていた。

そんなダッフルバッグを背負いながら、下着モ^{即席}デルショ^{スタッフ}ーの即席スタッフにされてしまつた、下着売り場の女性店員が一番不幸だったのかもしれない、壱朗は氣の毒に思つていた。

だが店員を生贊にし、自分は逃げた店長の後ろめたさからか、その日の売り上げ向上を理由に時給が上がつた生贊^{即席スタッフ}店員は、半年に一回くらいなら来て欲しいなあと考えていた事を、壱朗は知る筈もなかつたのである。

知つていたとしても、一度とその店には行かなかつただろうが。

壱朗が　　主に精神面で　　疲れ果て、ベンチに座つて、
日巫女が缶のお茶を持ってくる。

その顔は本当に楽しそうに、輝いており、それを見た壱朗の疲れが少しだけ和らいだ気がした。

「旦那はん、だらしないどすなあ。男やつたら氣張りやす」^{おの}

「樂しかつたる?」

壱朗は犬歯が見えるくらいの笑い顔で、田巫女に問う。

「…………聞かはるんどすか?」

そっぽを向く田巫女の顔は朱に染まっている。

「田巫女が言つたとおり、言わせるのが好きなんだよ」

「ええ趣味やとは言つてまへんえ?」

そんな軽口には答えず、話を続ける。

「一千年後も乗り越えたら、今と同じ顔にさせでみせる」

「やないな事、言つはらんとつて。生きたくなるやおへんか」

田巫女は顔を歪ませ、口を開けていない缶を壱朗に投げつける。

「自然に逆らつてゐ訳じやないと思つぞ。人間にも吸血鬼にも、乗り越える手段は用意されてる。それを掴めるかどうか、掴む意思があるかどうかだ」

缶を受け止め、言葉を吐きながら横に置くと、田巫女の腕を掴み引き寄せる。

「旦那はん、ほんまにいけずなお人やわあ。ウチをこないな風にはつてからに。責任、とつておくれやす」

「ああ、俺の存在が許される間は、な」

壱朗の胸にしがみついたまま、文句を言つ田巫女の声は震えていた。

「旦那はんのにぶちん。……」いつう時は嘘でもええから、絶対守るで言つはるもんじすえ」

「嘘はつかない約束なんだ」

「ティアはんと、ウチはちゃいます。上手い事騙されてあげますさかい、嘘ついて構やしまへんえ。上手い事、気付かん振りしたげますえ」

田巫女は自分以外を見ないでと言わんばかりに、壱朗の胸を叩きながら言つ。

「そつか。なら、嘘吐きになりたくなつたら、田巫女にこいつか……」

「ウチはええ女どすよつて、旦那はんを立てるのは任しだよなはれ

そう言つ口巫女には、彼女が会合前までは持つていたモノが無かつた。

妖艶な笑みで武装し、色氣と艶やかさの中に潜ませた氣然とした強さ。

一千年もの間、眷属を背負い続けた者の苦悩と覚悟。

そして、その苦悩と覚悟故に、眷属を託す決断。

託すが為の死ぬ覚悟。

全て、壱朗が知らなかつたモノ。

そして、壱朗が奪つたモノ。

壱朗が口巫女に与えなければいけない。

次の一千年までの支えを。

眷属を背負う事に押しつぶされぬ、強さを。

壱朗が背負う『漆黒のBlack Twice Octagon』にもやら

ない強さを。

想像する。

壱朗の右には、ティアが礼儀正しく立ち、

壱朗の左腕には、口巫女がしな垂れかかり、

壱朗の足にはミーシャがしがみついている。

これからの一千年の生き方を決めたとたん、腹が座る。

壱朗は口巫女を抱きしめ、『嘘』を吐く。

「口巫女は俺が居なくても、口巫女の眷属の、吸血鬼の頂点だ。俺が現れようがその中身が弱くなる事はない。俺は口巫女の強さを欲した。だから、いい女のままの口巫女が、俺の横で今まで通り、艶

かしく美しくあれ」

日巫女が疲れていた事も、死を望んでいた事も知っている、理解している。

だが、その機会を奪つた。

だから、強く居られる様にしてやる。

「かんななあ。ウチは、ええ女やさかい、一回口に出した言の葉は、引っ込められまへんのに……」

そう言って、笑う壱朗の唇を強引に奪う。それ以上は何も言わせない様に。日巫女は流れる涙も気にせず、その想いが伝わる様に強く、強く唇を重ねるのだった。

それは幻聴だったのか。

『旦那はんの嘘に騙されたあげますよつて、ウチの事、離さんとつておくれやす』

壱朗には日巫女の願いが聴こえた気がした。

……………やつして、日巫女は壱朗の左腕となつた

「……………？」

壱朗は、ティアの青筋を見ない様に目を逸らし、漬物を口にする。「せやから。今、話さしてもらつた通り、旦那はんがウチを無理矢理、手籠にしつたんどすえ。もお、ウチは旦那はんのモノにされてしまつたから。お傍を離れられまへんえ』

夢見る様に艶っぽい視線を、自分の下腹部に向け、意味深に撫でる日巫女。

「い、ち、ろ、う、せ、ま？」

ティアは、日巫女が傍に居る事になつた事を、本気で怒つている訳ではない。その過程の一部が気に入らないだけだ。

「うん、まあ、概ね、そんな感じだつたかな。多分」

間違つてはいないので、とりあえず頷いてしまつた壱朗。

「ほり、旦那はんもこう言つてはりますえ？」

「ま、まあ最後の『左腕』は、ちょっと脚色過多かもしけないが……」

「いえ、それは構いません……」

「左
んが……」

「それはいいのか……ティア」

壱朗にはあつさり許可するティアが分からない。

「パパ？ 私、座つて良いんだよね？」

やつぱりよくわからぬミーシャは、自分の場所だけは守る様子つもりだ。

「構いまへん。旦那はんがあかん言わはつても、気にせんでええさかい」

そう言つてミーシャに御猪口を渡す日巫女。

「いや、駄目だとは言わんが……酒はどうかと思つや」

いや、年齢的には問題ないはずだった。

そう、見た目が駄目なだけで。その可愛さで人を殺せそうなミーシャが酔っ払い、頬を染めて『パパ大好き』などと言わた日には、間違いなく壱朗は、自分の理性をガリガリと削る戦いに、赴く事になるのは必至だつただろう。

「私が問題にしているのは！ 何故、一週間もそんなトコにいたのか、という事です。あと、なんで二人でデートしてるんですか。此処ですつと待つてたのに！」

もちろん、言外に『どうせずっと抱いたり

？』と言つてているのは間違いなかつた。

話をしても怒られるのだが、大昔まで飛び過ぎて、日巫女が回復

した時には今度は、帰る為の壱朗の魔力が足りなかつたのである。今の状態で言つてもどうせ意味はないので、ティアの嫉妬と壱朗の失敗を行為で誤魔化せる時に、話をしようつと考へてゐる壱朗だつた。

そんな弱腰な壱朗の右腕へ、ティアは奪う様に抱きつき、何故か現在進行形で関節に悲鳴を上げさせている。対抗して左腕は、日巫女の何故か下着の感触を感じない、柔らかく心地よい双丘に挟まれて、壱朗を墮落させようと包み込んでいた。

「私は右でいいですよ。右の方が壱朗様は上手ですし。自家発電のばかりの頃のお手伝いも、右手の役目でしたし。昔に両利きを日指したが、左手では色々やりにくいつて言つてましたので。それに……」

勝ち誇るのはいいが、嫌な昔を次々暴露するのはやめて欲しい。そう思う壱朗の心は、ティアには届かない様だつた。

「なんやのんそれ、べつにどおでもええ事ばかりやし」

そう言いつつも、羨ましそうに右腕を見ながら、左腕を抱きしめる日巫女。

そんな日巫女に『勝つた』とばかりに鼻を鳴らし、右腕を抱き締めるティア。

そして二人に挟まれ情けない顔の壱朗と、その膝に座る顔の赤いミーシャ。

『何気に一番良い場所はミーシャの位置では?』と一人は思い始めていたが、自分の位置は譲らなかつた。何故なら

「何故、妾は酒宴が終つたら、帰らねばならんのじやー妾もこゝに残る!」

と言つて、どう見てもティア、日巫女、ミーシャのつり、誰かが
退いた瞬間に、場所を奪つ氣満々の『春の女王』。

「春はん、それは無理やと思つえ？ お迎えが向かつてきてるさか

いなあ」

日巫女の感覚では、後30分もしない内に到着しそうな気配だつた。

「この様な形で、力を持ちし方と再会できるとは。おお、『コレが狼男の一族が作つた特別製でしてな、儂らでも酔えますのじや。この頭が春のアホ娘の様に』

壱朗の隣で飲み明かしたいと、酒を注ぎ待つて『『『』』』

何気に『春の女王』をアホ扱いしている。

「いや、『『『』』』』

壱朗に勧められている酒は、普通の酒に『神酒』と呼ばれる水を混ぜた物だ。これを混ぜると吸血鬼でも酔うし、一日酔いも体験する事になる。

「大体ですな、最近は芸術が分からぬ者が多いのです。だから簡単に、燃やすなどと言つ愚行に走る者がいるのです」

とりあえず酔っ払い、桜の樹に愚痴を飛ばす、ラマルティーヌ。

「ラマルティーヌ卿、それは桜です。お酒を飲んでも正氣は保つて下さい。壱朗様の前ですよ？ なんならもう一、三枚燃やしましょうか？」

どうやらティアは、始めて酒に酔う様で、かなり危険だった。

「も、も、燃やしちゃ駄目ですよおー！ ティアさんへ正氣に戻つて下さいー！」

そんな七人の雑用係に、強制的に参加させられている、茶屋の従業員の壹与。

彼女はその『予知』に関する血技を使い日巫女を探す為、茶屋に戻つて準備しようとした所で日巫女を見つけたのだが、他の日巫女の眷族に教える前に日巫女に捕まつた。

ばらしたら三百年は苛めると脅されたあげく、どうせなんだから、

と花見会場と化した茶屋で給仕役兼料理人を務めていた。茶屋の備品の皿を、十分毎にゴミへと変化させながら。

ラマルティーヌの話しかけている桜の木の上で、可笑しそうに笑いながら八人の観察を続けている、金髪碧眼の男。ドレイク。

彼は中立でも味方でも敵でもない、と意味不明な事を言い、『ボクの立場が決まつたら正式に言つよ』と壱朗に聞こえる様に、他の真祖に声をかけて桜の樹の枝に座っている。

時々、壱与の作ったおつまみの皿と、酒を壱与に気付かれない様に盗んでいる。

おかげで壱与は、作つても運んでも足りないお酒とおつまみに首をかしげながら、茶屋の被害を増やしつつ頑張つている。

壱与以外は全員が気付いてはいるが、あえて触れようとしない。

それ故に彼は気配を隠す事もなく、壱朗を観察し、酒を楽しんでいた。

「旦那はん、これからどうしはるんえ？」

「そうじやな、壱朗殿。聞かせて欲しい」

「とりあえず、現状把握が最初かな……ティア」

「はい。私が調べたところ、『血の十字架』による血を捧げても良いという人間の方との意思疎通は、上手くいつていません。それは『血の十字架』を着けた方が、吸われた後に死んでいる事件の発生件数に、問題があると思います。ですのでこういった事件の解決と、政府機関との情報共有を行います。まあ今のところ、こちらが一方

的に送りつけるだけですが」

「『血の十字架』ですか～あれは～効果が薄い～みたいですね～なりよりは～いいみたいですが～」

『血の十字架』は吸血鬼に血をあげてもいいと考える人間が、体

『血の十字架』

『血の十字架』

『血の十字架』

『血の十字架』

『血の十字架』

『血の十字架』

のどこかに貼る刺青シールである。一応それを貼っている人は、夜間は血を吸われに街を徘徊している、とみなされている。見えない所に貼っていても、吸血鬼には分かるようになつていて。

これは、吸血鬼になりたい人しかやらない。しかし、若い人間は早期美容整形を受けている人間がほとんどの為、吸血鬼化にかなり抵抗がある。

誰だつて今の自分の顔が　本来あるべき姿だつたとしても
醜くなるかもしない可能性がある以上、嫌がるのは当然といえた。
逆に年老いた人の中には成りたがる人が結構いるが、吸血鬼が吸
いたがらない。理由は簡単だ。不味いからである。

結果、無理矢理襲う吸血鬼が減らないのである。それも痕跡を残
さなければ、少しはマシなのが。残す程度のやり方しか知らない
者は、吸い方も荒くなり、殺してしまつ事が多く、吸血殺人となる。
そして、それを知り提供者が減り、また犯罪が増えるという、悪
循環の繰り返しでもあつた。

「とりあえず、犯罪件数を減らしませんと、どうにもなりませ
んのです」

最初の懸念事項を述べる壱郎^{いよ}。

「パパ、あ～ん。……ん」

やはり訳がわからないので、壱郎の口に漬物を運ぶミーシャ。壱
郎の顎を頭に載せられ、グリグリされる。何故かそれでも嬉しそう
だ。

「あむ…………つて事だな。ま、まずは犯罪者吸血鬼の捕縛と引き
渡しだな」

同意し、方針を決めている壱郎。両腕は相変わらず動かない。

「しかし、それは反発を生まんかの？　妾^{わらわ}が眷属にも居そうじゃが

……」

自分の眷属をほつたらかしにしていて焦る、クロウディア。

「生むじやうなあ。儂はそれでもええと思つがな。秩序はどこかに必要じや」

眷属を統制しており、自分勝手な眷属は抱えていない『酋長』。

「ウチのところは眷族は増やさんよつにしてますさかいなあ……最後の子でも四百近い歳やよつて、ちやんと守つてると思いますナビ……」

…

自分の眷属の管理は、全て一世と二世の口巫女。腕は離さない。

「私はちやんと、声をかけて誘つ事を眷族に教えていますよ」

自信満々のラマルティーヌ。

「……ラマルティーヌ卿の所の三世さんは、えらいく態度が悪かつたですよ？」

生理的に嫌いらしく、ラマルティーヌには辛辣なティア。一いちらも離さない。

「あ、あれはちよつと、気が立つていただけの筈だ！ 全員が何時もそつな訳じゃない……はずだ。たぶん」

教えてはいるらしげに、徹底できているか不安を隠せなくなるあたり、かなり怪しいだろう。

壱朗はこの反応を見て思つ。吸血鬼はその存在を認められはしたが、本当の意味で人間との共存共栄は、かなり先になりそうだ、と

…

第14話 撒き餌（前書き）

プロローグの第01話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

ティアは壱郎の胸の上で、夢心地を楽しんでいる。

背中にかけた白桃色の長襦袢を、掛け布団変わりにして。

時折、壱郎が真剣な眼差しを、虚空に向けるので聞いてみた。

「壱郎様は、あれでいいんですか？」

「まあ、仕方ないよな。誰かが囮になる必要もあるしな」

「大丈夫だと思つてはいても、私は不安です…………あつ、いあつ」

繫がつたままの充足感を噛み締めながら、不安を口にするティア。

「ティア。毎回、吸血時に破瓜前に戻らなくてもいいぞ？」

壱郎は血を吸いたくなつても、人間の血は吸わない。多い時で、月に一度程しか欲しいとも思わない。そして吸う時は、ティアの血を吸う。ティアの姿は今までずつと十八歳に固定されている。壱郎が吸血を望む日だけ、処女だった頃の体に戻る。コレならば、ティアはいつでも処女の血を捧げられた。吸血鬼の、だが。

「嫌です。壱郎様には、私の一番美味しい時の血を、飲んで欲しいんです」

「それだと、抱かれる時に痛いだらうに…………んつ」

氣遣う壱郎の言葉を唇で遮り、『もつと』と、貪欲にねだる。

「つはあ。いいんです。壱郎様からもううモノだけは、痛みも甘美なんです。壱郎様から頂くモノで、私を満たしたいんです」

「おい……」

「言葉も、痛みも、血も、何もかも、もつと欲しい」

壱郎は薄々気付いていたが、確信する。

ティアの中に渦巻いているのは、日巫女への嫉妬だと。

「血を吸つて下さい。そして、吸わせて下さい。今、このまま、私の全部が壱朗様で満たされる様にして下さい」

壱朗は悔やみながら、ティアの頭を撫でてやる。ティアは絶対に、勝手には血を吸わなかつた。

10歳児の俺の血を、日巫女にも吸わせたのが引き金になつたか

三千年という時間は、長すぎたのかもしれない。

ティアは壱朗なしでは、もう、生きられ無かつた。

他の真祖に壱朗の血を少しだけ送つた時も、悔しさを感じていた。

『何故、私の壱朗様の血を分けなければいけないのか』と。

吸血鬼には、人間の血が必要。それは正解であり、嘘でもある。別に吸血鬼は、血を飲まなければ死ぬという訳ではない。

吸血鬼も生物だ。そうした視点で見れば理解できるかもしない。吸血鬼と人間は同じ様に食事を行い、栄養素を取り込む事ができる。

吸血鬼が一度の食事で得られるエネルギー量は、人間の何倍もあるが。

吸血鬼は人間の尺度で計算されDNA改良した食品より、自然食品を好む。

吸血鬼にとって食品よりも、高エネルギーを得られるのが『血』である。

言つなれば、人間で言つ高級食材だ。味わいも良く、エネルギー量も良い。

豊かな生活を楽しむ為には欲しい。そういった意味では同じだ。
それと同時に『血』は嗜好品だ。

煙草、珈琲、紅茶、菓子。

人間の嗜好品とは違うが、蝶鮫の卵
鶯鳥の肝脂肪
西洋松露攝取せずとも問題ないのは同じだ。
年代物の酒、キヤビア、フォアグラ、トリュフ辺りが有名だが……

高級食材で嗜好品。そういうたモノの本質を、知っているだろうか？

フォアグラなど、ガチョウに無理矢理餌を食わせる事で、生産される。

人間だろうと吸血鬼だろうと、変わらない。

他の生物の都合ではなく、自分達の都合で解釈し、選り好みしているのだから。

吸血鬼も、別に人間の『血』でなくても構わない。

動物の『血』でも問題はない。もちろん、吸血鬼の『血』でも。

ただ、人間の血液が最も美味く、人間が最もエネルギー量が多い
というだけだ。

年齢は全盛期に近ければ近い程美味しくなる。

個人差はあるが、二十歳前後が美味しくなる時期となる。

血の味を比べると、

処女の女性の血、

精通前の男児の血、

処女の吸血鬼女性の血、

精通前の吸血鬼男児の血、

非処女の女性の血、

精通後の男性の血

非処女の吸血鬼女性の血、
精通後の吸血鬼男性の血、
動物の血

という順になる。

一番美味しいのは、『処女の二十歳前後の間の女性の血』だ。

しかし、ある弱小吸血鬼は気付いた。

もしかすると、処女の年齢の姿で何千年も生きた吸血鬼の血は、
処女人間の血の美味さを超えるのではないか、と。

吸血鬼の場合は、真祖に近ければ近い程、美味となる。

その上、全盛期とは血の熟成により上がる為、歳を重ねる程、美
味くなる。

そう考えたのだ。

この解釈は、結果から言うと正しい。

残念ながら、この事実に気付いた吸血鬼は力が無かつた為、
眞実には辿り着けなかつたが。

この事実は、アボトーシス自殺陣病を超えた吸血鬼にしか、適用されなかつた
のだ。

壱朗が約六千歳の頃、ティアは千歳の誕生日を迎えて、壱朗に我が
儘を聞いてもらえる事になつた。そして、壱朗は激しく後悔しながらも10歳くらいの姿になり、精通前の壱朗の血をティアに与える。
その日、ティアは狂った様に吸い続け、壱朗は死を覚悟しかける事
になる。

壱朗が、本気でティアを氣絶させなければ、危なかつた。

壱朗は自分で飲んでみたが、別に何も感じない。

『好意』という要素があるからか、少年に対する特殊性癖があつた
から、そこまでになつたのではないか、と壱朗は判断した。

『確かに好意はあります。でも、ショタで特殊性癖はありません。それに、
そんなレベルでの話ではありません。その血の為に人類を滅ぼせと

言われたら、私は滅ぼします』と、自分は至つて正氣だと黙つて、アは、そう語つた。

壱朗はティアに正氣といつ言葉の意味を、辞書で調べ直させたい気分だつた。

だが、後にティアが自殺陣病アボトーシスを乗り越えた時に、思い知らされる。

今度は壱朗がティアを殺しかけた。もちろん、吸血による失血死で。

ティアの『壱朗様？ 全部差し上げますから、死ぬ前に初めても貰つて下さい』という言葉で我に返る。そして、ティアが吸つたの前処女時の事も含め、詫びた。

自殺陣病アボトーシスを乗り越えた壱朗だからこそ、我に返つたのかも知れない。

ティアは心の中で、愛されているからだと信じていたが。

そして、壱朗が12歳の姿、つまり精通後の姿だった場合には、ティアが吸血しても何も起こらなかつた。少し、美味しいという程度だつたらしい。流石にティアの初めてを、実験などという理由で奪いたく無かつた壱朗は、そこで諦め、訓練に切り替えた。

壱朗は10歳児の姿になつたまま、ティアと共に吸血の欲望を我慢する訓練、吸血に慣れる訓練を一人で行つた。狂おしい程の美味な血を一口だけ吸い、それを目の前にじつと我慢する。吸われる方は吸う方のほぼ全魔力を込めた符を持ち、襲いかかれば符を使う。という訓練を続ける事になる。

壱朗は自分を弱らせて訓練しなければ、ティアでは暴走を止めれないでの苦労した。しかし逆に、ティアは自殺陣病アボトーシスを自力で乗り越えた訳ではなかつたので、慣れるまで百年以上費やした。ティアは特訓中の事を『死ぬ時はあんなのがいいです。凄く気持ち良かつたです』と語つたが、壱朗は何故かティアに吸血されても、性的快感

は感じなかつた。

これは一人が、処女の人間を吸血した経験が少ない事から、起
こつた暴走だと理解した。また、吸血による快感は上位の者から、
下位の者へしか起こらない事も解つた。真祖同士だとどうなるのか
は、後に知る事になる。

会合の一週間後、壱与の自殺陣病アボートーシスが起こり、日巫女、ティア、壱
朗は確信する事になつた。
壱与の血は自殺陣病アボートーシスを超えた時点で、味が多少ではあるが変わつ
た。

壱朗、ティアの変化のように、劇的なモノではないが。
他には一千歳を超えている者はいない。

他に確認する方法はなく、日巫女の希望もあり、日巫女には破瓜
前になつてもらつ為に棺に眠らせ、過去へ飛ばし、肉体年齢の調整
を行つた。

生りたて真祖の血も試した。ミーシャにはヌイグルミ猫の特大人形を買い「与え

る事と、壱朗の血を飲ませる事になつたが。

そして、事実を確認する。壱朗はこの情報を外に出すべきかを悩
んだ。

『自殺陣病アボートーシスを乗り越えた吸血鬼の性的変化前処女や精通前の血は何にも勝る』と
いう事実を。

そして、壱朗は自身を囮にする事を決めた。

数名の真祖の元に10歳の姿で出向き、血を舐めさせたのだ。

効果観面アボートーシスだつた。

六千歳の壱朗ですら、自殺陣病アボートーシスを一乗り越えた 処女の血に我を

失いかけたのだ。

自殺陣病も乗り越えていない者に、耐えられる筈が無い。

護衛、というよりも楽しむ為について来た日巫女は、完全に見下して教えてやつていた。『旦那はんの足元に跪いて、『血の熟成』させたいから、過去に跳ばさして欲しいて言つてみ？ 涙流して懇願しあつたら、聞いてくれはるかもしれまへんえ？ その願い叶えてもらわはつて、六千年程熟成でけたら、旦那はんみみたいな血の味になりますえ？』と。

ウィルソン卿、ラマルティーヌ卿を含む、数名に体験させた様子を録画し、他の真祖へと送りつけた。時間凍結した血を添えて。もちろん、10歳児の姿の壱朗の血だ。

それだけで、眠つたままの真祖の一人と、未だ会えていない一人以外は中立を保つ事を約束しに来た。あくまでも中立だが。

ウィルソン卿など、舐めさせた瞬間に壱朗に飛びかかり、もつと吸おうとして『酋長』の重力により潰された。復活には三日はかかる。ラマルティーヌ卿はティアが目の前にいた為、コレクションを守らうと必死に耐えていた。

そして、昨日の晩は日巫女。今日はティアと、ベッドの中でもうただされた。

『何故、自分達を守る為に、壱朗自身を危険に晒すのか』と。

今の壱朗は、20歳の姿でティアと共にいる。

『守る、そう決めちまつたからな』

ティアの頭を撫でながら、そう呟く。

『やっぱり、壱朗様を送り出さなければよかつた……』

ティアは不満そうに呟づ。自分の事だけじゃないのが不満なのだ。

「それじゃ、俺とは会えないぞ？」

「むうー。じゃあ、もつと何度も千年を繰り返して、山ほど満足してから……」

志郎が撫でる手に力を入れ、髪の毛をかき混ぜる。

「あつあつ。ちゃんと綺麗に見える様に整えたの……」

更に不満そうに、頬を膨らますティア。

姉の事を秘密にして

「どうちにしろ、もう無理だつたわ。ティアに黙つたままでいるのも限界だつたしな。だからそんな事言つな。四人で暮らすのも悪くないぞ。きつと」

「ミーシャちゃんに、性を意識させないで下さいね」

「させない為に口巫女と順番にしたんだる?」

ティアはフンと、体ごと他所に向けようとすると、離れられない事に気付き、顔だけそっぽを向く。

夜は、もう片方がミーシャの面倒を見る。間違つても最中ミーシャが入つてこないよに。どちらが志郎と寝室を共にしてようが、必ずそうするとティアと口巫女の間で、決めてあつたのだ。ミーシャに性を意識させてしまい、自分達の回数が減つてしまわなによつに。

「ひひ。逃げるな

「わわわ。あつあつ。あああ。んつもつ。こいじやないですか。つ。

「ちよつとぐらうつあああつんつ」

志郎に先を弄られ、腰を揺すられ、すぐにもとの体制に戻るやうにされる。

「駄目とは言つてない。ちゃんと言えつて言つてるんだ」

「…………志郎様の心の声は『言わないまままでいてくれた方がお仕置きできるし、苛めてティアを愉しめるなあ…………』って言つてますが…………？」

志郎は『触れていると、何でも知りうと思えば伝わってしまうの』と頭の中で考えてみる。

「そうですね。何か考えますか？妨害用の札とか」「声に出してない言葉と会話するな。仕方ないけどな」そして、苛める為わざとはつきりわかる様に考えながら、口を開く。

「ティアに知られて嫌な事はない。困る事はあつてもな」本気で知られてもいいと思つてている事がわかつてしまい、嬉しくなつて真つ赤になるティア。

「ほら、つい嬉しくなつて真つ赤になるティアも、可愛いからな」「~~~~つ！」

ティアが背中にかけていた長襦袢を振り乱し、胸板を何度も殴り始める。壱朗は殴る手を受け止め、唇を重ね、絡め、流し込み、飲ませる。

壱朗は一緒に過ぐしてきた三千年の間、馴れさせない様、気を付けていた。

おかげで今では、恥ずかしいと赤面するのが、直したくても直らない。

壱朗は、可愛いコレを絶対に無くさないよう、と氣をつけている。

ティアも恥ずかしいと思いながらも、本気で直すそつと黙つておらず、求められている反応だと薄々気付いていた。

しかし、二人は知らないが、本当は吸血鬼のDNAのせいだった。ヴァンパイアウイルス

自分の主に求められる存在に、適応されやすいのだ。

主に強くあれと望まれ強くなる者や、嫌われて弱くなる者までいるのだが、それには未だ誰も気付いていない。

そんな力がもつ何年も前に働いて、悲劇は予定通り約四ヶ月前に起きた。

壹与は壱朗が、連れて来たという四世の吸血鬼を見ていた。そして、自分が置かれている状況が、良く分からなかつた。

「私は、何故、生きてるんだと、思います？」

目の前の四世の男は、全裸の上に『縛符』といつティアの作った符が、全身に巻きついている。パリミッシュに安置されていたミイラの様に。

「貴方も、死んでいる筈、だつたんですね、何で、生きてるんですね？」

四世の男は何も言えない。当たり前だ、口も符で塞がれており、視覚と聴覚以外は、何も役に立たなかつたのだから。

「このままじや、せつかく預言通り、田巫女様が助かつたのに……バレて、責任取らされたらどうすんだ！ ゴルア！ このグズがあ！ ちゃんと預言通り死んどけやあ！」

急に豹変した態度に、四世の男は訳がわからなかつたが、何もできない。

「ちゃんと、預言通りにしてやつからよ。ここで待つてろよ。」
そう言って、横に置いてある鞄から、銀色の杭と金槌を取り出した。

「コレでテメエの心臓をよお、しつかり破壊してやるよ。嬉しいだろお？」

そんな筈はないが、四世の男は逃げる事もできず、ただ心の中で死にたくないと叫んでいた。

壹与は銀の杭を持つ、自分の手が爛れるのも気にせず、四世の男の心臓付近に当てた。

そして、金槌を振りかぶったその時

「楽しそうだなあ、壹与チャンよ。おつと、それとも曾爺さんの仇つて言った方がいいかい？」

全裸のティアが前にしがみついたままの、同じく全裸の壱朗が、

壹与の金槌を真後ろから止めていた。

「彼方様へ流石にその格好で、来られますのはちよつとへどうかと

所々間延びしたりしていなかつたりと、内心では焦つてゐるのか
もしれない。

「何でさつきまでみたいに……テメエの本性晒さねえんだ、あ
あ？ オイ、三世の嬢ちゃんよ。テメエ、俺の事、舐めてんのか？
あ？」

「…………つ」

「ハツキリせえや！ このダボがあ！ ……つて感じかい？ 壱与

チャン？」

壹朗はティアを下ろし、ティアの身体中を『縛符』で覆う。もち
ろん、此処に来た時点で四世の男の目は『縛符』で覆われ、ティア
の肌は欠片も見せていない。

「壹朗様……動けませんが……」

『当たり前だ。動けたらその方がおかしい』 壱朗は目でそう言つて
いる。

「彼方様へ服の代わりとは言えへそつちの方がへえつちいですよ
間延びした喋り方を変えるつもりはないのか、首だけを後ろに
向けて喋つていてる。」

壹与の言つ通り、ティアの身体のラインがきつちりと出て、かな
り扇情的になつていてる。というか、ほとんど隠れていない。

胸は指三本分程の符が、横一列になり隠しているだけだった。下
も大差はない。あとは身体を一周する様に、符の帯が巻きついてい
るだけだ。

「ちつ、途中でお楽しみを止められたんだ。これぐらいいいじゃね
えか」

「壱朗様、眞面目にお願いします…………あとで頑張りますから」

「お、マジか。じゃあ、全部ティアにして貰つか。よつし。そうと決まれば……『縛符』『護符』！」

今度はティアに巻きついていた符が剥がれ、横一列のまま、壱朗とティアを囮む。ティアは護符出で来たミーのワンピース、壱朗は護符のスラックスに上半身は裸のままだ。

「始めからこれでお願いします。全く、時と場合くらい考えて下さい。でないと私の苦労が……『ティアさん～』……なんですか？」

壱朗のお腹を拳でグリグリしながら、ティアはめんじくせそつて壱^{いよ}と^{いよ}を見る。

「ティアさんも～大概かと～思います～」

壱^{いよ}とは、壱朗の手は離されているのだが、振り上げた姿勢のまま動かない。

「その手。振り下ろしたければ、どうぞお好きに。何度でもやっていいですよ」

ティアは壱朗が止めた事を、あつさつ許可してしまつ。

「いいんですか～？」

「ティアは遊びが足りないよな～…………ベッド以外では、腹を殴られながら全く無視する壱朗に、壱^{いよ}とは金槌を振り下ろす。

「あ～あ、やつちやつた。これでもう駄目だな」

壱朗のいい加減な言葉とは裏腹に、四世の男は死んでもいなければ、傷一つなかつた。壱^{いよ}とは知らなかつたが、『縛符』と『護符』は一枚の札の表裏で出来てゐる。縛符で拘束されると外側からの攻撃から守られる。護符で守られると外側からの攻撃が束縛される。つまり、四世の男を殺したければ、壱朗の符を破る力が必要である。

「何ですか～？ 私の手が爛れるほど～聖水で作られた～銀の

杭^くなのに^く。しかも^く守るんですね^くこの^く四世を^く「

「当然です。壱郎様が考え、私が作つた符が、聖水や銀の杭如きで
破れると?」冗談はその身体と話し方、それと本性と、貴女の頭の
中身だけになさい」

ティアはあつさりと言ひきる。

「ティア、それだと冗談じやない処は、何もないんじや?」

壱郎が念の為聞いてみる。

「何を言つてゐるのですか。壱^{いよ}さんの身体^中に流れる日巫女様の血
と、彼女が着てゐる服があるじやないですか。その二つは冗談では
なく、真実です」

さも当然。と壱^{いよ}様なティアの態度に、壱^{いよ}は問う。

「……いつから? 何時から? 気付いてたんですね?」

言いながら時間を稼ぐ、何故か動かない身体を動かす為に。

「どの事を言つてゐるのかは分からぬが。その話し方とそこに転がつてゐる男の事なら、そいつを捕まえた時点から。その身体が子供に見えて、実は30歳の姿でもその身体だというのを知つたのは、4つ目の『魔血晶』ができた後。壱^{いよ}とチャンが眠られた後だな」

壱郎は楽しそうに解説するが、ティアは面倒くさそうにしている。
「だから言つたではないですか。自殺^{アボート・シス}陣病^{ジンボウ}を乗り超えた時点で話を
しましょう、と。どうせ同じじなのに、壱郎様が様子を見たいなんて
言い出すから……」

「へえへえ。俺が悪いのよ、と。さつて、何でこんな事したんだ?
……あ、そうだつた。言つて忘れてた。今、身体動かないだろ?
? 自殺も勿論できない。しかも、理由に納得いかない場合、壱^{いよ}
チャンも、日巫女も眷属も全抹殺だからね。ちなみに、日巫女の希望だからキャンセルはないよ。

「よく考えて話すんだな。三世のガキ」

「つ!」

壱^{いよ}は完全に、全ての道を閉ざされた事を理解する。逃げる事も
騙す事も。今の自分に許されるのは話し、その判決を待つ事だけだ、

と。

最後の一言で、壹郎^{いちら}とすり呼びはない壹郎^{いちら}、ティアは口を挟むのをやめる。

『此処からは壹郎様が八千年待った、曾お爺様の仇討ちなのだからと。

日巫女は、寝室で横に寝ているミーシャの頭を撫でながら、傍に置いた『銅鏡』で事の成り行きを見守る。初めて見る壹郎の怒りを知る為に。

そして、一度と会えないかもしね、自分の眷属の顔を記憶に残す為に。

第14話 撒き餌（後書き）

感想や評価を頂けますと作者が大変喜びます。
何卒よろしくお願ひします。

実はこちらの執筆は『義賊と貴族がメイドと主』
という作品の合間のお遊びとして書き始めました。
お怒りはあるかもしれません、あちらにも一読の価値が
ないかもしれません。

それでもよろしければあちらの方へ一読下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1259y/>

吸血鬼にも愛は必要？(仮)

2011年11月20日03時12分発行